

二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書

Futamata Castle and Tobayama Castle
The comprehensive report

浜松市教育委員会

2017年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2017



二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書

2017年3月

浜松市教育委員会



二俣城跡・鳥羽山城跡遠景（南から）

▲：二俣城跡 △：鳥羽山城跡

巻頭図版 2



1 二俣城跡・鳥羽山城跡遠景（西から）



2 二俣城跡・鳥羽山城跡遠景（北から）



二俣城跡 中仕切門（東から）

巻頭図版 4



1 二俣城跡 天守台（北東から）



2 二俣城跡 三号堀（西から）



二俣城跡 西の丸 I 南側石垣（南西から）

巻頭図版 6



鳥羽山城跡 遠景（南東から）



1 烏羽山城跡 大手道（東から）



2 烏羽山城跡 大手門（南から）

巻頭図版 8



鳥羽山城跡 東門（北東から）



1 鳥羽山城跡 東門（西から）



2 鳥羽山城跡 撋手門（北東から）

巻頭図版 10



1 鳥羽山城跡 庭園遺構（南東から）

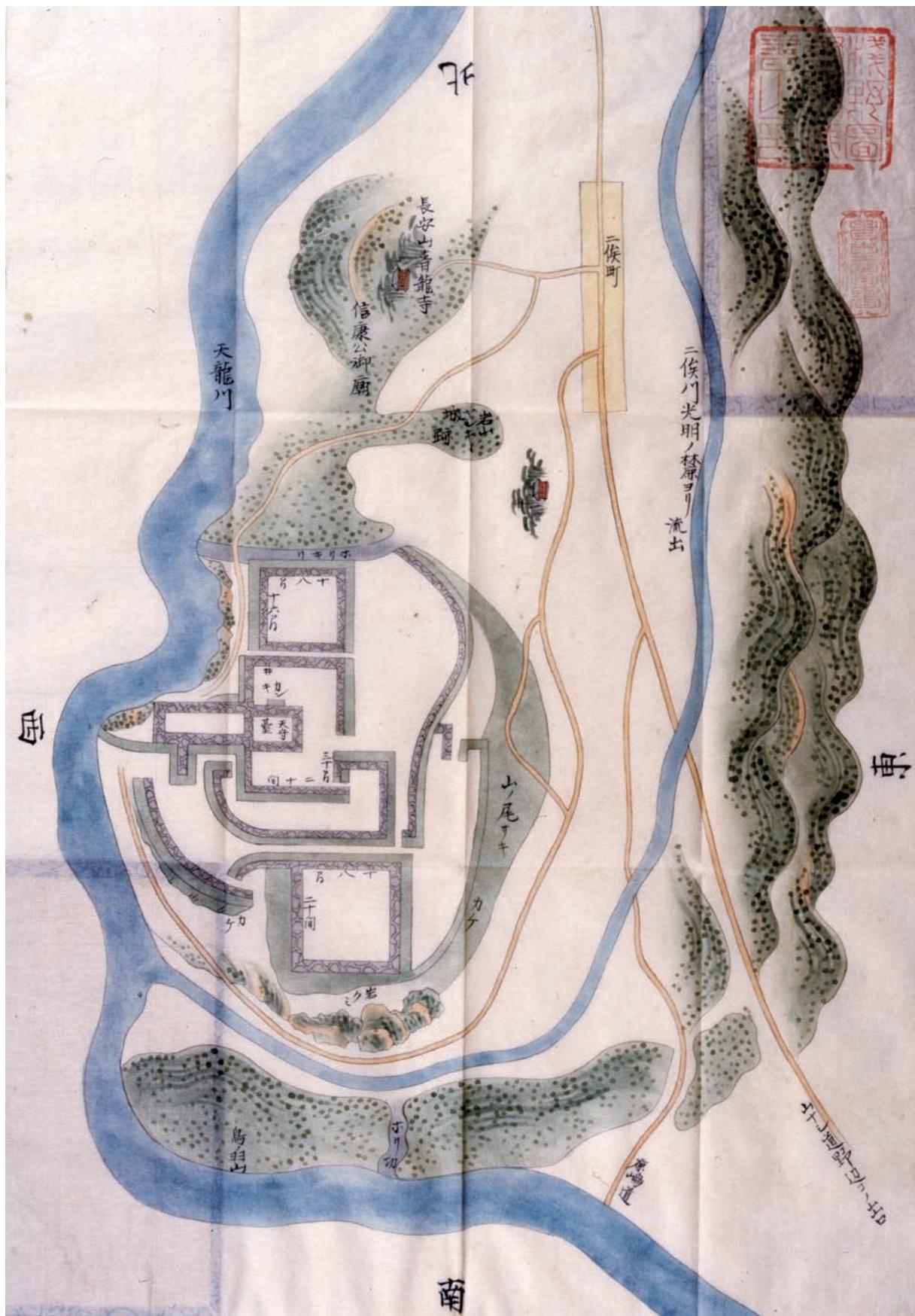


2 鳥羽山城跡 磁石建物跡（南東から）

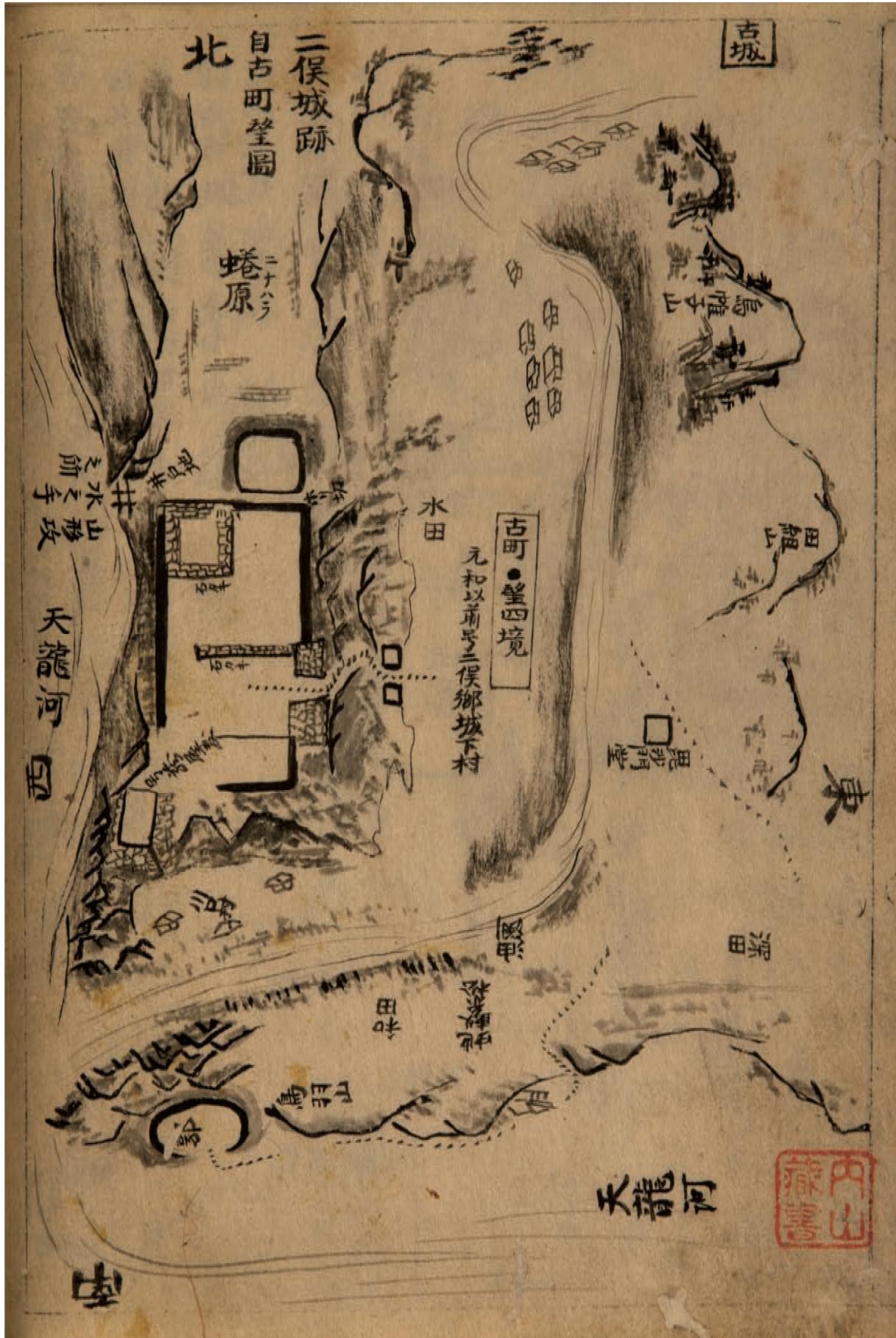


鳥羽山城跡 鉢巻石垣（北から）

卷頭図版 12

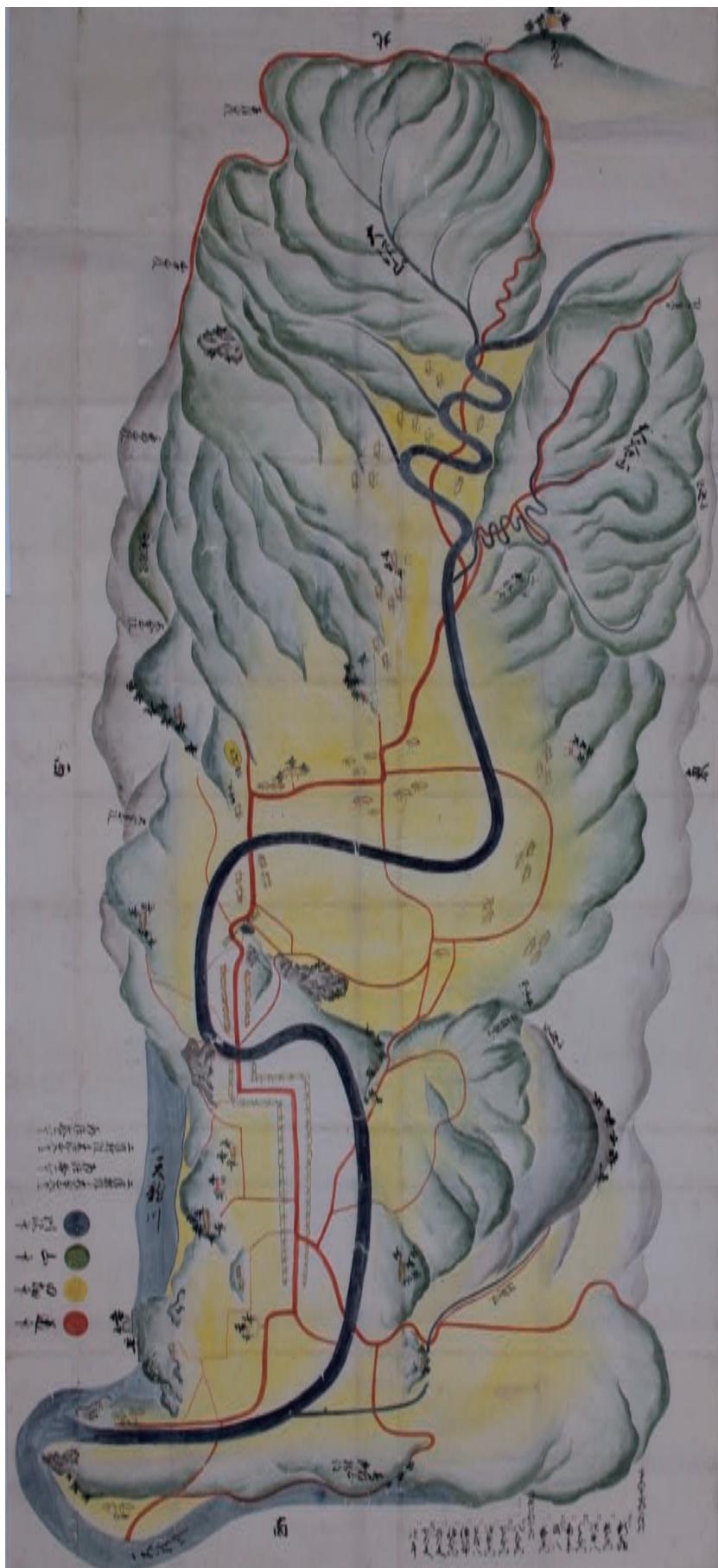


遠江二俣 浅野文庫 諸国古城之図



二俣城跡自古町望図 遠江国風土記伝七

巻頭図版 14



1 二俣村山東村絵図



2 二俣城 詳細



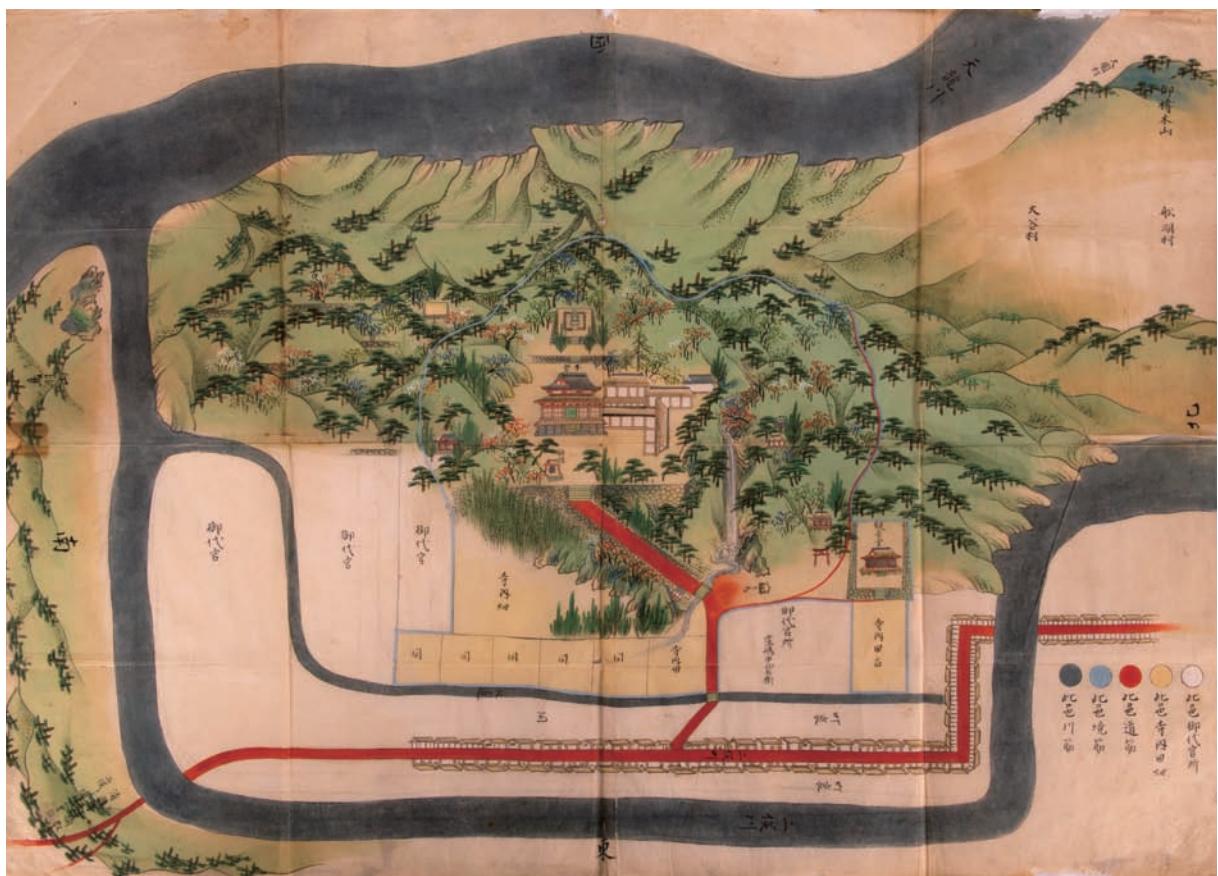
3 川口村 詳細



4 御代官所 詳細



1 二俣村山東村絵図南部詳細

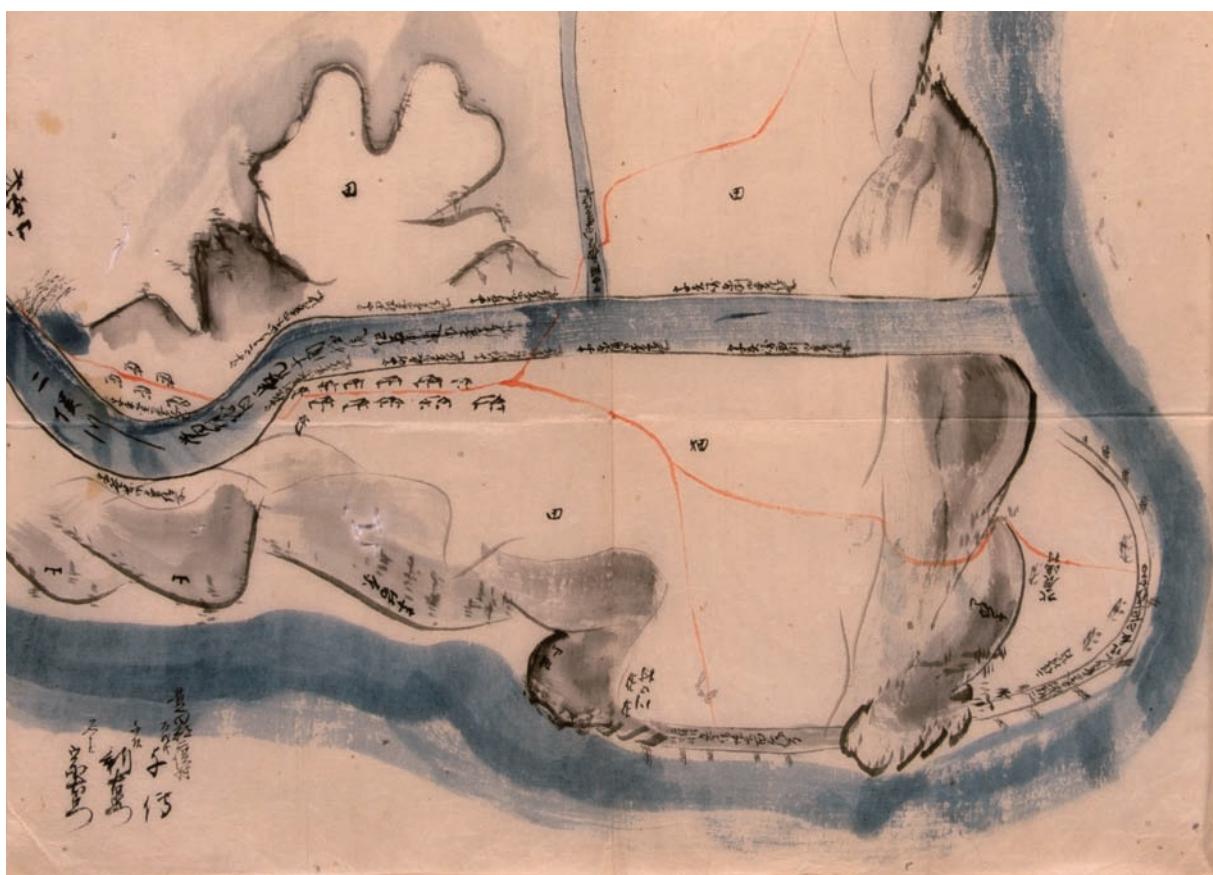


2 清瀧寺領絵図

巻頭図版 16



1 二俣川流域絵図 二俣村周辺



2 二俣村絵図

例　　言

- 1 本書は、静岡県浜松市天竜区二俣町に所在する二俣城跡及び鳥羽山城跡の考古学・文献史学・歴史地理学の調査成果を総括した報告書である。
- 2 二俣城跡及び鳥羽山城跡にかかる発掘調査は、天竜市教育委員会（当時）及び浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が1975年から2015年までの間、断続的に計13回実施した。調査体制や方法の詳細は第1章及び第5章に示した。また、二俣城跡及び鳥羽山城跡と密接にかかる篠岡城跡についても、1968年における発掘調査の成果を再整理して掲載した。
- 3 発掘調査の成果や歴史地理学の調査成果は、その都度公表されている。本書作成により、過去の調査成果の再整理や再検討を行い、内容を変更した部分がある。
- 4 総合調査を進めるにあたり、文化庁及び静岡県教育委員会の指導を得た。
- 5 本書にかかる執筆は、第8章以外を浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関）の職員が行った。執筆分担は目次に示し、節の中で執筆者が複数の場合は、文末に執筆者を記した。
- 6 第8章は坪井俊三氏（浜松市文化財保護審議会委員）、山村亜希氏（京都大学）、北野博司氏（東北芸術工科大学）、高瀬要一氏（元奈良文化財研究所）、本多隆成氏（静岡大学名誉教授）、千田嘉博氏（奈良大学）に執筆いただいた。なお、第8章の執筆者は、各論の冒頭に示した。
- 7 本書の編集は、鈴木一有、鈴木京太郎、和田達也（浜松市市民部文化財課）が協議のもとを行い、小杉直孝、坪井里恵、藤森紀子、渡邊三恵（浜松市市民部文化財課）が補佐した。附編の編集は、鈴木京太郎の総括のもと、小杉、渡邊が行った。
- 8 本書に掲載した現地調査写真は、井口智博・鈴木一有・鈴木京太郎・和田達也（浜松市市民部文化財課）が撮影した。絵図及び出土遺物は和田が撮影した。ただし、表紙及び巻頭図版1・2、Fig.27の撮影は、ナカシャクリエイティブ株式会社に委託した。巻頭図版12は、広島市立中央図書館より提供を受けた。
また、第7章において、曾我清臣氏（Fig.140、141、151）、坪井俊三氏（Fig.142、145、146）から古写真の提供を受け、第8章4において、大分市教育委員会、小田原市教育委員会、小浜市教育委員会、姫路市埋蔵文化財センター、福井県立一乗谷朝倉氏館遺跡資料館、益田市教育委員会から画像提供を受けた。
- 9 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りとし、遺跡毎に分けて連番を付した。
SH：掘立柱建物 SK：土坑 SP：小穴 SD：溝 SX：不明遺構
- 3 遺物の番号は遺跡ごとに分けて、それぞれ連番を付した。
- 4 本書で報告する土層及び遺物の色調は、『標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議局監修）』に準拠した。
- 5 本書で報告する土器等の断面と種別の関係は以下の通りとする。

□ 弥生土器・土師器・土師質土器

■ 須恵器

■ 灰釉陶器、山茶碗、国産陶磁器

■ 中国産磁器

- 6 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博

(財) 浜松市文化振興財団→浜文振

(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

教育委員会→教委

- 7 本書の作成にあたり、以下の方々および機関のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい（敬称略）。

足立順司、五十川雄也、岡寺良、加藤理文、河合修、北垣聰一郎、北野博司、佐藤正知、
千田嘉博、高瀬要一、武田寛生、坪井俊三、中井均、中野晴久、野沢豊秀、野村勘治、藤澤良祐、
堀内秀樹、本多隆成、松井一明、山村亜希

大分市教育委員会、小田原市教育委員会、小浜市教育委員会、姫路市埋蔵文化財センター、
福井県立一乗谷朝倉氏館遺跡資料館、益田市教育委員会

目 次

卷頭図版

例 言・凡 例

第1章 調査の経緯	(鈴木一有)	1
1 調査にいたる経緯		1
2 調査の方法と経過		6
3 調査の経過		7
第2章 立地と環境及び研究史		9
1 地理的環境	(鈴木京太郎)	9
2 歴史的環境	(和田達也)	15
3 調査研究史	(鈴木一有)	21
第3章 史料調査	(鈴木京太郎)	29
1 調査の概要		29
2 二俣城・鳥羽山城をめぐる史料		29
3 二俣城・鳥羽山城をめぐる絵図		34
第4章 測量調査	(鈴木一有)	39
1 調査の概要		39
2 二俣城の構造		40
3 鳥羽山城の構造		50
第5章 発掘調査		65
1 調査の概要	(和田達也)	65
2 二俣城跡の調査	(鈴木京太郎・井口智博・和田達也)	67
3 鳥羽山城跡の調査	(鈴木一有・和田達也)	92
4 笹岡城跡の調査	(和田達也)	117
5 発掘調査の意義	(和田達也)	136
第6章 歴史地理調査	(鈴木一有)	139
1 調査の概要		139
2 調査成果		139
第7章 近世以降の履歴調査	(鈴木京太郎)	149
1 調査の概要		149
2 近世の二俣城跡・鳥羽山城跡		149
3 近現代における二俣城跡・鳥羽山城跡の公園化		150
4 史跡としての重要性に基づく管理・活用		155
第8章 考 察		159
1 二俣城関連史料	(坪井俊三)	159
2 二俣城下町の空間構造	(山村亜希)	179
3 二俣城跡と鳥羽山城跡の石垣	(北野博司)	189
4 鳥羽山城跡の庭園遺構	(高瀬要一)	197
5 徳川・武田両氏の攻防と二俣城	(本多隆成)	201
6 二俣城跡・鳥羽山城跡の構造の特徴	(千田嘉博)	211
第9章 総 括	(鈴木一有)	217
1 文化財調査の内容		217
2 特筆すべきことがら		220
3 残された課題		221
4 今後の展望		224
附 編 (関連史料叢文)		236
図 版		

図 版 目 次

卷頭図版

- 1 二俣城跡・鳥羽山城跡遠景（南から）
- 2 1 二俣城跡・鳥羽山城跡遠景（西から）
 - 2 二俣城跡・鳥羽山城跡遠景（北から）
- 3 二俣城跡 中仕切門（東から）
- 4 1 二俣城跡 天守台（北東から）
 - 2 二俣城跡 三号堀（西から）
- 5 二俣城跡 西の丸Ⅰ南側石垣（南西から）
- 6 鳥羽山城跡遠景（南東から）
- 7 1 鳥羽山城跡 大手道（東から）
 - 2 鳥羽山城跡 大手門（南から）
- 8 鳥羽山城跡 東門（北東から）
- 9 1 鳥羽山城跡 東門（西から）
 - 2 鳥羽山城跡 揖手門（北東から）
- 10 1 鳥羽山城跡 庭園遺構（南東から）
 - 2 鳥羽山城跡 碇石建物跡（南東から）
- 11 鳥羽山城跡 鉢巻石垣（北から）
- 12 遠江二俣 浅野文庫 諸国古城之図
- 13 二俣城跡自古町望図 遠江国風土記伝七
- 14 1 二俣村山東村絵図
 - 2 二俣城 詳細
 - 3 川口村 詳細
 - 4 御代官所 詳細
- 15 1 二俣村山東村絵図南部詳細
 - 2 清瀧寺領絵図
- 16 1 二俣川流域絵図 二俣村周辺
 - 2 二俣村絵図

図 版

- 1 二俣城跡全景（北から）
- 2 1 二俣城跡 大手門（北東から）
 - 2 二俣城跡 大手門南石垣（北東から）
- 3 1 二俣城跡 大手門東石垣（東から）
 - 2 二俣城跡 大手門東石垣（北から）
 - 3 二俣城跡 揖手門（東から）
- 4 二俣城跡 中仕切門調査溝4（東から）
- 5 二俣城跡 中仕切門調査溝4（西から）
- 6 二俣城跡 天守台（北東から）
- 7 1 二俣城跡 天守台調査溝1（北東から）
 - 2 二俣城跡 調査溝1南側（北東から）

- 3 二俣城跡 調査溝 1 北側（北東から）
- 8 二俣城跡 天守台調査溝 2（南から）
- 9 1 二俣城跡 天守台調査溝 2（北西から）
 - 2 二俣城跡 調査溝 2 遺物出土状況（北西から）
 - 3 二俣城跡 調査溝 2 土壘内部の状況（南西から）
- 10 1 二俣城跡 二の丸（東から）
 - 2 二俣城跡 調査溝 5（南東から）
- 11 1 二俣城跡 調査溝 5（南から）
 - 2 二俣城跡 二の丸東側土壘（北西から）
 - 3 二俣城跡 調査溝 4（西から）
- 12 1 二俣城跡 三号堀（西から）
 - 2 二俣城跡 調査溝 6（南東から）
- 13 1 二俣城跡 南の丸 I 石垣（西から）
 - 2 二俣城跡 調査溝 8（北から）
- 14 二俣城跡 西の丸 I 南側石垣（南西から）
- 15 1 二俣城跡 西の丸 I 調査溝 14（西から）
 - 2 二俣城跡 調査溝 13（北西から）
 - 3 二俣城跡 調査溝 13 裏込詳細（北西から）
- 16 1 二俣城跡 西の丸 I から天竜川を臨む（東から）
 - 2 二俣城跡 西の丸 I 西側石垣（北西から）
- 17 鳥羽山城跡 全景（南東から）
- 18 1 鳥羽山城跡 大手道南東部石垣（南東から）
 - 2 鳥羽山城跡 大手道南東部隅角（南東から）
 - 3 鳥羽山城跡 大手道南東部巨岩と石垣（東から）
- 19 1 鳥羽山城跡 大手道（東から）
 - 2 鳥羽山城跡 調査溝 8（南から）
 - 3 鳥羽山城跡 調査溝 9（南から）
- 20 鳥羽山城跡 本丸東側石垣（北東から）
- 21 1 鳥羽山城跡 本丸東側石垣調査溝 7（北東から）
 - 2 鳥羽山城跡 本丸石垣南東隅角（東から）
 - 3 鳥羽山城跡 東の丸 I 西側石垣（北東から）
- 22 鳥羽山城跡 大手門全景（南から）
- 23 1 鳥羽山城跡 大手門西側石垣全景（東から）
 - 2 鳥羽山城跡 大手門西側石垣詳細（東から）
 - 3 鳥羽山城跡 大手門西側暗渠（南東から）
- 24 鳥羽山城跡 東門（北東から）
- 25 1 鳥羽山城跡 東門（北東から）
 - 2 鳥羽山城跡 東門（西から）
 - 3 鳥羽山城跡 東門暗渠（南東から）
- 26 鳥羽山城跡 庭園遺構（南東から）
- 27 1 鳥羽山城跡 庭園遺構（北東から）
 - 2 鳥羽山城跡 調査溝 1 磁石検出状況（南東から）

- 28 1 鳥羽山城跡 担手門東側石垣（北西から）
2 鳥羽山城跡 担手門西側石垣（北東から）
- 29 1 鳥羽山城跡 西の丸Ⅱ（南西から）
2 鳥羽山城跡 西の丸Ⅱ（北西から）
- 30 鳥羽山城跡 鉢巻石垣北西部（北から）
- 31 1 鳥羽山城跡 腰巻石垣（北から）
2 鳥羽山城跡 調査溝6（南から）
3 鳥羽山城跡 腰巻石垣南西隅角部（南西から）
- 32 1 鳥羽山城跡 本丸石垣南東隅角部（東から）
2 鳥羽山城跡 担手門北側石垣隅角部（北から）
3 鳥羽山城跡 担手門北側石垣隅角部（東から）
4 鳥羽山城跡 大手道隅角部（東から）
- 33 1 二俣城跡 主要出土遺物
2 二俣城跡 出土遺物（1）
3 二俣城跡 出土瓦
- 34 二俣城跡 出土遺物（2）
- 35 1 鳥羽山城跡 主要出土遺物
2 鳥羽山城跡 出土遺物（1）
- 36 鳥羽山城跡 出土遺物（2）
- 37 1 笹岡城跡 主要出土遺物
2 笹岡城跡 出土遺物（1）
- 38 笹岡城跡 出土遺物（2）

挿 図 目 次

Fig. 1 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置	1	Fig. 45 西の丸 I 現況	54
Fig. 2 二俣の三城の位置関係	2	Fig. 46 南の丸 II 現況	55
Fig. 3 発掘調査風景	6	Fig. 47 南の丸 IV 土壘	55
Fig. 4 現地説明会	6	Fig. 48 鳥羽山城跡傾斜量図（1）	56
Fig. 5 史料調査風景	7	Fig. 49 鳥羽山城跡傾斜量図（2）	57
Fig. 6 歴史地理現地調査	7	Fig. 50 鳥羽山城跡等高線図（1）	58
Fig. 7 検討会開催状況	8	Fig. 51 鳥羽山城跡等高線図（2）	59
Fig. 8 調査指導風景	8	Fig. 52 鳥羽山城跡現況図（1）	60
Fig. 9 広域地形図	10	Fig. 53 鳥羽山城跡現況図（2）	61
Fig. 10 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置	11	Fig. 54 鳥羽山城跡復元遺構図（1）	62
Fig. 11 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の旧地形図	12	Fig. 55 鳥羽山城跡復元遺構図（2）	63
Fig. 12 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の地質図	13	Fig. 56 鳥羽山城跡現況遺構図（西群）	64
Fig. 13 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の岩石露頭	14	Fig. 57 二俣城跡西の丸 I 作業状況	66
Fig. 14 二俣周辺遺跡分布図	15	Fig. 58 鳥羽山城跡東門作業状況	66
Fig. 15 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の遺跡分布図	17	Fig. 59 二俣城跡調査区配置図	68
Fig. 16 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置と周辺城郭関連遺跡分布図	18	Fig. 60 天守台三次元俯瞰画像	69
Fig. 17 諸大名の勢力範囲	19	Fig. 61 天守台の構造	70
Fig. 18 川口堤防と旧二俣川流路の現状	20	Fig. 62 西面埋もれ隅角	70
Fig. 19 二俣城を中心とする武田・徳川両軍の進路	21	Fig. 63 北西隅角調査状況	70
Fig. 20 武田軍の侵攻経路	22	Fig. 64 本丸天守台調査区詳細図	71
Fig. 21 二俣城略図	23	Fig. 65 天守台石垣立面図	72
Fig. 22 二俣城跡縄張図集成	24	Fig. 66 天守台石垣立面展開画像	73
Fig. 23 鳥羽山城跡縄張図集成	25	Fig. 67 天守台出土遺物	74
Fig. 24 二俣城の採集の瓦	26	Fig. 68 石垣検出状況	75
Fig. 25 鳥羽山城跡大手門外枠形西側の石垣	27	Fig. 69 中仕切門・二の丸北東部詳細図	76
Fig. 26 天正 3 年 家康の二俣城攻め陣配置図	33	Fig. 70 中仕切門出土遺物（1）	77
Fig. 27 二俣城跡・鳥羽山城跡航空写真	39	Fig. 71 中仕切門出土遺物（2）	78
Fig. 28 『遠江国風土記伝』所収の二俣城	40	Fig. 72 二の丸調査区詳細図	79
Fig. 29 二俣城における城内通路	41	Fig. 73 二の丸出土遺物	80
Fig. 30 本丸東側土壘	42	Fig. 74 二の丸東側土壘調査状況	80
Fig. 31 大手門東石垣	43	Fig. 75 二の丸北側土壘調査状況	80
Fig. 32 南の丸 I の現況	44	Fig. 76 三号堀調査状況	81
Fig. 33 三号堀	44	Fig. 77 三号堀発掘調査状況	81
Fig. 34 西の丸 II 土壘	45	Fig. 78 三号堀詳細図	82
Fig. 35 二号堅堀と岩盤	45	Fig. 79 三号堀出土遺物	83
Fig. 36 二俣城跡傾斜量図	46	Fig. 80 南の丸 I 詳細図	84
Fig. 37 二俣城跡等高線図	47	Fig. 81 調査溝 8 完掘状況（南東から）	85
Fig. 38 二俣城跡現況図	48	Fig. 82 調査溝 9 完掘状況（北東から）	85
Fig. 39 二俣城跡復元遺構図	49	Fig. 83 調査溝 9 土層の状況（南東から）	85
Fig. 40 『遠江国風土記伝』所収の鳥羽山城	50	Fig. 84 南の丸 I 西側石垣の検出状況（東上部から）	85
Fig. 41 鳥羽山城跡遺構群の大別	51	Fig. 85 西の丸 I 調査区詳細図	87
Fig. 42 鳥羽山城における城内通路	52	Fig. 86 西の丸 I 石垣構造復元図	88
Fig. 43 田代家通路	52	Fig. 87 6 次調査石垣検出状況	88
Fig. 44 鳥羽山城跡石垣想定復元図	53	Fig. 88 7 次調査石垣検出状況	88
		Fig. 89 西の丸 I 出土遺物	89

Fig. 90	鳥羽山城跡調査区配置図	93
Fig. 91	本丸北西部調査区詳細図	94
Fig. 92	本丸土層断面図（1）	95
Fig. 93	本丸南側から天竜川平野を臨む（北から）	95
Fig. 94	本丸の現況（西から）	95
Fig. 95	本丸土層断面図（2）	96
Fig. 96	本丸土壘・礎石建物詳細図	98
Fig. 97	庭園遺構詳細図（1）	99
Fig. 98	庭園遺構詳細図（2）	100
Fig. 99	庭園遺構詳細図（3）	101
Fig. 100	井戸詳細図	102
Fig. 101	搦手門詳細図	104
Fig. 102	東門詳細図	106
Fig. 103	東門	106
Fig. 104	鉢巻石垣	107
Fig. 105	腰巻石垣検出状況	108
Fig. 106	腰巻石垣調査状況	108
Fig. 107	本丸出土遺物（1）	109
Fig. 108	本丸出土遺物（2）	110
Fig. 109	大手道拡大図	113
Fig. 110	大手道詳細図（1）	114
Fig. 111	大手道詳細図（2）	115
Fig. 112	大手道出土遺物	115
Fig. 113	二俣古城図『遠江風土記伝七』	117
Fig. 114	笛岡城跡の構造	118
Fig. 115	笛岡城跡の調査区全体図	119
Fig. 116	笛岡城跡の縦断面模式図	120
Fig. 117	基本層序	120
Fig. 118	南土壘土層断面図	121
Fig. 119	遺構詳細図（西半）	122
Fig. 120	遺構詳細図（東半）	123
Fig. 121	井戸詳細図	124
Fig. 122	遺物実測図（1）	125
Fig. 123	遺物実測図（2）	126
Fig. 124	遺物実測図（3）	127
Fig. 125	遺物実測図（4）	128
Fig. 126	遺物実測図（5）	129
Fig. 127	遺物実測図（6）	130
Fig. 128	遺物実測図（7）	131
Fig. 129	二俣三城の動態	138
Fig. 130	二俣全図表書	140
Fig. 131	二俣全図の詳細	140
Fig. 132	城下町出土遺物	141
Fig. 133	二俣周辺の地形図	142
Fig. 134	二俣周辺の旧地形図	143
Fig. 135	二俣地形図（1万分の1）	144
Fig. 136	二俣地形図（5千分の1）	145
Fig. 137	二俣地籍図（5千分の1）	146
Fig. 138	二俣城・鳥羽山城と地籍図	147
Fig. 139	二俣地籍図（1万分の1）	148
Fig. 140	在りし日の「物見の松」（昭和10年代頃）	149
Fig. 141	昭和10年代頃の二俣町全景（西から）	151
Fig. 142	昭和10年代頃の川口集落（南から）	151
Fig. 143	昭和10年代の二俣の町並み	151
Fig. 144	昭和10年代の二俣川	151
Fig. 145	昭和10年代の城山稻荷神社（東から）	151
Fig. 146	昭和10年代の天守台（東から）	151
Fig. 147	現在の城山稻荷神社	151
Fig. 148	現在の旭ヶ丘神社	151
Fig. 149	天守台における石垣修復工事の様子	152
Fig. 150	城山公園遊歩道の整備状況	152
Fig. 151	昭和10年代の鳥羽山城跡本丸	153
Fig. 152	豊橋工兵隊による鳥羽山観光道路の建設	153
Fig. 153	鳥羽山公園整備計画図（昭和29年頃）	154
Fig. 154	昭和30年代頃の鳥羽山城跡本丸の状況	154
Fig. 155	昭和30年代頃の鳥羽山公園駐車場の状況	154
Fig. 156	清瀧寺境内に模擬再現された井戸櫓	155
Fig. 157	二俣城天守復興募金箱（貯金箱）	155
Fig. 158	組み合わせたマッチ箱	156
Fig. 159	「城跡フェスティバル」での二俣一夜城	156
Fig. 160	「城跡フェスティバル」での甲冑武者行列	156
Fig. 161	瀬名氏系譜	161
Fig. 162	松井氏系譜	163
Fig. 163	清瀧寺領絵図	180
Fig. 164	二俣・山東村絵図（部分）	181
Fig. 165	大正2（1913）年地籍図トレース図	183
Fig. 166	二俣城下町の景観復元図	187
Fig. 167	鳥羽山城跡大手道自然石露頭（西から）	189
Fig. 168	鳥羽山城跡西の丸Ⅱ自然石露頭	189
Fig. 169	浜松城跡天守門西側石垣（西から）	190
Fig. 170	浜松城跡本丸南側石垣（南から）	190
Fig. 171	縄張りと石垣の構築場所	191
Fig. 172	鳥羽山城跡大手道虎口北側石垣（南から）	192
Fig. 173	鳥羽山城跡大手道西側石垣詳細（北から）	192
Fig. 174	鳥羽山城跡大手門西側石垣（南から）	192
Fig. 175	鳥羽山城跡西側鉢巻石垣（南から）	192
Fig. 176	鳥羽山城跡大手道東側石垣（西から）	193
Fig. 177	鳥羽山城跡大手門石垣詳細（東から）	193
Fig. 178	二俣城跡天守台東面北半石垣（東から）	193
Fig. 179	二俣城跡天守台南面石垣（南東から）	193
Fig. 180	二俣城跡大手門石垣（北から）	194
Fig. 181	二俣城跡大手門下石垣（南東から）	194

Fig. 182	二俣城跡本丸鉢巻石垣東面（南東から）	194
Fig. 183	二俣城跡西の丸 I 石垣（南西から）	194
Fig. 184	鳥羽山城跡の滝石組（南東から）	197
Fig. 185	置塙城跡IV - 2 郭の庭園遺構	198
Fig. 186	後瀬山城跡の②郭土墨土留石	198
Fig. 187	七尾城跡の庭園遺構	198
Fig. 188	一乗谷朝倉氏遺跡館跡の滝石組	199

Fig. 189	大友氏館跡の庭園遺構	200
Fig. 190	小田原城跡御用米曲輪の庭園遺構	200
Fig. 191	小田原城跡御用米曲輪の池2	200
Fig. 192	武田軍の侵攻経路	202
Fig. 193	浜松城跡天守台と二俣城跡天守台	221
Fig. 194	重点的な保護が望まれる範囲	223

挿 表 目 次

Tab. 1	二俣城・鳥羽山城関連年表	3
Tab. 2	二俣城主・城代関連年表	4
Tab. 3	二俣城、二俣における支配の推移	30
Tab. 4	二俣城・鳥羽山城関連文献史料一覧（1）	35
Tab. 5	二俣城・鳥羽山城関連文献史料一覧（2）	36
Tab. 6	二俣城・鳥羽山城関連文献史料一覧（3）	37
Tab. 7	二俣城・鳥羽山城関連絵図一覧	38
Tab. 8	天竜区二俣町における城郭の調査履歴	66

Tab. 9	二俣城跡出土遺物観察表	91
Tab. 10	鳥羽山城跡出土遺物観察表	111
Tab. 11	笛岡城跡出土遺物観察表（1）	133
Tab. 12	笛岡城跡出土遺物観察表（2）	134
Tab. 13	笛岡城跡出土遺物観察表（3）	135
Tab. 14	二俣三城から出土した遺物の時期	137
Tab. 15	近世～現代における二俣城・鳥羽山城 関連年表（1）	157
Tab. 16	近世～現代における二俣城・鳥羽山城 関連年表（2）	158
Tab. 17	寛文3年二俣村の字名と田畠・屋敷	172

第1章 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

(1) 事業の経緯

広大な山間地を市域に含む静岡県浜松市には、数多くの城跡・城館跡がある。静岡県教育委員会から刊行された『静岡県の中世城館』(1981年刊)には、市域にある中世城館が100箇所以上にわたり紹介されている。とくに、市域にある16世紀後半頃の城郭遺構は大規模なものが多く、地域史や城郭史のみならず、我が国の歴史を読み解く上でも注目すべき事例が含まれている。

浜松市では、こうした貴重な歴史遺産に着目し、地域資源（歴史・文化資源、観光資源）として活用する事業として平成22年（2010）度から「城跡整備活用事業」を実施し、調査研究を進めるとともに、城跡の活用を継続的に行っている。この事業は、天竜川流域の城郭群（浜松市天竜区二俣町、春野町、水窪町）に焦点を当て、城跡を活用した様ざまなイベントを試行的に実施するものである。城跡の発掘調査も部分的に行い、可能な限りその成果を公開するように努めてきた。この事業を実施する中で市内各地に分散する城跡の価値づけを行い、長期的な保護活用策について検討を重ねた。なかでも、天竜区二俣町二俣に所在する二俣城跡と鳥羽山城跡は、遺構の遺存状態が良好であり、当事業を進める上で中心的な城跡として位置づけられた。両城については、発掘調査をはじめ、史料調査、歴史地理調査など多分野にわたる調査・研究を行い、総合的な価値づけにかかる検討を継続的に進めている。本書はその成果の一端をまとめたものである。

二俣城と鳥羽山城は、天竜川が下流平野に移行する最南端部に構築されている。浜松城からは北北東18kmの位置にあたり、かつては天竜川の流路の一つであった馬込川を介して舟運でも結ばれていた。元亀3年（1572）から天正3年（1575）の間に繰り広げられた徳川家康と武田信玄・勝頼の攻防の舞台として著名であるばかりでなく、天正18年（1590）の家康の関東転封後、堀尾氏（堀尾吉晴、堀尾宗光）が築いた野面積みの石垣が良好に遺存している。この二つの城は別城一郭と呼ばれるように、相互補完的な関係をもつてることも注目できる。二俣城が要塞化を遂げていくことに対し、鳥羽山城は居館としての空間を充実させていく経緯についても、本書で明らかにしたい。

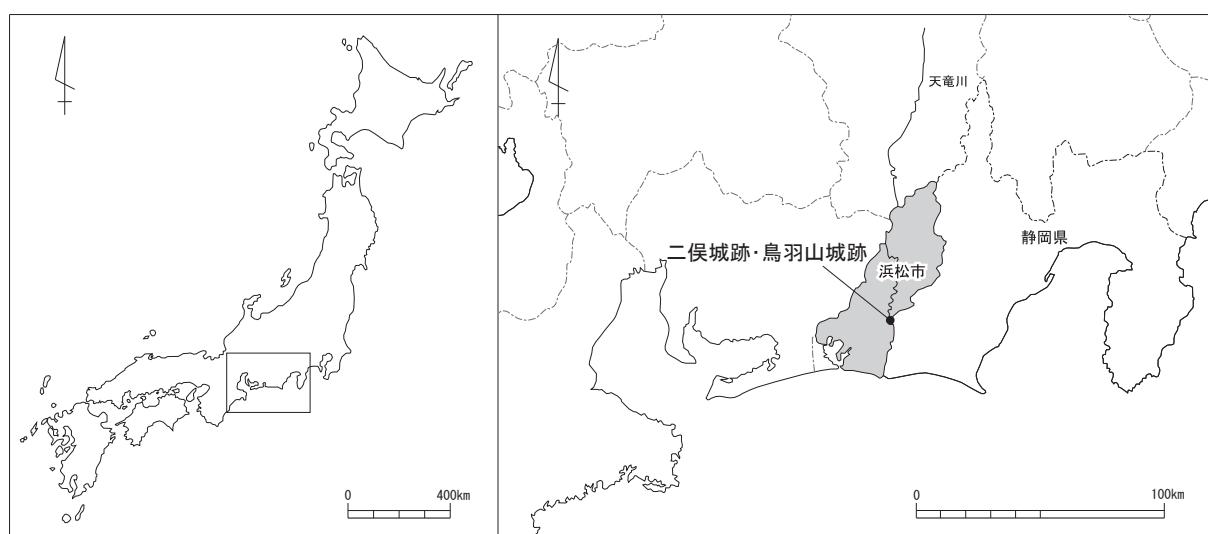


Fig.1 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置

(2) 二俣の三城と時期区分

笹岡城 天竜川が南北に貫く二俣の地には、笹岡城、二俣城（蜷原城、城山）、鳥羽山城の3城が南北2kmの範囲に分布している。元来、この地に築かれた地域支配の拠点は、二俣の北部に位置する笹岡城であった。二俣城の史料上の初見である建武年間（1334～1338）から永禄年間（1558～1570）まで、「二俣城」と呼ばれているのは笹岡城のことを指すとみられる。笹岡城には、本城山の詰めの曲輪から、麓の本曲輪、南曲輪と南北に並ぶ城郭の構造が確認できる。

笹岡城を築城し、地域支配の拠点とした勢力は、明確になしえない。16世紀初頭に斯波義雄の名がみえるのが城主にかかる最古の記録である。永正14年（1517）、遠江守護職は斯波氏から今川氏に代わる。今川勢力に移った頃の城主として瀬名一秀の名がみえる。天文5年（1536）以降は、今川氏の支配下のもと、松井氏（松井貞宗、松井宗信、松井宗恒）が歴代の城主を務めたことが知られている。

二俣城 二俣城は天竜川と二俣川の旧流路に囲まれた蜷原台地の南端に位置している。主要な城郭部分は南北300m、東西200mの範囲にあり、堀切で区画された曲輪の要所には石垣がみられる。笹岡城の城主であった松井宗信は永禄3年（1560）の桶狭間の戦いに参加し、今川義元と共に討死した。この戦いを契機に、遠江地域には軍事的な緊張が高まった。旧来の笹岡城から、防備に有利な二俣城の地に拠点が移されたのも、この頃のこととみられる。戦略拠点を二俣城の地に移すにあたっては、天竜川と二俣川に囲まれた立地環境が注目されたことは想像に難くない。寛政3年（1791）の鳥羽山掘り割りの完成までは、二俣川は二俣城の南に流れている。二俣城は、三方を川で囲まれた天然の要害であり、舟運の利便性や川湊の位置を考慮して両城の意義を捉える必要がある。



Fig.2 二俣の三城の位置関係

桶狭間の戦い以降、弱体化した今川氏の領国は近隣諸国からの攻撃を許すようになり、永禄11年（1568）には徳川家康が遠江への侵攻を本格化させた。家康の支配下のもと、二俣城には鵜殿氏長らに二俣城の防備を命じるが、その4年後の元亀3年（1572）には武田信玄が遠江に進入し、二俣城は徳川氏と武田氏の攻防の舞台となった。二俣城にみられる大規模な堀切や横堀は、この頃に設けられたものと考えられる。

三方ヶ原の戦いの前哨戦となった二俣城をめぐる戦いは、武田方が勝利し、以後、設楽ヶ原・長篠の戦いがおこった天正3年（1575）まで二俣城は武田氏の軍事拠点として機能した。武田方にあった二俣城には被官等を在番衆として在城させた。城将の名は不明であるが、在番衆として深山宗三や依田信蕃がいたことが知られている。

Tab.1 二俣城・鳥羽山城関連年表

	西暦	和暦	記事
第1段階	1338年	建武5年	正月 北朝方の内田致景が二俣城における合戦での軍功を上申する(二俣城の初見)。
	1405年	応永12年	斯波義教が今川氏に代わって遠江守護職を務めるようになる。
	1501年	文亀元年	8月 斯波義雄、小笠原定基・貞忠父子に、重ねて出陣を要請する。
	1506~11年頃	永正3~8年頃	3月 瀬名一秀が信濃小笠原定基に二俣城を取り立てたことを告げる。
	1517年	永正14年	今川氏親が引馬城に斯波氏を破り、遠江守護職を務めるようになる。
	1529年	享禄2年	5月 二俣昌長、瀬尻善左衛門らの戦功を賞し、年貢錢を免除する。
	1536年	天文5年	12月 遠江国二俣郷阿蔵村内玖延寺寺領安堵判物に松井貞宗の名がみえる。
	1559年	永禄2年	2月 今川氏真、松井宗信に遠江国所々知行分・代官職を安堵する。
	1560年	永禄3年	5月 桶狭間の戦い、二俣城主、松井宗信が今川義元と共に討死。
	1560年	永禄3年	12月 今川氏真、松井宗恒に対し所領を安堵する。
第2段階	1560年頃	永禄3年頃	(この頃、二俣の拠点が筈岡城から二俣城に移る。)
	1568年	永禄11年	徳川家康、遠江への侵攻を開始する。
	1568年	永禄11年	12月 徳川家康、鵜殿氏長らに遠江国二俣城の防備を命じ、所領を安堵する。
	1568年頃	永禄11年頃	二俣城代に中根正照の名がみえる。
	1570年	元亀元年	6月 徳川家康、本拠地を浜松に移し浜松城の築城に着手する。
	1572年	元亀3年	10月 武田信玄、二俣城の攻略を開始する。
	1572年	元亀3年	12月 武田信玄、二俣城を攻め落とす。
	1572年	元亀3年	12月 22日 三方ヶ原の戦い
	1572年	元亀3年	12月 28日 武田信玄、朝倉義景に、二俣城の普請完了と三方ヶ原の戦いの勝利を伝える。
	1573年	元亀4年	4月 武田信玄死す。徳川家康、二俣城を攻めるため、社山・合代嶋・道々に砦を造る。
	1573年	天正元年	9月 武田勝頼、遠江国の武田勢に、二俣より三河国長篠への出陣を命じる。
	1574年	天正2年	閏11月 武田勝頼、深山宗三・依田信蕃に二俣在城を命じる。
	1575年	天正3年	5月 設楽ヶ原・長篠の戦い
	1575年	天正3年	6月 徳川家康、二俣城の攻略開始。周囲に砦を築き、鳥羽山に本陣をおく。
	1575年	天正3年	12月 徳川家康、二俣城を攻め落とす。依田信蕃が城を明け渡す。
	1575年	天正3年	大久保忠世、二俣城の防備を任される。
	1576年	天正4年	織田信長、安土城に入る。
第3段階	1579年	天正7年	9月 二俣城において松平信康(徳川家康嫡子)が切腹する。
	1582年	天正10年	武田氏滅亡、本能寺の変
	1586年	天正14年	松平家忠、二俣で人質とされていた女に迎えの使者を出す。
	1590年	天正18年	豊臣秀吉、小田原平定。徳川家康は関東に移封。大久保忠世は小田原城主となる。
	1590年	天正18年	豊臣秀吉、堀尾吉晴に二俣の地を知行地として与える(堀尾宗光、二俣城主となる)。
	元和元年		(この頃、浜松城、二俣城、鳥羽山城に石垣が構築される。)
	1592年	天正20年	堀尾宗光(氏光)、秋葉寺の再建に銭を寄贈。
	1598年	慶長3年	豊臣秀吉没
	1600年	慶長5年	関ヶ原の戦い 戦功により堀尾氏は出雲に転封。 (この頃、二俣城と鳥羽山城の機能がほぼ停止する。)
	1601年	慶長6年	2月 二俣・山東等八ヶ村が浜松城主、松平忠頼領となる。
第4段階	1603年	慶長8年	徳川家康、征夷大將軍になる。
	1609年	慶長14年	9月 松平忠頼、横死。(この頃、二俣城と鳥羽山城が完全に廃城となる。)
	1615年	慶長20年	大坂夏の陣 一国一城令 (二俣の地は幕府直轄領となり、中泉陣屋(現磐田市)詰の代官の支配下に入る。)
	元和元年		
第5段階	1791年	寛政3年	二俣川、鳥羽山掘り割り完成。
	1799年	寛政11年	内山真龍著『遠江風土記伝』成る。
	1850年	嘉永3年	天竜川の洪水により川口堤が決壊。
	1868年	明治元年	明治維新
第5段階	1882年	明治15年	11月 イギリスの旅行家ヘンリー・ギルマール、二俣を来訪し、景観写真を撮影する。
	1951年	昭和26年	鳥羽山公園として供用開始。
	1961年	昭和36年	二俣城跡、天竜市史跡(現浜松市史跡)に指定。
	1970年	昭和45年	二俣城跡天守台の修理工事。
	1974年	昭和49年	鳥羽山城跡における本格的発掘調査(1次調査)。
	2009年	平成21年	保存活用目的の二俣城跡、鳥羽山城跡の発掘調査を開始する。
	2014年	平成26年	鳥羽山城跡、浜松市史跡に指定。

Tab.2 二俣城主、城代関連年表

段階	上級領主	主要な時期	西暦	和暦	城主・城代	
第1段階	今川	篠岡城	1338年	建武5年		
			～1405年	～応永12年		
			1405年～	応永12年～		
	斯波		1501年頃	文亀元年頃	斯波義雄	
			～1506～1511年	～永正3～8年		
			1506～1511年～	永正3～8年～		
			1518年頃	永正15年頃	瀬名一秀	
			1529年	享禄2年	(二俣昌長、中尾生城主か)	
			1536年	天文5年	松井貞宗	
			1559年～1560年	永禄2年～3年	松井宗信	
第2段階	徳川	二俣城	1560年(～1568年)	永禄3年(～永禄11年)	松井宗恒	
			1568年(～1572年)	永禄11年(～元亀3年)	鶴殿氏長	
			(1572年)	(元亀3年)	(城代、中根正照)	
			1572年～1575年	元亀3年～天正3年		
			1575年(～1590年)	天正3年(～天正18年)	大久保忠世	
第3段階	豊臣	鳥羽山城	1590年～1600年	天正18年～慶長5年	堀尾宗光(氏光)	
	徳川		1601年～1609年	慶長6年～慶長14年	(松平忠頼)	

二俣城が再び徳川氏の領有となると、徳川家康は大久保忠世を城主とし、北遠地域の防備にあたらせた。徳川氏による二俣城の領有は天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原平定まで続くが、その間、天正7年(1579)には徳川家康の嫡子、松平信康が二俣城で自刃する事件が起こっている。

天正18年(1590)、徳川氏に代わって遠江の西部や北部は、豊臣秀吉の重臣である堀尾吉晴が領有した。吉晴は浜松城に入り、二俣城の防備は弟の宗光(氏光)に任せたとみられる。堀尾氏は、遠江の領有を任せられて間もなく、浜松城、二俣城、鳥羽山城の三城の主要部分に石垣を構築し、浜松城や二俣城に天守を築いたと考えられる。堀尾氏の二俣城領有は、関ヶ原の戦いがあった慶長5年(1600)まで続く。豊臣勢力の一掃と、堀尾氏の転封によって、二俣城はその存在意義が薄れ、慶長5年以降は実質的な機能は消滅していたとみてよい。出土遺物の年代観も概ねこの理解と整合的である。なお、慶長6年(1601)、堀尾吉晴に代わって浜松城に入った松平忠頼は、二俣の地も領国とした。二俣城が完全に廃城となるのは、忠頼が横死した慶長14年(1609)から、一国一城令が下される慶長20年(1615)の間と捉えることができるだろう。

鳥羽山城 鳥羽山城跡は、二俣城の南に広がる東西1000m、南北350mほどの独立丘陵上に立地する。西側と南側には天竜川が流れ、北側には流路が付け替えられるまで二俣川があり、二俣城とは川を隔てる地理的関係にあった。二俣城とは500mほどの至近距離にあり、別城一郭と呼ばれるように密接な関係をもつ。南山と呼ばれる最も高い西側の山頂(標高108m)の周囲に城郭の中心が展開しているが、東方に連なる丘陵上にも数多くの曲輪が設けられ、要所には堀切がみられる。これらの遺構の築造時期は必ずしも明確でないが、二俣城で遺構形成が明確化する永禄3年以降のものと捉えられる。

鳥羽山城には三箇所の山頂部分があり、山頂部分を中心に東群、中央群、西群と呼ぶそれに

城郭遺構がみられる。鳥羽山城は天正3年（1575）、徳川家康が武田氏から二俣城を奪還するため本陣を置いた地として知られている。徳川方が本陣をおいたのは、狭義の「鳥羽山」の地を指す東群に加え、その隣接地である中央群の地である可能性が高い。一方、「南山」に築かれた西群には、土塁を備えた本丸と数多くの腰曲輪が残る。これらの中心部分には緩やかな勾配をもつ野面積みの石垣が構築されているが、二俣城と同じく天正18年（1590）～慶長5年（1600）の間に当地域を領有していた堀尾氏の改修によるものと捉えられる。鳥羽山城には大規模な大手道が整備され、本丸には庭園が設けられるなど、御殿的な要素が強く、戦略拠点的様相が濃厚な二俣城とは好対照をなしている。二俣城が戦時用の施設として機能を高めていくに従い、鳥羽山城は居住・政治空間としての機能をもたせたものとみられる。鳥羽山城の機能停止の時期は、二俣城と同じく慶長5年（1600）の堀尾氏転封後のことであったとみられる。

時期区分 上述のような変遷を遂げる二俣三城は、有力勢力の推移と合わせて段階区分が可能である。ここでは、二俣城や鳥羽山城が完全に廃城になる近世や近現代を視野に入れて、以下のように5段階に区分しておきたい。

第1段階 14世紀～永禄3年（1560） 桶狭間の戦いまで

笛岡城を使用する段階

斯波氏、今川氏の領国支配期

16世紀中頃は国衆、松井氏が城主（松井貞宗、松井宗信、松井宗恒）

第2段階 永禄3年（1560）～天正18年（1590） 桶狭間の戦いから小田原の陣まで

二俣城、鳥羽山城における基本構造形成段階

（1）第2-1段階 永禄3年（1560）～永禄11年（1568）

二俣城の本格整備開始期 今川勢力による要塞化 城主は松井宗恒

（2）第2-2段階 永禄11年（1568）～元亀3年（1572）

徳川氏による二俣城領有期（前期） 城主は鵜殿氏長、城代は中根正照

（3）第2-3段階 元亀3年（1572）～天正3年（1575）

武田氏による二俣城領有期 城代は依田信蕃

（4）第2-4段階 天正3年（1575）～天正18年（1590）

徳川氏による二俣城領有期（後期） 城主は大久保忠世

第3段階 天正18年（1590）～元和元年（1615） 小田原の陣から一国一城令まで

二俣城、鳥羽山城における石垣構築と廃城の段階

（1）第3-1段階 天正18年（1590）～慶長5年（1600）

豊臣勢力の進出期 浜松城主は堀尾吉晴、二俣城主は堀尾宗光

（2）第3-2段階 慶長6年（1601）～元和元年（1615）

松平忠頼ら徳川勢力による二俣城領有期 二俣城の機能は縮小、廃城

第4段階 元和元年（1615）～明治元年（1868） 一国一城令から明治維新まで

廃城後、幕府直轄地として把握される段階

第5段階 明治元年（1868）～現代

神社造営及び、公園利用が進む段階

2 調査の方法と経過

二俣城、鳥羽山城における総合調査については、史料調査、測量調査、発掘調査、歴史地理調査、近代以降の土地改変の履歴調査などを実施した。

史料調査 二俣城、鳥羽山城をめぐる史料については、『静岡県の中世城館』（静岡県教委 1981）、『天竜市史』（天竜市 1981）などで紹介もしくは集成がなされている。今回の調査では、両城にかかる基本的な史料について、『静岡県史』の編纂作業をはじめとする近年の評価をふまえ、再集成と再評価を行った（附編参照）。なお、史料にかかる調査については坪井俊三氏の指導（元内山真龍資料館）を得ている。

また、両城にかかる絵図については、『遠江国風土記伝』（内山真龍著）所収の原図をはじめ、二俣中心部の詳細を描いた清龍寺領絵図（個人蔵）、二俣川沿いの近世の姿を描いた複数の村絵図（内山真龍資料館蔵）について 4×5 判フィルムカメラによる撮影と高精細デジタル画像を取得し、近世における二俣城、鳥羽山城の状況を精査した。

測量調査 二俣城と鳥羽山城は広大な面積をもつため、高精度の測量調査は今まで実施されていなかった。今回実施した総合調査では、両城について航空レーザ測量による地形測量を実施した。また、両城の本丸部分については、地上に設けた基準点（3級、4級）から放射測量により三次元情報を取得し、地形および石垣が分布する区域の詳細測量図を作成した。また、二俣城については天守台石垣の三次元計測を実施した。航空レーザ測量については、国際文化財株式会社及び株式会社アコードに、本丸部分の詳細測量図については、株式会社パスコに業務委託して実施した。

発掘調査 考古学的な発掘調査については、2009年以降、総合調査報告にかかる内容確認調査を実施しているが、それ以前にも、公園整備や開発等に伴う事前調査が実施されている。本書では、2009年以降の調査成果について報告するが、総合調査では、鳥羽山城と笛岡城については、過去に実施された発掘調査の再整理も合わせて行った。

内容確認にかかる発掘調査は、2009年から2015年まで7年間実施した。いずれも部分的な調査であり、調査面積も限られる。舗装や表層土の撤去などにバックホーを用いた場合があるが、基本的に表土以下の掘削は人力で行った。測量はトータルステーションを用いて行ったが、2012年（二俣城）、2013年（鳥羽山城）以前に実施した調査については、基準点が設定できていない場合がある。記録写真は、モノクロ、カラーリバーサルの銀塩フィルムカメラを主体とし、 6×7 判、 4×5 判による撮影を実施した。また、部分的にはフルサイズセンサーをもつデジタル一眼レフカメラを用



Fig.3 発掘調査風景



Fig.4 現地説明会

いて写真撮影をした箇所もある。発掘調査にかかる整理作業は、浜松市埋蔵文化財調査事務所において断続的に実施した。

過去の発掘調査の再整理については、鳥羽山城の1次・2次調査分と笛岡城の1次～3次調査を対象とした。これらの調査にかかる図面や出土遺物の一部は、学習院大学が保管していたが、平成23年に浜松市に返却され、資料整理を行った。

内容確認調査及び過去の調査にかかる遺構実測図や出土品については、デジタル技術を用いてトレースを実施した。なお、出土品のうち、施釉陶器・磁器の位置づけについては、藤澤良祐氏（愛知学院大学）堀内秀樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室）の指導を得ている。

歴史地理調査 戦国時代の二俣城下町の景観を復元するため、古地図を用いた歴史地理調査を実施した。地籍の基本的な分析には、大正2年（1913）に作成された「二俣全図」（内山真龍資料館蔵）を用い、昭和33年（1958）に作成された地籍図（浜松市役所）を補足的に用いた。また、明治時代の測量図、近世の絵図などの検討をふまえ、数度にわたる現地調査を行った。歴史地理調査については、山村亜希氏（京都大学）の指導を得ている。

3 調査の経過

二俣城跡の調査 二俣城跡にかかる調査は、発掘調査、測量調査に加え、地形や遺構にかかる踏査を実施した。主な調査履歴は以下の通りである。

- 1次調査 平成3年（1991）8月 二の丸の発掘調査
- 2次調査 平成21年（2009）2月 本丸中仕切門、天守台階段基礎、本丸西側土壘の発掘調査
- 3次調査 平成22年（2010）3月 本丸中仕切門、三号堀の発掘調査
- 4次調査 平成23年（2011）2～3月 二の丸東側土壘の発掘調査
- 5次調査 平成24年（2012）10～11月 本丸天守台、二の丸北側土壘、三号堀の発掘、天守台の三次元計測
- 6次調査 平成26年（2014）9月 西の丸Iの発掘調査、航空レーザ測量
- 7次調査 平成27年（2015）10月 南の丸I、西の丸Iの発掘調査

鳥羽山城跡の調査 鳥羽山城跡にかかる調査も二俣城と同様に、発掘調査、測量調査に加え、地形や遺構にかかる踏査を実施した。主な調査履歴は次の通りである。

- 1次調査 昭和50年（1975）3月 撋手門付近の発掘調査
- 2次調査 昭和50年（1975）7月 撋手門付近、本丸建物跡等の発掘調査、庭園遺構の検出



Fig.5 史料調査風景

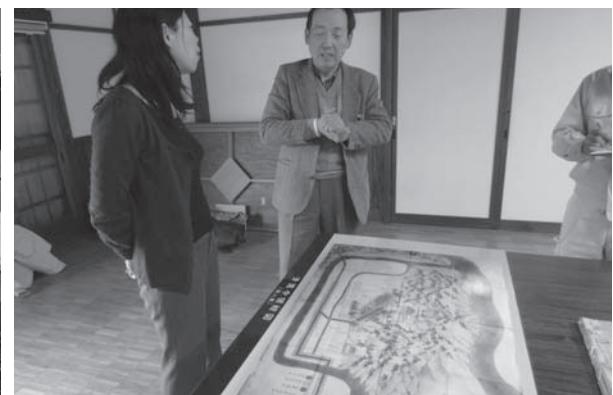


Fig.6 歴史地理現地調査

- 3 次調査 平成元年（1989）8～9月 本丸南側展望台に関する発掘調査
 4 次調査 平成21年（2009）2～3月 大手道、本丸の発掘調査
 5 次調査 平成24年（2012）6月 東群尾根上における確認調査
 6 次調査 平成25年（2013）9月 大手道、東門の発掘調査、本丸の地形三次元計測
 測量調査 平成27年（2015）航空レーザ測量

歴史地理調査 歴史地理調査は平成25年（2013）より開始し、地籍図の分析、トレースを行った。平成27年（2015）には、関係する地形図等を編集する業務を航空景観写真撮影と合わせて株式会社ナカシャクリエイティブに委託した。

調査指導 調査の進展にあわせて各分野の専門家を招聘し、調査指導をいただいた。成果がまとまった時点での二俣城跡・鳥羽山城跡調査検討会を実施し、意見交換を行った。調査研究会に出席いただいた方と検討内容は以下の通りである（敬称略）。須田悦生（静岡県立大学名誉教授、芸能史）、千田嘉博（奈良大学教授、城郭考古学）、高瀬要一（元奈良文化財研究所、庭園史）、坪井俊三（元内山真龍資料館、地域史）、本多隆成（静岡大学名誉教授、中世史）、山村亜希（京都大学准教授、歴史地理）。

第1回 二俣城跡・鳥羽山城跡調査検討会 平成26年（2014）9月8日開催

- 二俣城跡・鳥羽山城跡かかわる既往調査の概要（鈴木一有）
 二俣城下町の景観復元（山村亜希）

第2回 二俣城跡・鳥羽山城跡調査検討会 平成27年（2015）10月22日開催

- 二俣城に関わる史料について（坪井俊三）
 信玄の遠江侵攻と二俣城攻略（本多隆成）
 二俣地域における歴史資源の活用について（天竜区まちづくり推進課）

第3回 二俣城跡・鳥羽山城跡調査検討会 平成28年（2016）8月29日開催

- 鳥羽山城における庭園遺構について（高瀬要一）
 二俣城跡・鳥羽山城跡における最新の調査成果について（鈴木一有）

この他、調査の進展に合わせて数多くの専門家の指導を得ている。指導いただいた方々は以下のとおりである（敬称略、所属は指導当時）。北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所）、北野博司（東北芸術工科大学）、野村勘治（野村庭園研究所）、岡寺良（九州歴史資料館）、加藤理文（公益財團法人日本城郭協会理事）、中井均（滋賀県立大学）。



Fig.7 検討会開催状況



Fig.8 調査指導風景

第2章 立地と環境及び研究史

1 地理的環境

(1) 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置

浜松市は静岡県の西部に位置しており、東京と大阪の2大都市圏からは、ほぼ中間の距離である。市域には古くから東海道が通り、現代においても東名・新東名の2本の高速道路や国道1号線、東海道新幹線や東海道線が東西に走る交通利便性の高い地方都市である。平成17年に12の市町村が合併しており、市域は東西長約52km、南北長約73km、面積は1558.06km²で全国第2位（2017年3月現在）と広大である。東は磐田市・周智郡森町・榛原郡川根本町・島田市、北は長野県（飯田市・下伊那郡天龍村）、西は湖西市・愛知県（新城市・北設楽郡東栄町・同豊根村）と接し、南は遠州灘に面している。

浜松市は、政令指定都市として7つの行政区を設けている。そのうち天竜区は、市北部の山間地域に位置しており、北遠地域とも呼ばれる。天竜区の区域は広く、市域の1／3弱を占めるが、そのほとんどが森林であり、人口は7区の中で最も少ない。

二俣城跡・鳥羽山城跡の所在する二俣は、天竜区の南端部にあたり、古くから北遠地域や南信地域へ向かう際の中継地として栄え、南北・東西の道が通っていた交通の要衝である。また、かつて北遠地域で切り出した木材を天竜川の流れを利用して下流へ運ぶなど、水運の拠点にもなっていた。こうした恵まれた立地状況であるがゆえに北遠地域支配の拠点として城が築かれるなど、二俣の地は戦国大名達に重要視され、激しい争奪の場となっていたといえる。

(2) 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の地形

浜松市の地形は、大まかには北部が赤石山脈系の山地帯（弓張山地）、南部が三方原台地と天竜川の河岸段丘及び平野部（沖積平野・海岸平野）に分けられる。市の東部には天竜川が南流し、市の南部では遠州灘が広がり砂丘を形成している。市の南西部には汽水湖である浜名湖があり、都田川などが注いでいる。

市域を流れる天竜川は、長野県の諏訪湖を水源とし、遠州灘へと注ぐ全長213km、流域面積5,090m²の1級河川である。中南信地域では木曽山脈と赤石山脈の間を流れ、奥三河地域・北遠地域では山間部を縫うように蛇行しながら流れているが、河口から約20km上流部で山地を抜けると、大規模な扇状地を形成している。扇頂の天竜区鹿島付近で、大きくS字を描くように蛇行した後、平野部を流れる。近世以前は本流が時代によってその流路を変遷しており、多くの支流に分流していた。鹿島付近から低位河岸段丘（浜北面）の崖面沿いを流下する流路が近世まで存在しており、ひとたび大雨が降ると洪水によって流域の村々は甚大な被害を受け、「暴れ天竜」と呼ばれることもあった。明治期に鹿島付近で流路を締め切り、堅固な堤防が築かれて以降は、ほぼ直線的に平野部を南流するようになった。

二俣城跡・鳥羽山城跡は、天竜川扇状地の扇頂である天竜区鹿島のすぐ北側に面した丘陵に所在している。二俣城跡は、西を天竜川、東から南を二俣川旧流路に挟まれた南北に細長い台地状の丘陵南端部に立地している。本丸の中央部の標高は83.4mを測る。二俣川の流路は、江戸時代後半に人为的に付け替えられており、それ以後直線的に南下して鳥羽山城跡の東側で天竜川と合流し

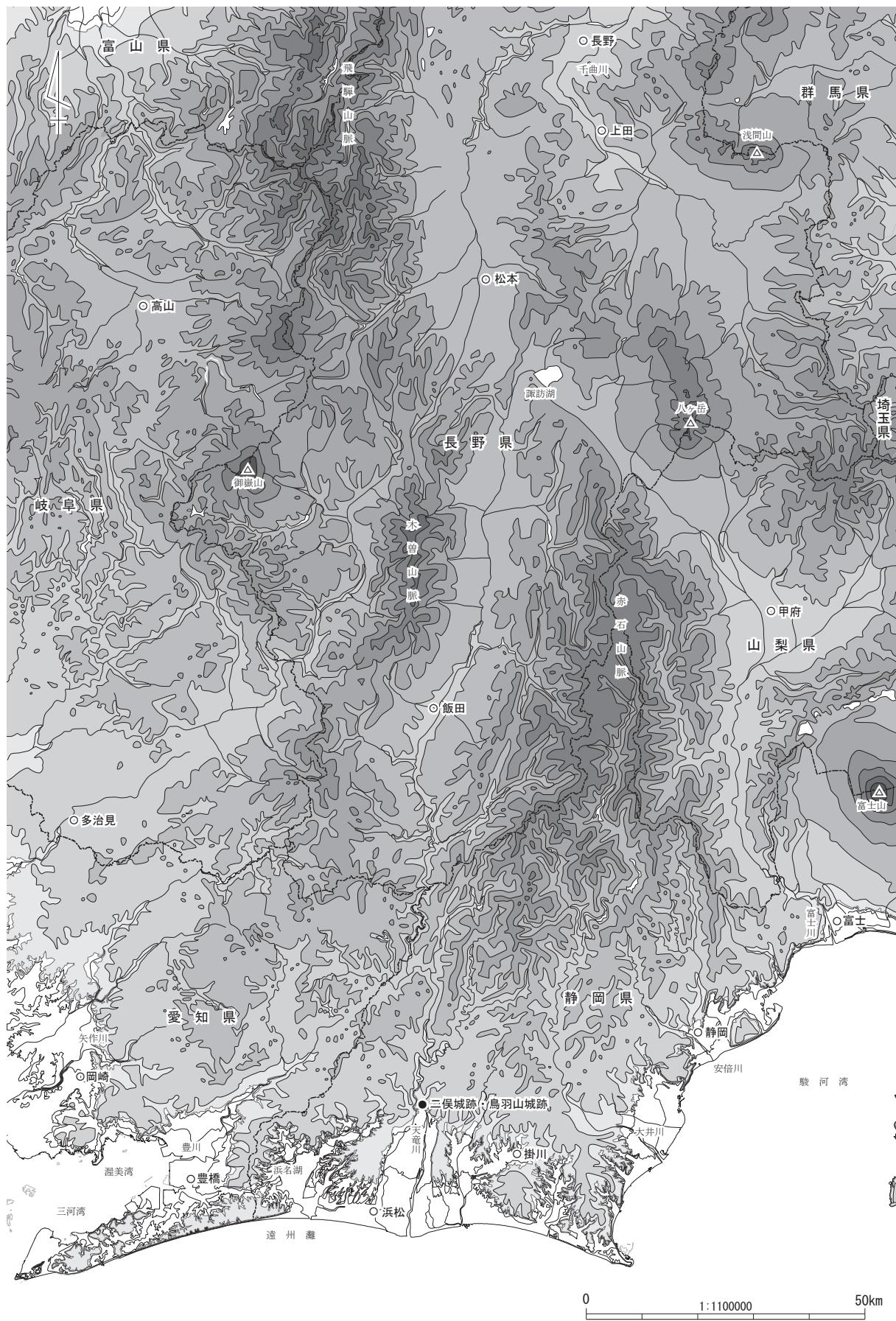


Fig.9 広域地形図

ている。現在二俣城跡の南側に川の流れは存在しないが、かつては、城跡の南西部で天竜川と合流していた。河川沿いの丘陵斜面は、浸食作用によって非常に急峻である。丘陵の南端に突出し、三方向を河川と急峻な崖に囲まれているこの土地は、防御性に優れ、周囲の眺望も確保された築城の適地であったといえる。また、二俣城跡の東側には、小規模ではあるが二俣川の沖積平野が広がっており、城下町が形成されていた。

鳥羽山城跡は、二俣城跡から二俣川旧流路を挟み約500m南側の丘陵に立地する。丘陵は東西に細長く、最も標高の高い箇所は、本丸南西角の土壘上で、108.5mを測る。かつては丘陵の北側を二俣川が西へと流れ、西側～南側では天竜川が蛇行しながら流れしており、二俣城跡の立地する丘陵と同様に、河川に面した部分は非常に急峻な崖面が形成されている。また、丘陵の南側は扇状地が広がり、非常に眺望に優れている。

以上のように、二俣城跡・鳥羽山城跡は、天竜川や二俣川の流れと、両河川がもたらした自然の地形を城の防御に取り入れた天然の要害といえる。

(3) 二俣城・鳥羽山城跡周辺の地質

二俣城跡・鳥羽山城跡周辺には断層が数本存在する。赤石裂線は、天竜区水窪町付近で中央構造線から枝分かれして、二俣の地まで分岐しながら南下している。地体構造区分では、二俣付近の赤石裂線の西側は三波川帯、東側の地層は四万十帯と呼ばれており、赤石裂線を境に異なる。また、阿多古川方面から二俣へ北西～南東方向に走る断層もみられ、二俣にて赤石裂線と交わっているが、そこでも断層を境に地質の違いを確認することができる。

両城跡が立地する丘陵付近の地質は、秩父古生層（古生代、約3億年前）、結晶片岩類（三波川変成岩帶、中生代後半、約7千万～1億8千年前）、二俣層群（新第三紀中新世、約500～2,400万年前）、礫層群（第四紀更新世後期、数万年～15万年前）、沖積層（現世）で構成される。

秩父古生層 当地域では井伊谷層と都田層に細分され、二俣周辺は井伊谷層が分布する。井伊谷層はチャートが多く、石灰岩や輝緑凝灰岩、粘板岩等を含む。二俣城跡の立地する丘陵の南端部と



Fig.10 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置



Fig.11 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の旧地形図

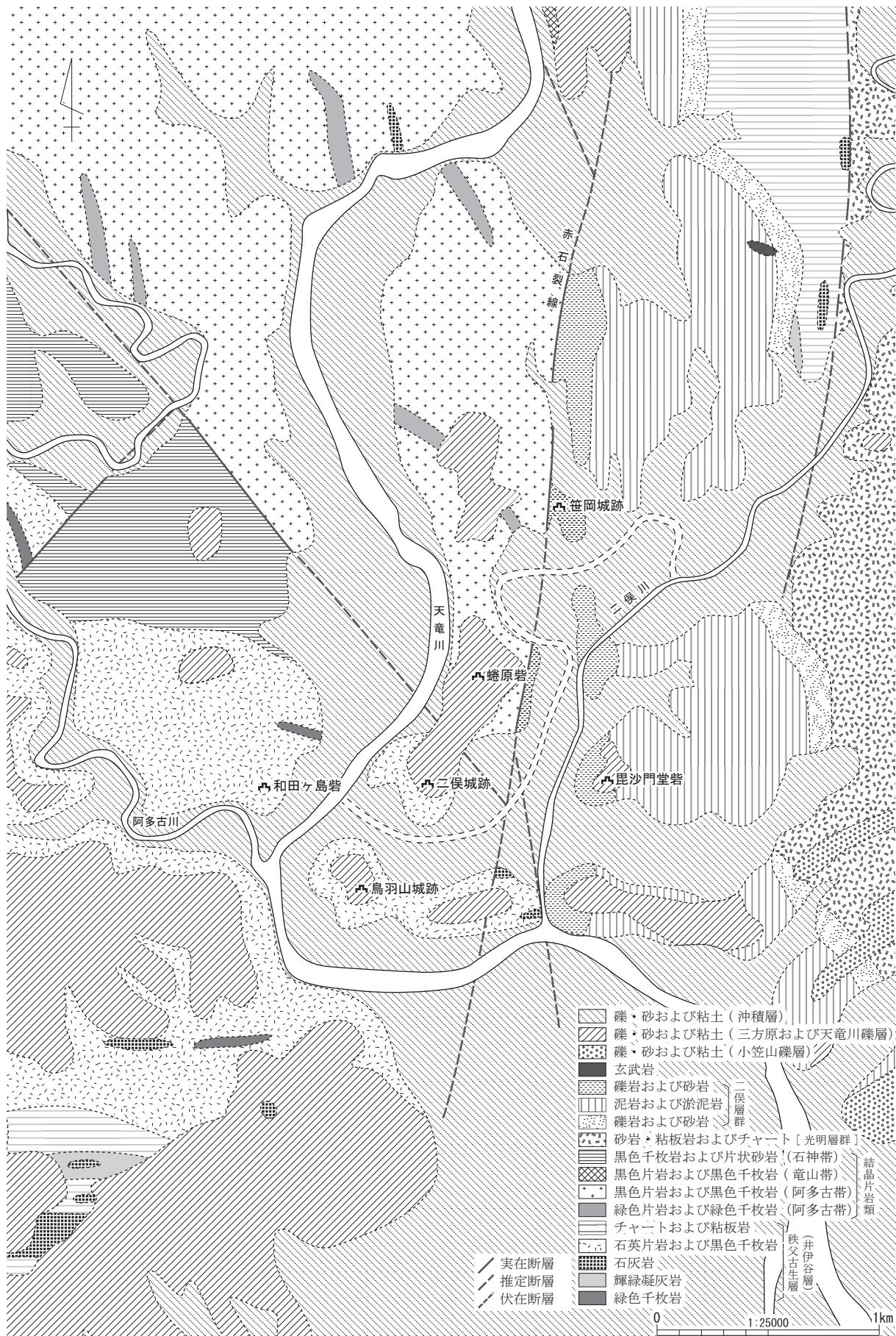


Fig.12 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の地質図

鳥羽山城跡の立地する丘陵では、いずれも岩石が片理を示し、石英片岩、黒色千枚岩、石灰岩、緑色千枚岩を含む。

両城跡周辺にはこの層の岩石の露頭が多くみられる (Fig. 13)。石垣に使用されている石材の多くはこの層のチャートや石灰岩が多く、石丁場跡は確認されていないが、石材を現地調達していたとみられる。

結晶片岩類 黒色千枚岩を主体とし、緑色千枚岩もわずかに含む。赤石裂線より西側に分布する。阿多古川を境に地質が異なり、当地周辺では、石神帶、阿多古帶、竜山帶などに細分される。二俣城跡の北東側や天竜川対岸（西岸）の丘陵に広くみられる。

二俣層群 下層が礫岩および砂岩、中層が泥岩及びシルト岩、上層が礫岩及び砂岩の3層に大別され、中層の泥岩及びシルト岩を主体とする。二俣川現河口東側の丘陵や、二俣川東側の阿藏、山東周辺のやや低い丘陵部に分布し、東側で中生代の光明層群（四万十帶）を被覆している。下層の礫岩・砂岩は最も西側で表出し、赤石裂線を挟んで西側の結晶片岩類（三波川帶）と接する。

礫層群 河川の流れによって運ばれてきた円礫によって構成されており、二俣周辺では、古天竜川が形成した三方原礫層・天竜川礫層が分布する。一方で天竜川東岸側には古大井川が作用した小笠山礫層が分布する。両城跡周辺においてこの層の分布は局所的ではあるが、高位・中位・低位の3段の河岸段丘面として残っている。河岸段丘は、浜松市域では三方原台地の東縁部に顕著である。

二俣・鳥羽山両城跡が存在する丘陵の山頂部は天竜川礫層（河岸段丘）にあたる。

沖積層 天竜川や二俣川の氾濫原に堆積した礫・砂・粘土から構成される。河川の流れが結晶片岩類や二俣層群など比較的崩れやすい地層を浸食し流下させているため、二俣・鳥羽山両城の周辺では急峻な崖面が形成されている。

参考文献

斎藤正次・磯見博 1954 『5万分の1地質図幅説明書』 工業技術院地質調査所

静岡県 1997 『静岡県史』 通史編1 原始・古代

天竜市 1981 『天竜市史』 上巻



Fig.13 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の岩石露頭
(1: 二俣城跡西の丸西側、2: 鳥羽山城跡本丸西側)

2 歴史的環境

(1) 原始・古代

旧石器・縄文・弥生 二俣城跡や鳥羽山城跡が所在する天竜区二俣町とその周辺において人類の生活の痕跡が確認できるのは、旧石器時代からである。本州島最古の化石人骨出土地として知られる根堅遺跡が特筆できる。二俣城跡・鳥羽山城跡・笹岡城跡からは弥生土器が出土しており、城郭形成以前には生活の場として利用されていたことがうかがえる。

古墳 古墳時代中期には、浜松市最大の古墳である光明山古墳が構築されている。光明山古墳は、全長が 82 m あり、市内最大の前方後円墳である。また、天竜区において唯一埴輪を保有する古墳でもある。被葬者や造営集団に係る情報は得られていないが、二俣地区とその周辺が重要視されたことがうかがえる。古墳時代後期には、二俣地区の平野を臨む丘陵上には、三藏塚古墳群や皆原古墳群などの群集墳が造営されている。

奈良・平安 古代の天竜区二俣町は、遠江国磐田郡に属したとされる。郷名は明確でないが、『遠江国風土記伝』によると壬生郷にあたるとされる。また、山香郷にあたるとの見解（向坂・坪井 1981）がある。笹岡城跡では、灰釉陶器や瓦が豊富に出土しており、笹岡城の前身となる地域の中核的な施設が、平安時代に整備されていた可能性がある。



Fig.14 二俣周辺遺跡分布図

(2) 中世

鎌倉 「二俣」の地名は、鎌倉時代末期に成立したとされる『吾妻鏡』の中に登場する「二俣山」が初出である。平安時代末期に二俣地区周辺は、山香荘・浜松荘といった皇室領荘園であったが、鎌倉時代の二俣地区は、『熊野速玉大社文書』によると国衙領に属すとされる。鎌倉時代の遺跡は、 笹岡城跡とその周辺に多く分布しており、大谷遺跡・田組遺跡・上市場遺跡・八幡遺跡などがある。田組遺跡や上市場遺跡とその周辺が鎌倉時代における地域の中心地と推定されている（坪井 1981）。

笹岡城跡が軍事的な要素を備えるのは、南北朝期以降とみられる。南北朝期の二俣地区は国衙領であり、北朝方の遠江守護今川氏が治めた蓋然性が高い。いっぽう、二俣地区の北側にあり、天野氏が治めた犬居（天竜区春野町）は、北遠地域における南朝方の拠点になっている。北朝方と南朝方が接した二俣地区は、政治的・軍事的な緊張状態にあり、 笹岡城は軍事的な要素を強くしていったものとみられる。

鳥羽山城跡から南西へ 1 km ほどの地点には、平安時代末から鎌倉時代の寺院跡と想定される中屋遺跡（浜北区根堅）がある。中屋遺跡では平成 12 年（2001）と平成 14 年（2003）に平面的に発掘調査が実施され、周囲を幅 4 m、深さ 2 m 以上の堀で囲まれた東西 160 m、南北 210 m の大規模な方形区画が検出されている。また、河川の護岸施設内からは全形がうかがえる螺鈿で装飾された鞍が出土している（浜北市教委 2003・静文研 2010）。中屋遺跡の北東部にある北谷遺跡でも中世の瓦が出土しており、一帯が地域における仏教施設の拠点であったことがうかがえる。

戦国 戦国時代の二俣地区は、信州街道、三州街道、天竜川平野への街道が交錯する陸上交通の要衝であり、天竜川を用いた河川交通との結節点でもあった。二俣地区には、物資の流通を監視する「駄之口」が設置され重要性がうかがえる。また、徳川氏と武田氏の三方ヶ原の戦いと合わせて二俣城の攻防戦が紹介されることが多い。戦国時代の二俣地区の歴史的環境について、地域情勢を踏まえつつ、二俣地区に所在する 3 つに主要な城跡である 笹岡城・二俣城・鳥羽山城を中心として概略を示しておきたい。

「二俣城」の名称が文献史料において散見されるようになるのは、斯波氏と今川氏が遠江の領有を競った 15 世紀末から 16 世紀初頭の間である。当時の二俣城は 笹岡城を示すと考えられている（坪井 1981）。文献史料からは、斯波義雄が 笹岡城（二俣城）を拠点にし、進攻した今川氏親と戦いに至ったことがわかる。1510 年頃、今川氏親の家臣である瀬名一秀が 笹岡城（二俣城）を取り立てており、二俣城主であった可能性が示されている（糟谷 2014）。以降、二俣地区は約半世紀の間、今川氏の支配下におかれている。とくに天文 5 年以降は、二俣を今川氏の家臣である松井氏が 3 代約 30 年にわたり治めたとされる。

永禄 3 年（1560）、桶狭間の戦いを契機として、 笹岡城から南へ 1 km ほど南に位置する城山に二俣城を整備したとみられる。築城の担い手は松井氏や今川氏真の命により二俣城主になった鶴殿氏長と想定される。今川氏の勢力が衰えた永禄 11 年（1568）には遠江へ進攻した徳川氏に鶴殿氏が降っている。武田信玄が遠江進攻を開始した元亀 3 年（1572）には、徳川氏が家臣の中根正照らを二俣城に配し、二俣城の整備が進められたとみられる。二俣城の整備が進むとともに、 笹岡城は衰退し廃城を迎えたと考えられる。元亀 3 年（1572）、武田氏により二俣城が落城すると、依田信蕃らが城代を勤め、城の普請が行われた。元亀 4 年（1573）、徳川氏は二俣城の四方に砦を構築し、二俣城攻略の準備を進めた。天正 3 年（1575）年、長篠の戦いを経て武田氏が弱体化した期に乗じて、

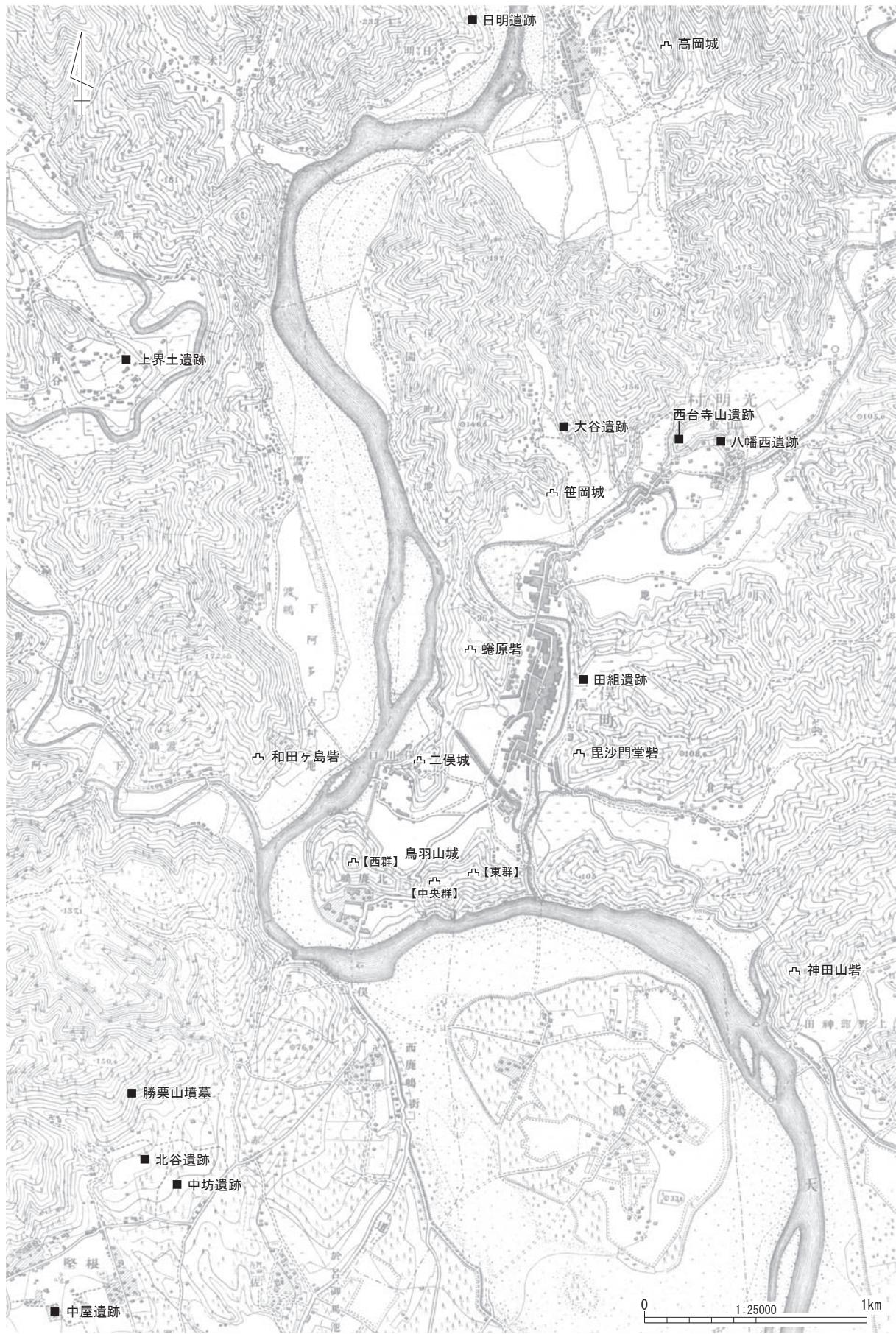


Fig.15 二俣城跡・鳥羽山城跡周辺の遺跡分布図

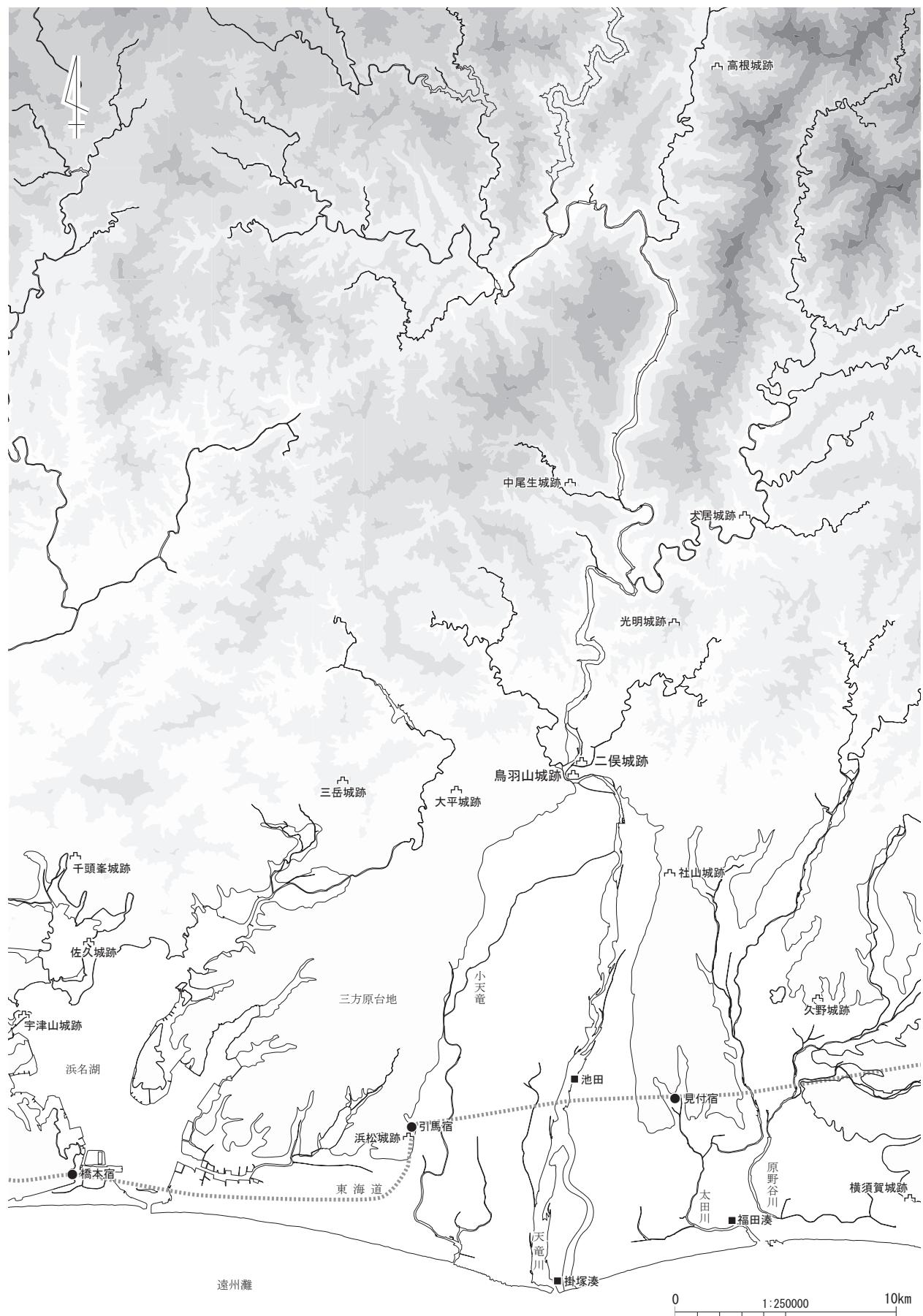
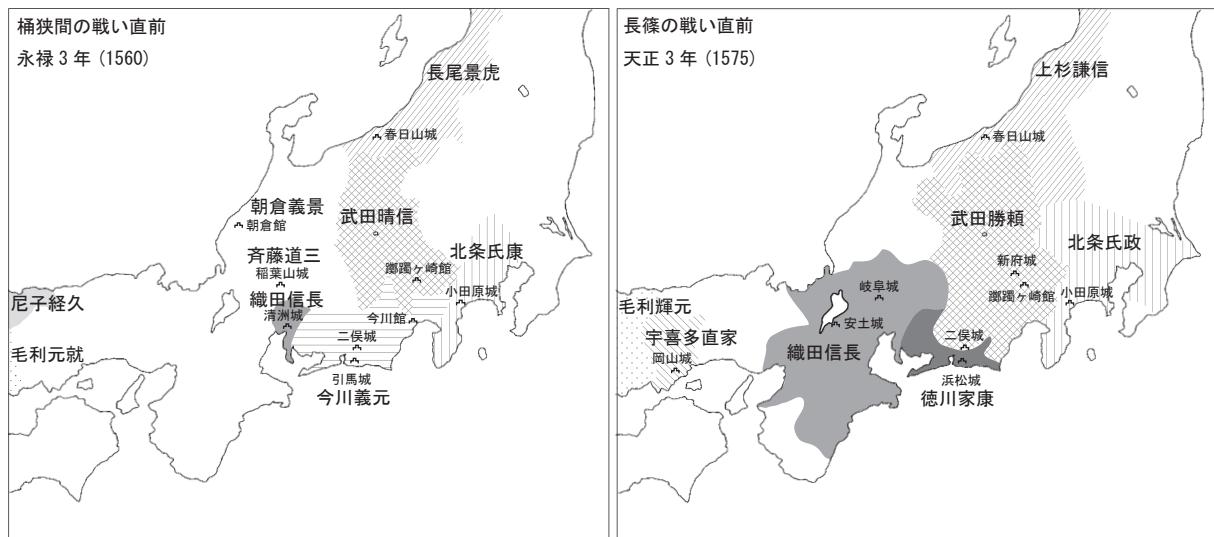
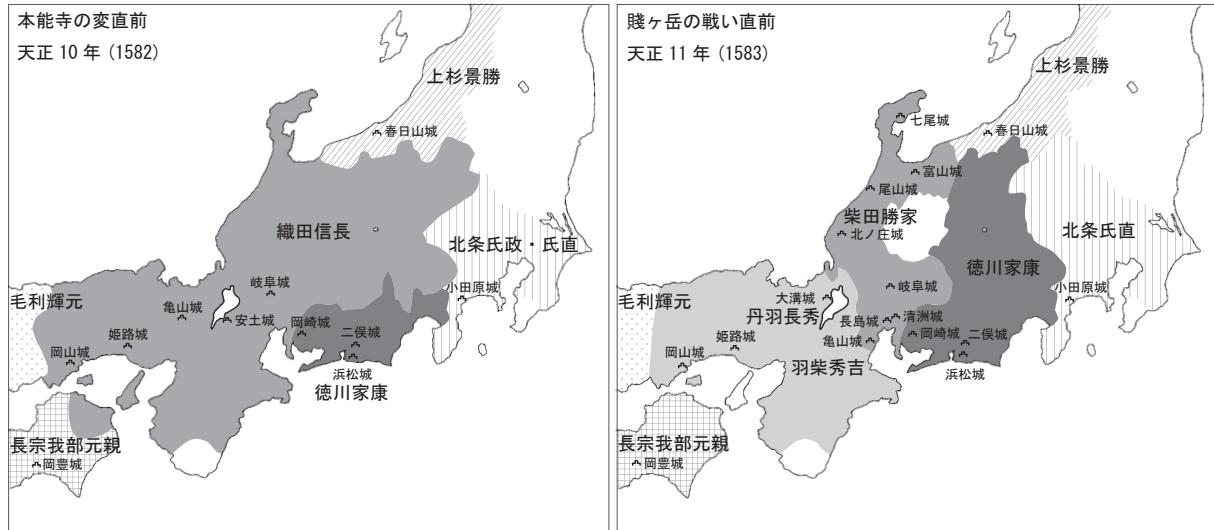


Fig.16 二俣城跡・鳥羽山城跡の位置と周辺城郭関連遺跡分布図



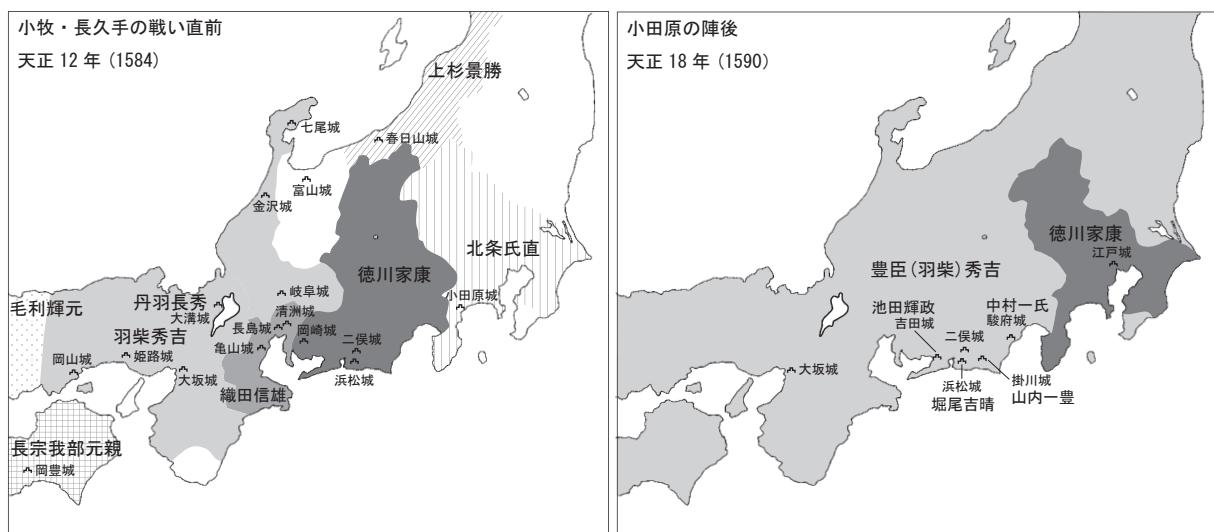
今川氏の勢力範囲が最大になった。西遠江の拠点は飯尾氏が領有した引馬城で、二俣城（笛岡城）は松井氏が守った。

徳川氏の独立・遠江進出と今川氏の滅亡を経て、武田氏が勢力範囲を最大にし、二俣城をはじめ北遠を領有した時期である。



武田氏の滅亡後、織田氏の勢力範囲が、最大になった時期である。徳川氏は、織田氏の同盟国として、三河・遠江・駿河の3国を領有した。

本能寺の変後、羽柴秀吉と柴田勝家が織田氏の主導権を競った時期である。徳川氏は甲信地域、北条氏は北関東へと勢力範囲を拡張した。



羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康の間で小牧・長久手の戦いが発生した。徳川家康が中部地域で最大の勢力範囲を治めた時期である。

徳川家康が関東へ移り、東海道沿いの主要な場所には豊臣秀吉の家臣が配置され、城郭の整備が進められた。

Fig.17 諸大名の勢力範囲

徳川氏が二俣城を攻略し、家臣の大久保忠世を城主として配置した。大久保忠世による二俣の領有は、天正 18 年（1590）の豊臣秀吉による小田原の陣後、徳川家康が関東へ移転するまでの約 15 年間続いた。この間、天正 7 年（1579）には、徳川家康の嫡男・信康が二俣城にて自刃し、二俣城の北東に位置する清瀧寺に葬られている。

近世 徳川家康の関東移封後、豊臣系大名の堀尾吉晴が遠江を領有し、弟の堀尾宗光が二俣城に入城した。徳川氏の旧領の東海道沿いには、駿府城に中村一氏、掛川城に山内一豊、横須賀城に渡瀬繫詮や有馬豊氏、浜松城に堀尾吉晴、吉田城に池田輝政などの豊臣秀吉恩顧の大名が配置され、徳川氏の整備した主要な城郭は石垣や瓦葺き建物をもった織豊系城郭への改修が行われた。現存している二俣城や鳥羽山城の遺構は、堀尾氏が浜松を領有した際に既存の武田氏や徳川氏が整備した城郭を利用して整備した姿を残しているといえる。

また、地域経営の面でも豊臣系大名は大きな変革をもたらしている。全国的に実施された太閤検地は、慶長元年（1595）と慶長 4 年（1599）に堀尾氏の領内で実施された記録が残る。旧来の土地制度である荘園制を払拭し、近世の土地制度である石高制への転換が図られている。

慶長 5 年（1600）、関ヶ原の戦い後、堀尾吉晴は出雲へと移封になり、浜松城主には松平忠頼が配置され、二俣・山東八ヶ村も領有した。また、徳川家康の関東移封後、豊臣秀吉が東海道沿いに配置した池田輝政は播磨、山内一豊は土佐、中村一氏の子・一忠は伯耆へとそれぞれ移動した。

慶長 20 年（1615）、大坂夏の陣後、一国一城令が発布されている。関ヶ原の戦い以降、軍事的な緊張が徐々に薄れ、山城である二俣城や鳥羽山城は徐々に役割を失っていったとみられる。遅くとも、元和元年（1615）には廃城になったとみられる。その後、二俣地区は、森林資源の豊富さや交通の要所であることなど、経済面の理由から重要視され、幕府直轄地となり、中泉陣屋詰の代官が統治し近代を迎える。

現在、二俣地区を南北に貫いて流れる二俣川は、従来、二俣城と鳥羽山城の間を流れて天竜川に注ぐなど、流路に屈曲が多く、水害が頻発している。明和 2 年（1765）から寛政 3 年（1791）にかけて鳥羽山を貫いて天竜川に注ぐように流路改変工事が行われた。嘉永 3 年（1850）には天竜川が氾濫し、川口堤が決壊したため、堤の復旧に二俣城の石垣材が使用されたと伝わる。内山真龍は、寛政年間に遠江国の 13 郡（浜名・敷智・引佐・庵玉・長上・豊田・磐田・山名・山香・周智・佐野・城飼・榛原）の郷名や地図、城跡等や元禄高帳の石高、口碑伝説をまとめた 13 卷に及ぶ『遠江国風土記伝』を著わしている。7 卷の「豊田」には二俣地区についてもまとめられており、二俣古城（笛岡城跡）や二俣城の絵図が掲載されている。これらの絵図は、真龍自らが現地調査を行い、当時の城跡の残存状態や城跡に対する認識を知る上でも重要な資料である。

（3）近代以降

近代 慶応 4 年（1868）、大政奉還がなると、中泉代官領から天領・府中藩領となった。明治 4 年（1871）には、天竜川沿いの各所に設置されていた番所・改所が廃止され、自由な往来が可能になった。以後、二俣町は、北遠地域と平野部を繋ぐ物資輸送・交通の要所として、発展していった。



Fig.18 川口堤防と旧二俣川流路の現状

3 調査研究史

(1) 調査研究の種別

二俣城跡及び鳥羽山城跡にかかる調査研究は、史料の分析から二俣地域の歴史的動向や城跡の評価を行う歴史研究に加え、城跡の構造について現地踏査を元に検討を加える縄張りの研究や、石垣の構築技法を検討する研究を中心に行われてきた。また、発掘調査の情報を踏まえた考古学的な研究も1980年代以降活発になされ、現在は総合的な城郭研究に止揚されつつある。ここでは、それぞれの分野にかかる調査研究史を紹介し、論点の整理をしておきたい。

(2) 歴史研究

二俣城跡にかかる歴史研究の嚆矢としては、内山真龍の『遠江国風土記伝』があげられる（内山 1799）。内山は二俣城について、文亀年間（1501～1504）に二俣昌長が創築したとし、松井氏の領有を経て、徳川氏と武田氏の攻防が繰り広げられ、天正18年（1590）、大久保忠世が小田原に移った後に廃城となったと解説している。また、内山は同書の中で、笛岡城を「二俣古城」として紹介し、二俣城（「鷹原城」とする）よりも古い時期の城跡であることを示している。さらに、二俣古城の構造を紹介し、二俣昌長が築城したと記している。笛岡城から二俣城に拠点が移ったことは、本文中で明示されていないものの⁽¹⁾、内山真龍がこうした変遷観をもっていたことがうかがえる。内山が示す二俣城の基本的な推移や城主の移り変わりは、その後の研究の上でも基本的に継承されていくが、創築者を二俣昌長と捉える点については、論拠が明確になされていない点でその後も長い期間、混乱をきたした。

二俣城の創築者を二俣昌長としたことにかかる疑義は、高柳光寿が早い段階で明らかにしている（高柳 1958）。高柳は、二俣昌長が実在したことは認めるものの、二俣城との関係は明確でないことを示し、永禄2年（1559）の松井宗信の居城を確実な事実として紹介している。しかし、この指摘はその後も正しく継承されず、二俣城の創築者を二俣昌長とする考えは1970年代まで通説的に流布し続けた。この頃の二俣城にかかる認識は、天竜市郷土誌稿第三集『二俣城』（大場ほか 1970）に詳しい。同書では二俣城主を二俣昌長とし、その後に、松井氏4代を紹介している。

1975年、秋本太二によって、享禄年間に二俣昌長が文書を発給していたのは二俣城ではなく、中尾生城（天竜区龍山町）であることが指摘された。また、秋本は『宗長手記』において永正年間頃に二俣城にかかる人物と

して取上げられている「左衛門佐殿」は二俣昌長ではなく、斯波義雄であることも明確にした（秋本 1974）。こうした基礎的な研究を統合し、笛岡城と二俣城、鳥羽山城について、史料に基づく実証的な研究を進めたのは、坪井俊三である。坪井は1981年に刊行された『天竜市史』上巻と『静



Fig.19 二俣城を中心とする武田・徳川両軍の進路（小和田 1989）

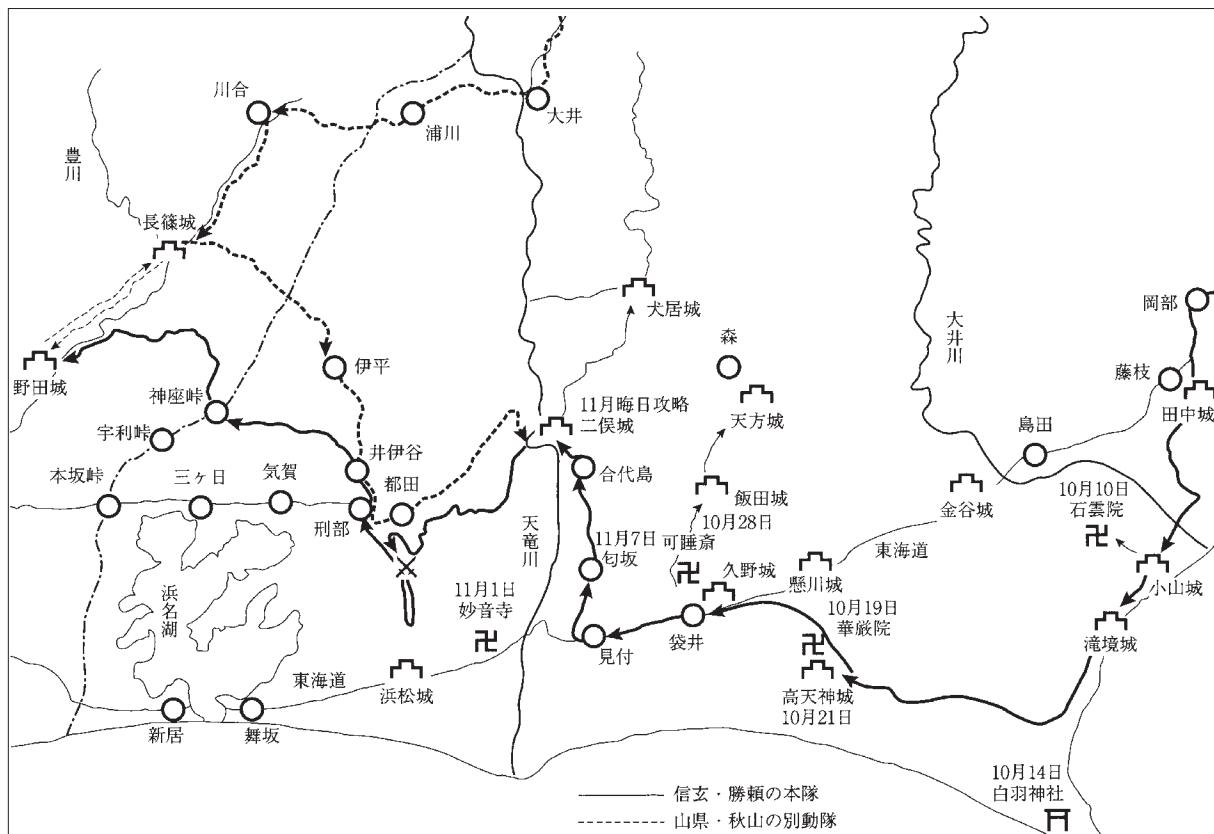


Fig.20 武田軍の侵攻経路（本多 2010）

岡県の中世城館』において3城にかかる論考を発表した（坪井 1981a・b）。この中で坪井は、古い時期に二俣城と呼ばれたのは 笹岡城のことであることを明確にし、15世紀末から16世紀前葉にわたる斯波・今川両氏の勢力争いの動向を整理した。また、天正18年の徳川氏転封の後、二俣の地が豊臣系大名堀尾氏の支配下に入ったことを示し、二俣城及び鳥羽山城が堀尾氏の支配のもとに存続したことも合わせて指摘した。

二俣城は元亀3年(1572)～天正3年(1575)の徳川氏と武田氏の攻防戦の舞台として著名であり、三方ヶ原の戦いを取上げた研究にも取上げられることが多い。三方ヶ原の戦いを扱った単著としては、高柳光寿著『三方原之戦』(高柳 1958)、小和田哲男著『三方ヶ原の戦い』(小和田 1989)があり、武田氏の侵攻経路を詳細に示して二俣城の攻防戦を紹介した。両書とも武田信玄本隊の侵攻経路は信州経由と指摘していたが、2007年、柴裕之によって駿河経由の侵攻経路が示され(柴 2007)、その後、多くの研究者が追認した(本多 2010など)。

1990年代になると『静岡県史』が刊行され、基礎的な中世史料が包括的に示された(静岡県 1994・1996)。またこの時期には城郭にかかる考古学的な検討が深まり、後述するように、二俣城と鳥羽山城に石垣が構築されたのは堀尾氏領有期であることが共通見解として広まっていく。こうした研究史料の整理と新知見を踏まえ、二俣の地をめぐる歴史研究は近年も進められている。坪井俊三は堀尾氏の二俣支配について整理している(坪井 2012)。また、糟谷幸裕は今川領有期の二俣城の動向について新出史料を交えて紹介している(糟谷 2014)。こうした詳細な歴史研究と後述する縄張り研究や考古学的研究を総合化する作業が求められよう。

(3) 縄張り・石垣研究等

江戸時代において、二俣城跡にかかる構造を記録したものとしては、浅野文庫所蔵の「諸国古

城之図「遠江二俣」（巻頭図版12）と『遠江国風土記伝』（内山 1799）所収の図（巻頭図版13）があげられる。これらの図は自然地形に沿った二俣城の諸施設を直線的に描くものの、曲輪や堀の位置関係や特徴を示し、二俣城跡の構造を模式的に示すものであった。高柳光寿著『三方原之戦』においては浅野文庫蔵の図を元に二俣城の構造が示されている（高柳 1958、Fig. 21）。

二俣城跡と鳥羽山城跡にかかる本格的な縄張り図は、1963年に群馬県在住の城郭研究家である山崎一によって作成された（Fig. 23）。この図は天竜市（当時）にも提供され、二俣城を紹介する簡易な印刷物に引用されるとともに、1979年刊行の『日本城郭体系』にも再トレースされた図が掲載された（関口 1979、Fig. 22）。山崎が作成した図は堀や曲輪の位置関係がやや不正確であるものの、地形に合わせた城の構造が示され、城内の施設名にかかる注記が初めて付された点で重要である。

二俣城跡の詳細な見取り図は、天竜市郷土誌稿第三集『二俣城』（大場ほか 1970）の作成に伴って新たに提示されている（Fig. 22）。同書は城跡の構造にかかる記述が詳細であり、草木に覆われた現在ではうかがえない二俣城跡の特徴が数多く記載されている。中でも城郭研究家、山崎一との書簡による指摘（1968年）を引用し、二俣城跡と鳥羽山城跡は別城一郭の関係にあること、両城は尾根を掘り切った山城を基礎とし、「戦国末期か徳川初期」（天正末期から慶長年間頃）に石垣づくりの城郭に改修されたことが記されている。石垣が導入される時期についての評価は、1990年代まで一定しないものの、現況の認識に近い指摘がなされている点は重要であろう。

二俣城跡と鳥羽山城跡の見取り図は、『静岡県の中世城館』（静岡県教委 1981）の刊行においても作成された。この時点で鳥羽山城跡が丘陵全体に連なる大規模な城郭であることが指摘され、東群、中央群に連なる広大な城域が図示された。両城にかかる縄張り図や見取り図は、その後も、関口宏行（関口 1988）⁽²⁾、や加藤理文（加藤 1997）によっても作成された（Fig. 22・23）。とくに関口の図は詳細なものであり、数多くの平坦面を曲輪として認定する。本書では、確実に城郭施設として認めうるもののみを遺構として取上げているが、今後、関口の指摘をもとにした周辺施設の再検討が必要であろう。

縄張りや構造の検討と合わせ、石垣の年代にかかる指摘もなされた。とくに注目が集まる二俣城跡の天守台については、1979年刊行の『日本城郭体系』において徳川家康が武田方から奪還した後に城主となった大久保忠世が構築したとされ（関口 1979）、その後の概説的な記述にも同様の見解が踏襲された。また、北垣聰一郎は徳川期の構築とする考えが一般的であった浜松城の石垣を、堀尾氏領有期の文禄年間のものと想定するとともに、鳥羽山城の石垣も名護屋城や松本城と近い時期、即ち、天正末年から文禄年間の頃と指摘した。いっぽう、二俣城跡の天守台については、江戸時代の構築の可能性を指摘した（北垣 1987）。二俣城の天守台にかかる北垣の見解は、後世の手が加えられていることとも関連していよう。

（4）考古学的研究

二俣三城における本格的な発掘調査は、1968年に

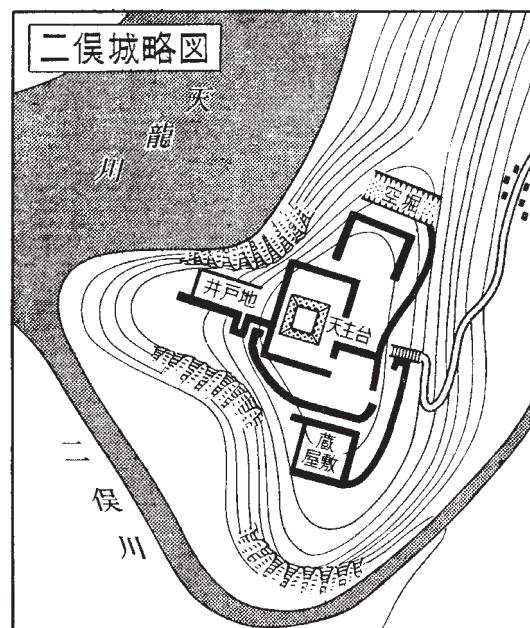


Fig.21 二俣城略図（高柳 1958）

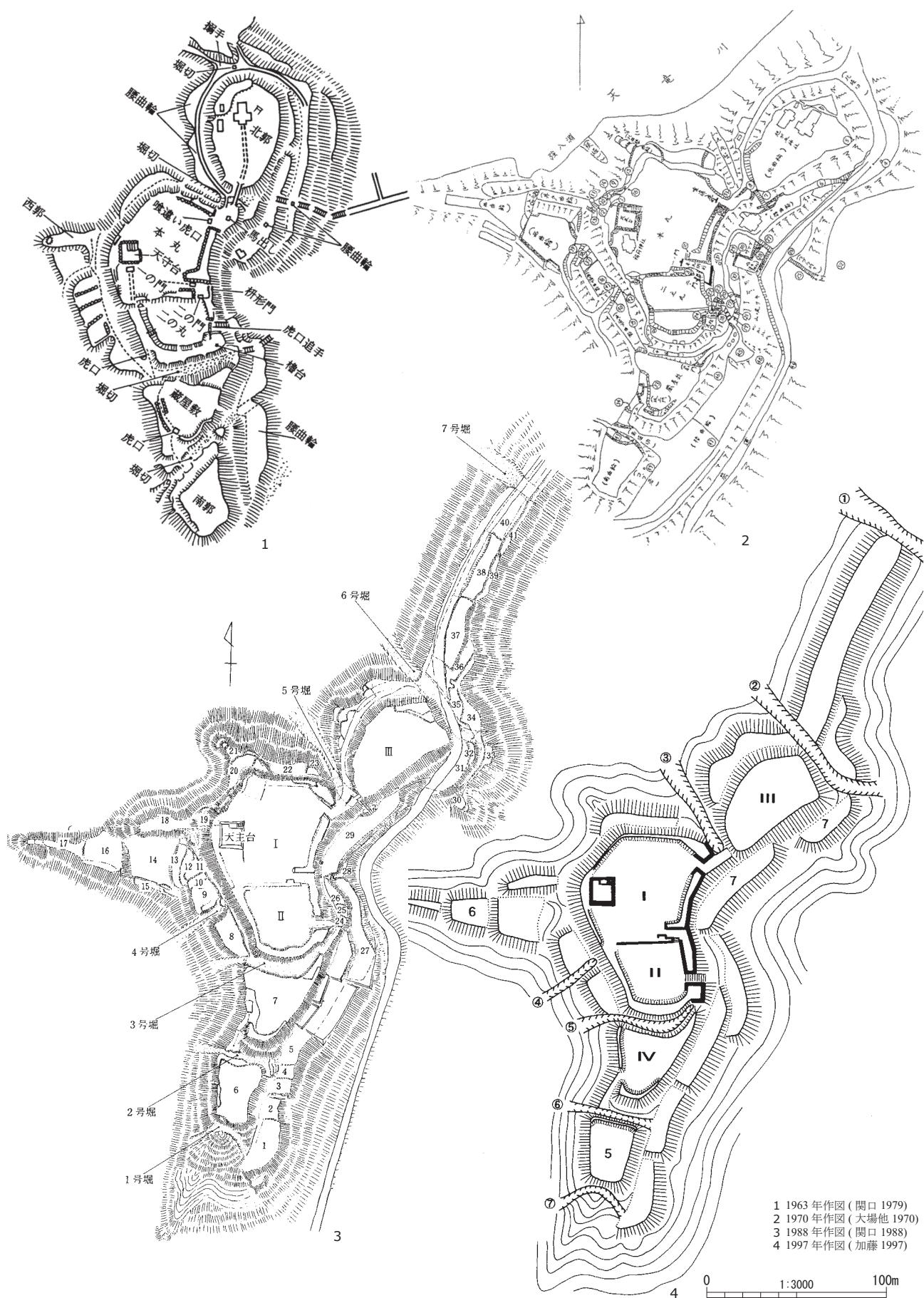


Fig.22 二俣城跡縄張図集成



Fig.23 烏羽山城跡縄張図集成

実施された天竜市役所建設に先立つ笛岡城跡の調査（奥田 1972）がその始まりといえるが、鳥羽山城跡では 1951 年以降、公園の管理人であった鈴木喜代次氏によって石垣の探索が積極的に行われていた。鈴木氏の探索については詳細な記録がないため詳細は明らかでないが、公園の整備状況を伝える写真や、雑誌における記事（歴史読本編集部 1973）を見る限り、広範囲に実施され、出土遺物もあったことがうかがえる。鳥羽山城跡の庭園遺構についても、少なくとも 1973 年の時点で明らかにされており、現地を視察した森蘿によって、遺構の報告と評価がなされた（森 1974）。森は比較資料が少ない庭園遺構を評価し、鳥羽山城跡の庭園については今川義元が関与した可能性を示唆した。

この頃、天竜市当局内で鳥羽山城跡の歴史的探索を行う機運が高まり、1975 年の 3 月（1 次調査）と 7 月（2 次調査）の 2 回にわたり発掘調査が行われた（奥田 1976）。この調査によって本丸内に礎石建物が確認され、数多くの陶磁器や土器が出土するなど重要な成果があがった。1960～1970 年代においては、中世城郭の調査事例が少なく、笛岡城跡及び鳥羽山城跡の調査成果は貴重なものであったが、その報告は概略的な遺構図と僅かな写真が示された概報にとどまるものであったため、長らく、その成果が正確に評価されることとはなかった。

1986 年、足立順司は城跡出土の陶磁器の年代観をもとに、城郭の存続時期と廃城の時期について触れた（足立 1986）。足立は、笛岡城跡、鳥羽山城跡から出土した陶磁器の年代観を通じて、笛岡城から鳥羽山城に中心的な時期が推移していることを示した。また、鳥羽山城跡の出土品は大窯 1～2 段階に中心があることを根拠に、鳥羽山城の廃城を大久保忠世の小田原移封の時期に求めた。

二俣城跡の存続時期について、採集した瓦をもとに堀尾期まで降らせることを指摘したのは加藤理文であった（加藤 1993・1994）。加藤は二俣城採集瓦にコビキ A 技法がみられることを重視し、堀尾氏領有期において二俣城に天守台や石垣、瓦葺建物が築かれたことを示した。加藤はその後も二俣城跡と鳥羽山城跡にかかる専論を発表し（加藤 1997）、両城にかかる重要な論点を提示した。その内容を列記すると、1) 笛岡城から二俣城・鳥羽山城への移転は漸次的で少なくとも永禄 3 年から永禄 10 年頃まで重複期間を認めてよいこと、2) 両城の要塞化は徳川家康が対武田戦を

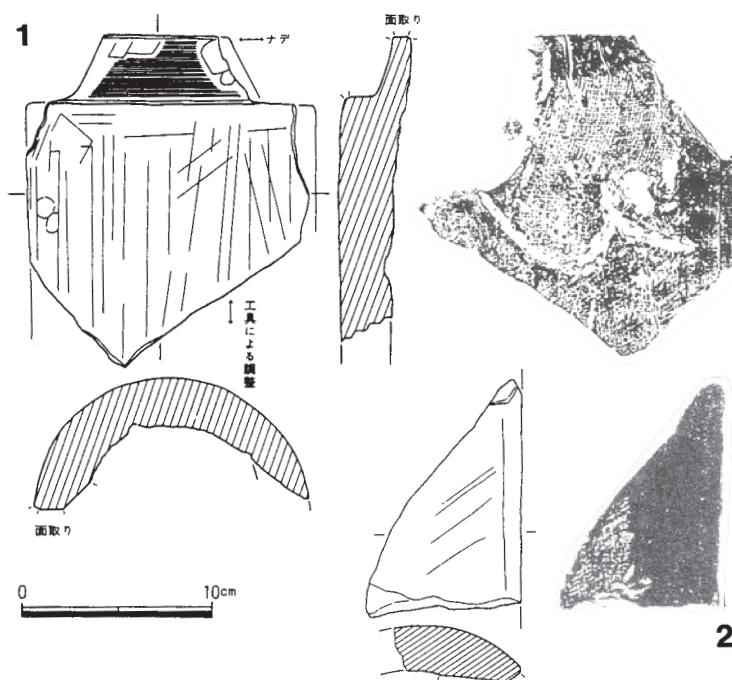


Fig.24 二俣城の採集の瓦（加藤 1 7）

意識した元亀 2 年頃に求められること、3) 武田方の改修は僅かで三号堀の整備程度しか指摘できないこと、4) 鳥羽山城跡の中央群及び東群の遺構は徳川勢の二俣城攻めの際に整備されたとみられること、5) 鳥羽山城跡の西群遺構は大久保氏や堀尾氏が改修して使用したとみられること、6) 二俣城の石垣や瓦は浜松城との関連が高く天正 18 年以降の堀尾氏領有期の所産とみられること、7) 鳥羽山城の石垣は二俣城のそれと比べて正面に大きく広い面を用いており視覚的効果を強く意識している

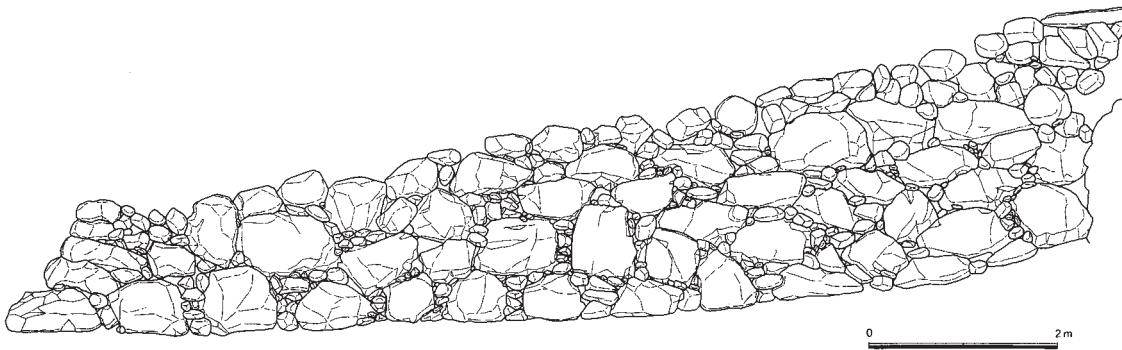


Fig.25 鳥羽山城跡大手門外櫛形西側の石垣（加藤 1997）

ること、8) 鳥羽山城と二俣城は機能が異なり、瓦を葺かない御殿建築があったとみられること、などの指摘があげられる。

加藤が示した数多くの論点の中でも、二俣城及び鳥羽山城に石垣が構築され、二俣城に天守が築かれたのは天正18年（1590）以降の堀尾氏領有期であることを明確にした点は特筆できる。この年代観は石垣の特徴によって古くから指摘されていたものの、資料が豊富に揃う全国の織豊期城郭の瓦を比較検討することによって導き出されたものであり、両城の歴史的評価を行う上での転換点となった。加藤はその後も、二俣城跡、鳥羽山城跡を紹介する概説書を数多く手がけ（加藤・中井編 2009、加藤 2011、城郭遺産による街づくり協議会編 2011など）、両城にかかわる自身の評価を磐石にしている。ただし、二俣城の時期別の細かな改修箇所については、遺構の時期認定が困難なこともあって評価が定まっていない。近年の論考では、土塁囲みの本丸と南の丸Ⅰおよびその間の横堀（三号堀）、南尾根筋に設けられた2条の堀切（一・二号堀）は武田側から徳川側が奪還した後の改修と捉えている（加藤 2014）。

出土品を再評価し、城跡の存続時期を明らかにする作業も進められている。笛岡城跡から出土した陶磁器の編年観をもとに、その廃絶時期を関口宏行（関口 2000）は16世紀前半に、藤澤良祐（藤澤 2000）や久野正博及び松井一明（久野・松井 2008）は16世紀後半に求める。

城郭にかかわる考古学的研究は、1990年代以降、比較資料の増加によって飛躍的発展している。本書でも発掘調査にかかわる情報を再整理し、あらたな評価をしうる情報を提示している。冒頭に述べたとおり、考古学的な手法を根幹に、歴史研究や構造研究を踏まえた総合的な城郭研究が可能な段階に至っているといえるだろう。

註

- 1 『遠江国風土記伝』の本文中では、二俣古城（笛岡城）について、「築く所の時代は詳ならず」と挿図中の注記とは異なる内容が示され、混乱がみられる。
- 2 関口宏行氏が作成した鳥羽山城跡の縄張り図は未公表であるが、本書に掲載することについて関口氏から承諾をいただいた。

参考文献（年代順）

- 内山真龍 1799『遠江国風土記伝』（1935刊本、谷島屋書店、1980復刻、世界聖典刊行協会）
 高柳光寿 1958『三方原之戦』春秋社
 大場亀吉・片田直太・野沢正司 1970『二俣城』天竜市地方史研究会
 奥田直栄 1972『遠州笛岡古城』天竜市教育委員会
 歴史読本編集部 1973「発掘されたまぼろしの城—遠江・鳥羽山城—」『歴史読本』1973年9月号 新人物往来社
 秋本太二 1974「今川氏親の遠江経略」『信濃』第26巻第1号

- 森蘿 1974「鳥羽山城の庭園遺構」『歴史読本』1974年4月号 新人物往来社
- 秋本太二 1975「中尾生城について」『地方史静岡』5号 静岡県立中央図書館(鈴木将典編 2012『遠江天野氏・奥山氏』岩田書店に再録)
- 奥田直栄 1976『遠州鳥羽山城』天竜市
- 関口宏行 1979「二俣城」・「鳥羽山城」『日本城郭体系』9 新人物往来社(小和田哲男編)
- 坪井俊三 1981a「戦国時代」『天竜市史』上巻 天竜市
- 坪井俊三 1981b「二俣の三城跡」『静岡県の中世城館跡』静岡県教育委員会
- 向坂鋼二・坪井俊三 1981「原始・古代編」『天竜市史』上巻 天竜市
- 静岡県教育委員会 1981『静岡県の中世城館跡』
- 足立順司 1986「静岡県下における廃城年代と陶磁器の年代観」『貿易陶磁研究』6 貿易陶磁研究会
- 北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版局
- 関口宏行 1988「二俣城」・「鳥羽山城」『図説中世城郭事典』(二) 新人物往来社
- 小和田哲男 1989『三方ヶ原の戦い』学習研究社
- 加藤理文 1993「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城跡IV』袋井市教育委員会
- 坪井俊三 1994「二俣城」・「鳥羽山城」『図説遠江の城』郷土出版社
- 静岡県 1994『静岡県史』資料編7 中世三
- 加藤理文 1994「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』
- 静岡県 1996『静岡県史』資料編8 中世四
- 加藤理文 1997「二俣城・鳥羽山城の創築、修築・廃城」『研究紀要』5 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 阿部浩一 1997「家康の遠江平定と三方原合戦」『静岡県史』通史編2 中世 静岡県
- 原廣志 1999「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡—総合調査報告書—』
菊川町教育委員会
- 関口宏行 2000「笛岡城跡」『横地城跡総合調査報告書 資料編』菊川町教育委員会
- 藤澤良祐 2000「遠江出土の瀬戸美濃焼」『横地城跡総合調査報告書 資料編』菊川町教育委員会
- 浜北市教育委員会 2003『中屋遺跡確認調査報告書』
- 菊川シンポジウム実行委員会 2005「笛岡・鳥羽山・二俣城跡」『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料編』
- 柴裕之 2007「戦国大名武田氏の遠江・三河侵攻再考」『武田史研究』37号
- 久野正博・松井一明 2008「遠江笛岡城の再検討」『静岡県考古学研究』No.40
- 加藤理文・中井均編 2009『静岡の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
- 本多隆成 2010『定本徳川家康』吉川弘文館
- 静岡県考古学会 2010『静岡県における戦国山城』
- 城郭遺産による街づくり協議会編 2010『浜松の城と合戦』サンライズ出版
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『中屋遺跡』
- 坪井俊三 2011「二俣村城下・堀勘兵衛」『天竜文芸』第2号
- 加藤理文 2011『静岡の城』サンライズ出版
- 城郭遺産による街づくり協議会編 2011『戦国時代の静岡の山城』サンライズ出版
- 坪井俊三 2012「堀尾氏の北遠支配」『浜松城主堀尾吉晴』浜松市博物館
- 加藤理文 2013「武田氏侵攻に備えた遠江諸城の改修」『遠江』第36号
- 溝口彰啓 2014「静岡県下の戦国期城郭における曲輪内建物について」『戦国武将と城』小和田哲男先生古希記念論集
サンライズ出版
- 加藤理文 2014「徳川家康五力国領有時代の城」『戦国武将と城』小和田哲男先生古希記念論集 サンライズ出版
- 糟谷幸裕 2014「今川領国下の遠州二俣城」『「戦国時代の浜松市内の山城ならびに家康由緒に関する古文書について
の研究」調査報告書』浜松市(渡辺尚志編)

第3章 史料調査

1 調査の概要

史料調査は平成26年度より開始した。二俣城跡及び鳥羽山城跡に関連する主要な史料は、既に『静岡県史』や『天竜市史』、『静岡県の中世城館』等において集成・掲載されていたため、そうした既知の史料を再集成・再評価するとともに、近年確認された史料や未知の史料については、研究者や関係機関等に聞き取り調査を行うなどの探索を実施した。こうした作業を経た上で、史料一覧をTab. 4～6にまとめた。主な史料の釈文は巻末の附編に掲載したので参照されたい。

絵図については、いずれも近世のものであるが、内山真龍資料館に所蔵されているものを中心とし、平成27年12月14～15日に内山真龍資料館において写真撮影を行った。広島市立中央図書館所蔵の「遠江二俣」『浅野文庫 諸国古城之図』については、ポジフィルムを借用して掲載した。絵図の一覧はTab. 7にまとめ、主な絵図は巻頭図版に掲載した。

調査については坪井俊三氏（元内山真龍資料館、現浜松市文化財保護審議会委員）のご指導・ご協力を賜った。また、各史料の詳細とその意義については、第8章の坪井俊三氏・本多隆成氏の論考で詳述されているため、本章では史料の一覧を示した上で、二俣城及び二俣の地の支配体制にかかる史料と徳川・武田の攻防にかかる史料を中心にその概略に触れることとする。

2 二俣城・鳥羽山城をめぐる史料

（1）史料からみた二俣城と二俣の支配体制の変遷

南北朝～室町期における今川氏の支配 二俣城の初見は史料1であり、建武5年（1338年）全国的に勃発した南北朝の争いの中、北朝方に属した内田致景が某に二俣城における軍功を上申したものである。当時の遠江国守護は今川範国であり、二俣の地も今川氏の支配体制の中にあったと考えられる。その他南北朝～室町期において、二俣城や二俣の支配について記された史料は確認されていない。

南北朝以来、遠江国守護は今川氏が務めていたが、応永12年（1405）に斯波氏に交替している。この頃の城は、現在の二俣城跡ではなく笛岡城跡と考えられている。

室町～戦国期における斯波氏の支配 15世紀初頭から遠江を斯波氏が支配してきたが、明応～文亀年間（1492～1504）、駿河の今川氏親が遠江への侵攻を開始した。この頃の二俣城に関する史料が、史料4～7である。文亀元年（1501）頃の今川氏親と斯波義雄との間の攻防に関する史料で、斯波義雄が二俣周辺を拠点にしていた状況が把握できる。この後、斯波は敗れ、遠江は再び今川の支配下に置かれることとなる。

戦国期における今川氏の支配 史料8は年不明の史料であるが、今川氏の一族である瀬名一秀が信濃の小笠原定基にあてた書状で、今川氏親書状の副状であり、二俣城を「取立」てたことを記している。糟谷幸裕氏は小笠原定基の没年や、本状である今川氏親書状の内容などから、永正6～7年（1509～1510）頃と捉えており（糟谷2014）。この頃に瀬名一秀が今川氏親の命により二俣城主を務めた可能性がある。

史料9は、発給者不明の史料であるが、永正7年の二俣城における戦いにおいて小俣・形丸（現

Tab.3 二俣城、二俣における支配の推移

段階	上級領主	城の機能した主要な時期	期間	年	内 容	史料No.	
第1段階	今川	篠岡城	1338～1405	建武5年(1338)	北朝方の内田致景が内田西妙を二俣城に詰めさせる。	1	
	斯波						
	今川		1405～1511頃	文龜元年(1501)頃	斯波義雄が二俣周辺を拠点に今川軍と戦う。	4-7	
	今川		1511頃～1568	永正3～8年(1506-11)	瀬名一秀が二俣城を取り立てる。	8	
				享禄2年(1529)以前	二俣昌長、朝比奈時茂が今川の二俣支配の一翼を担ったか。	11-13	
				天文5年(1536)頃	この頃に松井貞宗が二俣を支配か。	13	
				永禄3年(1560)	父貞宗の所領を引き継いでいた松井宗信が桶狭間で討死。	14-16	
					宗信の子松井宗恒が二俣他の所領を引き継ぐ。	17	
第2段階	徳川	二俣城	1568～1572	永禄11年(1568)	鶴殿氏長が今川氏真の命で二俣城入城。	22-24	
	同年			徳川家康、遠江に侵攻。氏長は家康に降り、所領を安堵される。	20・21		
	武田		1572～1575	元亀3年(1572)	中根正照・青木又四郎・松平康安が二俣城に詰める。	38-40	
				同年	武田信玄、二俣城を手中とすると、在番衆を入れて普請を行う。	31	
				元亀4年(1573)	家康が二俣城奪還のため、周囲に砦を築く。	35	
	徳川		1575～1590	天正2～3年(1574-5)	依田信蕃、深山宗三らが二俣城の在番役を務める。	44-46	
				天正3年(1575)	家康、二俣城を奪還、大久保忠世と一族を二俣に在任せせる。	46-48 51・52・55	
				天正7年(1579)	家康、二俣城にて長子信康を切腹させる。	53	
第3段階	豊臣	鳥羽山城	1590～1600	天正18年(1590)	堀尾吉晴が浜松城入城。吉晴弟堀尾宗光(氏光)二俣を領する。	60-62	
	徳川			慶長6年(1601)	松平忠頼が浜松城主となり、二俣村等を領する。	63	
			1601～1615	慶長14年(1609)	忠頼死去。家康の子徳川頼宣が遠江・駿河・東三河を領する。		
				1615	元和元年(1615) 一国一城令。遅くともここで二俣城・鳥羽山城は廢城。		

天竜区春野町) の百姓らの戦功を賞したもので、二俣から離れた地の農民まで一連の戦いに加わっていた様子がみてとれる。

史料11は、享禄2年(1529)に二俣昌長が「当城」における瀬尻村(現天竜区龍山町瀬尻)の善左衛門尉らの戦功を賞したものである。『遠江国風土記伝』では二俣城の築城者とされているが、「向坂家譜」の今川氏輝判物写では、天文4年(1535)以前に中尾生城(天竜区龍山町)に在城していたことが判明しており、「当城」も中尾生城の可能性が高いと考えられている。一方で、史料12では享禄3年(1530)に寿桂尼が玖延寺に寺領を安堵しているが、そこに二俣昌長が寺領を寄進していたことが記されている。二俣城と直接的な関係を示す史料は確認されていないが、享禄2年以前に二俣の支配に関わっていた可能性を示すものといえる。

また、今川氏の家臣である朝比奈時茂についても二俣昌長と同じく史料12及び史料13において、玖延寺に寺領を寄進していることが記されており、時期未詳ながら光明寺に対しても寺領を寄進する(静7-3234)など、二俣における今川支配の一翼を担っていたと考えられる。

史料13～17は、松井氏3代(貞宗・宗信・宗恒)にかかる史料である。松井氏も今川の家臣であり、貞宗は史料13において二俣昌長・朝比奈時茂とともに玖延寺に寺領を寄進していることが知られる。宗信は、永禄2年(1559)に父貞宗より譲与された領地を今川氏真から安堵されている(史料14)。しかし永禄3年の桶狭間の戦いにおいて宗信は討死し(史料15)、3日後には今川氏真の家臣三浦正俊より貞宗に対して、城の守りについて油断しないように伝える文書が発給されている(史料16)。史料17では、宗信の子宗恒が所領を引き継いでいる。宗恒は、その後永禄6

～8年頃の遠州怨劇において今川に反旗を翻すが、鎮圧され逼塞したとみられる。史料23～24では、松井宗恒の没落後に鵜殿氏長が今川方として二俣城に入っていたことが記されている。

戦国～安土桃山期における徳川氏・武田氏の支配 今川が弱体化していく中、徳川家康は遠江へ、武田信玄は駿河へと侵攻して今川を滅亡させた。二俣城には鵜殿氏長が入城していたが家康に降り、永禄11年（1568）末に所領を安堵され、二俣城の防備を命じられている（史料20・21）。

その後、信玄の遠江侵攻に備え、家康は家臣の中根正照・青木又四郎・松平康安らを二俣城に詰めさせている（史料38～40）。

元亀3年（1572）11月末、武田軍により二俣城は落城し（史料25～34）信玄はただちに在番衆を入れて普請を行っている（史料31）。また信玄は、かつて二俣を領有し、遠州怨劇後に没落していた松井宗恒に一部の旧領を安堵する（静8-560）など、在地の土豪に所領を与え、遠江における支配を進めていった。12月22日の三方ヶ原の戦いでも信玄は家康を破り、翌元亀4年に信玄が亡くなった後も武田氏による二俣城の支配は続いた。史料44・46には天正2～3年（1574～5）に二俣城に在番した人物として依田信蕃・深山宗三の名が見られる。

家康も元亀4年（1573）から二俣城奪還の機会を窺い、二俣城の周囲に砦を築いて攻略を開始した（史料35・46・47）。天正3年（1575）末に二俣城を落とし（史料48）、大久保忠世に二俣の地を治めさせ（史料51・52）、忠世の一族などを二俣の地に配置した（史料52・55）。大久保忠世の二俣領有は、豊臣秀吉によって家康が関東へ転封される天正18年（1590）年まで続いた。

安土桃山期における堀尾氏の支配 家康の関東転封に伴い、大久保忠世をはじめ家臣達も遠江を離れ、豊臣秀吉の家臣堀尾吉晴が浜松城に入城し、秀吉から西遠～中遠地域を領地として与えられた（史料60）。二俣の地は、吉晴の弟である宗光（氏光）が治めた（史料61・62）。この頃、浜松城・二俣城・鳥羽山城では石垣と瓦葺きの建物が築かれ、城下町が整備されるなど、城郭として大きく変貌したと考えられる。

江戸初期以降の親藩譜代大名の支配 慶長5年（1600）年の関ヶ原の戦いで東軍を率いた家康が勝利すると、東海地方に領地を有していた豊臣恩顧の大名は遠国へ移され、堀尾氏も出雲国へ転封となつた。翌慶長6年に松平（桜井）忠頼が浜松に入部し、二俣周辺を領した（史料63）。二俣における支配体制はよくわかっていないが、忠頼の家臣堀重俊による「城下」の地の寄進状（史料64）が残されている。

忠頼が慶長14年（1609）に亡くなると、家康の子である徳川頼宣が遠江一帯を領した。頼宣は幼年であったため、実質的には浜松城主を務める水野重央や、代官衆による領地支配が行われたとみられる。慶長20年（元和元年、1615）の大坂夏の陣で豊臣氏を滅亡させた幕府によって一国一城令が出されると、各地で大名の居城以外の城は破却された。この頃の二俣城・鳥羽山城は、すでに戦略上の拠点という役割を失っており、早ければ忠頼支配期、遅くとも一国一城令をもって廃城となつたとみられる。

（2）二俣城をめぐる徳川・武田の攻防

元亀3年の武田信玄による攻略 史料25～37は元亀3年（1572）の武田軍による二俣城攻めに関する史料である。史料25では、信玄が二俣城攻めの前に在地の土豪三輪元致に調略を促している。11月上旬より武田軍の二俣城攻めは開始された。武田軍は籠城する中根正照らに対して水の手を断つ戦法を取り、11月末には開城させることに成功した。史料28や33には天竜川から水を汲んでいた縄を、武田軍が船を使って切ったと記されている。

元亀4年から天正2年の攻防 二俣城を奪われ、その直後の三方ヶ原の戦いにも敗れた家康であったが、すぐに二俣城奪還に向け動き始める。史料35の『三河物語』では元亀4年(1573)4月には、二俣城攻略のために社山や合代嶋、道々(渡ヶ嶋)に砦を築いたとされる。武田勝頼も家康を警戒して、松井宗恒に本領を安堵し光明城の城番を疎略なく務めるよう伝えている(静8-656)ほか、家臣の山県昌景に二俣に飛脚を遣わせ、家康の動きを探ろうとした(史料41)。改元後の天正元年(1573)9月に武田方の三河長篠城(愛知県新城市)を家康に攻められた勝頼は、山県昌景や穴山信君を後詰に当たらせ、二俣から援軍を出すよう命じる(史料42)が奪われている(静8-673)。

長篠城を手に入れた家康だったが、一方で遠江では劣勢を強いられた。史料43には、天正2年(1574)に家康が二俣城を攻めたことが記される。『三河物語』によれば、家康によるこの二俣城攻めやその後に行われた犬居城(天竜区春野町)攻めは失敗に終わり、徳川方の小笠原氏助が守っていた高天神城(掛川市)も勝頼に奪われている(静8-772)。このように三方ヶ原の戦い以降の遠江から三河にかけて、徳川・武田の一進一退の攻防が繰り広げられていた。

天正3年以降の攻防 前年に高天神城を落とすなど、遠江において家康に対し優勢に立った武田勝頼は、足助城(愛知県豊田市)や野田城(愛知県新城市)など三河の諸城を落とし、長篠城奪還を目指した。それに対して家康は織田信長の援軍を得ると、5月に長篠の戦いで武田軍に大勝、遠江においても失地の回復を目指し、二俣・光明・犬居の城の奪回に動いた。

勝頼は、6月に光明城の在番を務める天野藤秀に守りを固めるよう命じるが(静8-910)、7月には家康が光明城を攻めて落城させている(『三河物語』)。勝頼は、光明城の落城はやむをえないとして、諏訪原城(島田市)、小山城(吉田町)、高天神城の防御を固めるとともに、犬居城が心もとないとして三浦員久らに加勢を促すよう山県源四郎に命じた(静8-912)が、同月中に家康は犬居城のある領家郷に禁制を出していることから(静8-915)、犬居城も間もなく落城したとみられる。その後も家康は諏訪原城も落とし、小山城、高天神城も攻めながら、12月にはついに二俣城を奪還した。その後は攻防の舞台を中遠~西駿に移し、高天神城、小山城、田中城(藤枝市)などをめぐって争い、天正9年(1581)に高天神城を家康が奪還したことで、遠江における徳川・武田の攻防に終止符が打たれた。翌天正10年に勝頼は自刃し、武田氏は滅亡している。

家康による二俣城の奪還の布陣 天正3年の家康による二俣城攻めについては、史料46『依田記』、史料47『三河物語』に詳しい。いずれも二次史料であるが、そこから徳川家康の二俣城攻めの布陣について、現地に残る地名や遺構ともあわせながら推測してみたい。

『依田記』は寛永20年(1643)頃の成立とされ、依田康勝が二俣城の武田方の在番を務めた父依田信蕃の功績を中心として記述した家伝である。

『三河物語』は上・中・下の3巻から構成される。寛永3年(1626)以降に大久保忠教が著したとされ、江戸時代に多くの写本が出回っている。忠教は徳川の家臣で、通称彦左衛門として江戸時代以降には講談で取り上げられ、その名が知られている。二俣城奪還後の二俣城代を務めた大久保忠世の弟でもあり、椎ヶ脇神社の関係者にあてた詫び状では、若い頃に神社で無礼を働いたことを後悔し、お詫びに金子を遣わしている(天続4-75)ことから、二俣に一時居住していた可能性がある。

いずれの史料も後に記された家伝的な史料であり、内容の信憑性について慎重に判断しなければならない側面はあるが、両書の著者の出自の関係上、二俣城の様子について細かく触れられている重要な史料である。家康が築いた砦にかかわる部分を引用すると、『依田記』では、「南 錄方山／辰巳 鳥羽山／東 かくら口山／北 みなはら口山／西 とうたうの取手、是和田ヶ島共申候・・・」とある。一方で、『三河物語』では、「・・・毘沙門堂 戸ば山 蟾原 和田が鳴に取手

を被成給ふ・・・」とある。

Fig. 26 は、『三河物語』と『依田記』に記されている砦の名称や位置を地図上に落としたものである。いずれの史料も二俣城の周囲に砦を築いたことが触れられているが、呼称や数に違いがある。二俣城の北側に配置された蟻原砦と、天竜川を挟んだ西側の和田ヶ島砦については、両者の呼称はほぼ一致している。また、東側の砦についても呼称は異なるが、現在毘沙門堂砦としている位置のことを指していると思われる。問題は南側の砦の呼称であり、『三河物語』では方角は記されていないが「戸ば山」と記され、『依田記』では「南 錄方山、辰巳（南東）鳥羽山」と2箇所の砦が記されているのである。

鳥羽山には、大きく3つの頂があり、西側の頂の石垣が残る織豊期の遺構は二俣城の南西方向に位置し、中央や東側の頂周辺の石垣を持たない曲輪や、二俣城側の北麓斜面に設けられた大規模な横堀など戦国期山城の様相を呈する遺構は、二俣城の南東方向に位置する。現在残る小字名も西側～中央の頂周辺は「南山」で、東側の頂周辺が「鳥羽山」である。天正3年に家康が本陣を敷いたのは、現在石垣が残され「鳥羽山城跡」として広く認知されている西側の曲輪群ではなく、中央か

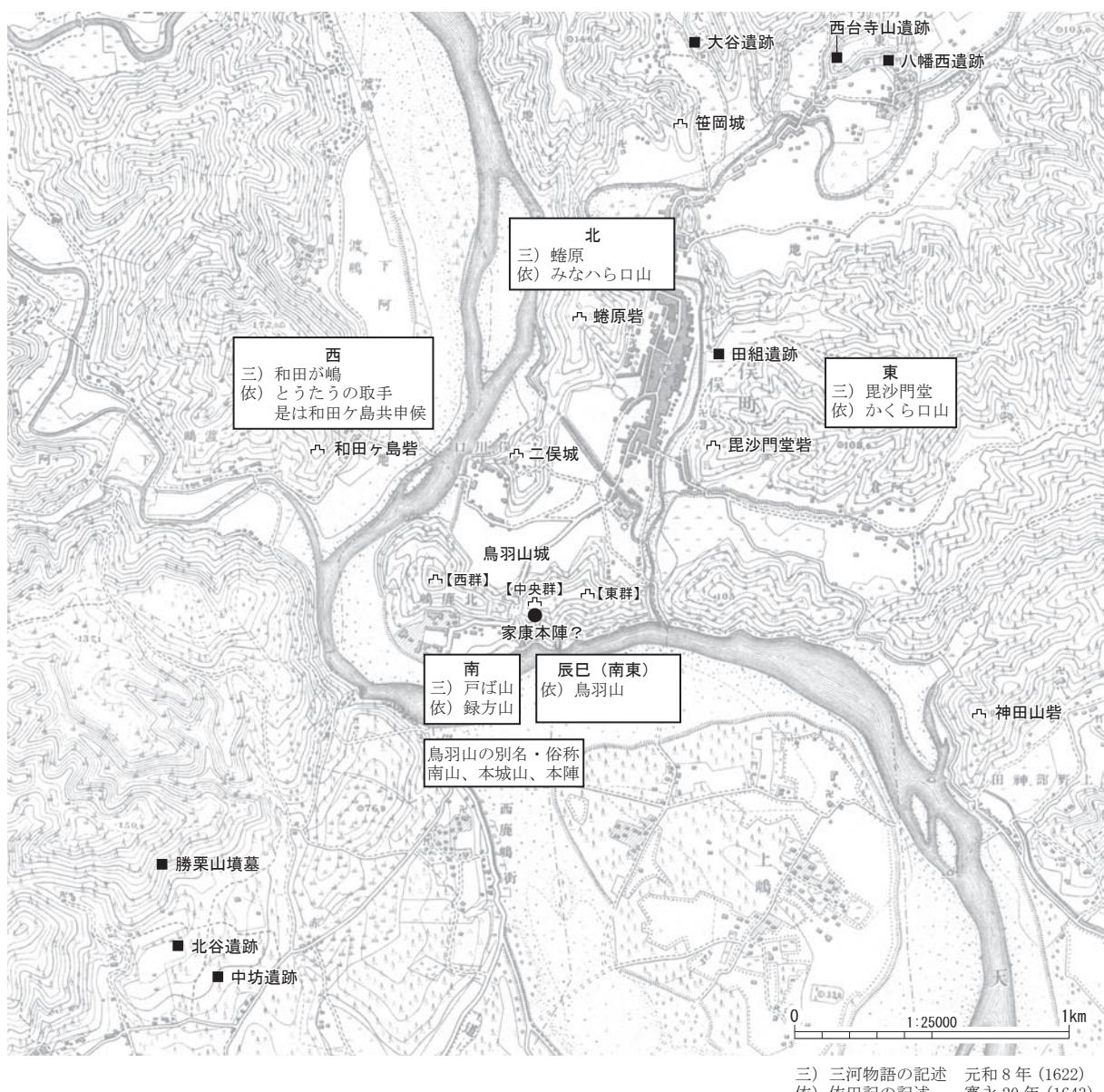


Fig.26 天正3年 家康の二俣城攻め陣配置図

ら東側にかけての部分であった可能性が高いと考えられる。

3 二俣城・鳥羽山城をめぐる絵図

二俣城・鳥羽山城が使用されていた時期に描かれた絵図は存在せず、いずれも近世段階に描かれたものである。一覧表を Tab. 7 に掲載している。

絵図 1（巻頭図版 12-1）は、広島藩主を務めた浅野家に伝えられたもので、近世初頭に廃城となつた全国の 177 城の絵図集『諸国古城之図』のうち、二俣城を描いた絵図である。17 世紀代に描かれたとされ、二俣城を描いた絵図で最も古いものと考えられるが、縄張りの表現は簡略化されており、現地の状況とそぐわない箇所もみられるため、現地確認をせず描かれたものと推測される。

絵図 2 は、寛文年間（1661-1663）成立の『城塞訣史』の写本に描かれた二俣城の見取図である。絵図 1 と表現に類似点が多いことから、原図が存在し、それを写していた可能性が考えられる。

絵図 3 は、元禄 11（1701）年に描かれた北鹿島村絵図で、鳥羽山の地名が記されている。

絵図 4（巻頭図版 15-2）は、18 世紀初頭に描かれたとされる清瀧寺領絵図である。清瀧寺は二俣城で自刃した松平信康の菩提寺であり、二俣城跡の北側に近接する。二俣城跡の部分に「古御城」と記載があり、石垣の表現もみられる。

絵図 5（巻頭図版 14-1）は、1753（宝暦 3）年に描かれた二俣村山東村絵図である。二俣村と山東村の争論に際して作成された経緯をもつため簡略的ではあるが、二俣城の天守台と本丸、二の丸が表現されている。また当時の道や河川の流路などをうかがうことができる。

絵図 6（巻頭図版 13）は、寛政 11（1799）年に当地の国学者内山真龍が著した『遠江国風土記伝』に掲載されている「二俣城跡古町望図」である。二俣城の曲輪が描かれているほか、鳥羽山城の部分にも曲輪の表現がなされている。この絵図には、元亀 3（1572）年に武田軍が二俣城攻めで水の手を切ったとされる井戸の推定地が表現され、西の丸周辺を蔵屋敷と呼称していることなどが記されており興味深い。絵図 7（Fig. 115）は、絵図 6 と同じく『遠江国風土記伝』に掲載されている「二俣古城図」である。笛岡城の唯一の絵図であり、土壘をもつ方形の曲輪が表現されている。また、笛岡古城の説明文中には「地を穿てば則ち陶器・矢根等出づ」と、遺物が出土することが記されている。

絵図 8・9（巻頭図版 16-1・2）は、いずれも 19 世紀代に描かれたもので、二俣城と鳥羽山城の間を流れていた二俣川が南へ直線的につけかえられた後のものである。絵図 9 には「城山」「鳥羽山」の記載はあるが、絵図 8 には城や城の部分の地名などの表記はみられない。

参考文献

- 糟谷幸裕 2014 「今川領国下の遠州二俣城」『戦国時代の浜松市内の山城ならびに家康由緒に関する古文書についての研究』調査報告書 浜松市・一橋大学大学院社会学研究科渡辺尚志研究室
- 静岡県 1997 『静岡県史』通史編 2 中世
- 天竜市 1981 『天竜市史』上巻
- 本多隆成 2010 『定本 德川家康』吉川弘文館
- 坪井俊三 2012 「堀尾氏の北遠支配」『浜松城主 堀尾吉晴』浜松市博物館
- ※引用文献は表の凡例に示した。

Tab.4 二俣城・鳥羽山城関連文献史料一覧（1）

No.	一次史料	史料名	西暦	和暦	月日	摘要	掲載史料	備考
1	○	内田致景軍忠状写	1338	建武5	正月	北朝方に属した内田致景が二俣城における合戦での軍功を上申	静6	『内田文書』 二俣城初見
2	○	西園寺実俊施行状	1362	貞治元	10月 19日	西園寺実俊、熊野山新宮造當料所遠江国吏務職に関する訴訟を幕府に伝達 国領三十三ヶ郷の中に「二俣郷」あり	静6	もしくは前年の康安元年 『熊野速玉神社文書』
3		長興寺額口銘文	1457	康正3	9月 9日	妙干尼 二俣長興寺に額口を奉納する 二俣長興寺が長光寺の前身とすると二俣古城(笛岡城)との関連が推測できる		内山真龍資料館所蔵
4	○	斯波義雄書状(切紙)	1501	文亀 元年力	8月 12日	斯波義雄、小笠原定基・貞忠父子に、同貞朝が二俣に在陣している事を告げ、重ねて出陣を要請	静7	『勝山小笠原文書』
5	○	斯波義雄書状(切紙)	1501	文亀 元年力	8月 12日	同上	静7	『勝山小笠原文書』
6	○	『宗長手記』				朝比奈備中守(泰懲)の尽忠 社山城にいた斯波義雄を二俣に退ける	静7	永正元年の記事の前に記される
7	○	斯波義雄書状(切紙)	1501	文亀 元年力	11月 7日	斯波義雄、小笠原定基に、遠江国に在陣中の同貞朝の信濃帰国が延期になった事を告げ、諒解を求める	静7	『勝山小笠原文書』
8	○	瀬名一秀書状(切紙)	1506- 1511	永正3-8 力	3月 23日	瀬名一秀(今川氏親家臣)が信濃小笠原定基に書状を送り、二俣城を取り立てたことを告げる 今川氏親書状の副状	静7	『勝山小笠原文書』
9		某判物写	1510	永正7	5月 23日	某、遠江国二俣形丸百姓らの戦功を賞する	静7	『遠江風土記伝』卷8 内山家寄託文書
10	○	今川氏親禁制写	1521	永正18	正月 28日	今川氏親、遠江国玖延寺に禁制を下す	静7	『玖延寺文書』
11	○	二俣昌長判物写	1529	享禄2	5月 12日	遠江国二俣昌長、瀬尻善左衛門尉らの戦功を賞し、年貢錢を免除する	静7	『遠江風土記伝』卷8 内山家寄託文書
12	○	寺領安堵朱印状写	1530	享禄3	6月 27日	寿桂尼(今川氏親後室)の安堵状写 に二俣昌長・朝比奈時茂の名がみえる	静7	『玖延寺文書』玖延寺所蔵
13	○	今川義元寺領安堵判物写	1536	天文5	12月	遠江国二俣郷阿藏村内玖延寺寺領安堵判物に松井貞宗の名がみえる	静7	『玖延寺文書』玖延寺所蔵
14	○	今川氏真判物写	1559	永禄2	2月 22日	今川氏真、松井宗信に遠江国所々知行分・代官職を安堵する	静7	『土佐国蠹簡集』残編3 高知県立図書館蔵 父貞宗譲与とあり 二俣等は以前からの所領であろう
15		『信長公記』首巻	1560	永禄3	5月 19日	桶狭間の戦いで二俣城主松井宗信討死	静7	
16	○	三浦正俊書状写	1560	永禄3	5月 22日	三浦正俊、今川義元敗死後の始末につき、松井貞宗に書状を遣わす	静7	『土佐国蠹簡集』残編6 高知県立図書館所蔵
17	○	今川氏真判物写	1560	永禄3	12月 9日	今川氏真、松井宗恒に遠江国鎌田御厨等の所領を安堵し、蔭山尾張守らを同心とする	静7	『土佐国蠹簡集』残編3 高知県立図書館所蔵
18		家忠日記増補追加	1568	永禄11	4月	遠江国二股左衛門尉・久野宗能・徳川家康に味方する	静7	
19	○	今川家朱印状(折紙)	1568	永禄11	9月 21日	今川家、遠江国犬居への兵糧米の運搬通行を認める	静7	『奥山文書』
20	○	徳川家康起請文写	1568	永禄11	12月 26日	徳川家康、鵜殿氏長らに遠江国二俣城の防備を命じ、所領を安堵する	静7	『譜牒余録』後編7
21	○	徳川家康判物写	1568	永禄11	12月 26日	同上	静7	『譜牒余録』後編7
22		『寛永諸家系図伝』第14				鵜殿氏長について	寛永 14	
23		『新訂寛政重修諸家譜』第18				同上	寛政 18	
24		鵜殿氏系図				永禄11年氏長遠州二俣に在り	愛知	『鵜殿家史』享保9(1724) 完成史料
25	○	武田信玄判物	1572	元亀3	10月 10日	武田信玄、三輪次郎右衛門尉(元致)に、遠江国二俣城の攻略を促す	戦国	東京都・個人所蔵
26	○	武田信玄書状	1572	元亀3	11月 19日	武田信玄、遠江国二俣より朝倉義景に書状を送り戦況を報ずる	戦国	徳川黎明会所蔵
27	○	武田信玄条目	1572	元亀3	11月 19日	同上	戦国	徳川黎明会所蔵
28	○	山県昌景書状	1572	元亀3	11月 27日	山県昌景、奥平定能への書状の中で、遠江国二俣城における戦闘の様子を記す	戦国	『奥平家文書』
29	○	北条氏政書状	1572	元亀3	12月 8日	北条氏政、由良成繁への書状の中で、遠江国二俣城が陥落したこと記す	静8 補	『佐藤文書』
30	○	里見義弘書状(縦切紙)	1572	元亀3	12月 26日	里見義弘、武田家に、遠江国二俣城陥落の祝いを述べる	静8	

Tab.5 二俣城・鳥羽山城関連文献史料一覧（2）

No.	一次史料	史料名	西暦	和暦	月日	摘要	掲載史料	備考
31	○	武田信玄書状（切紙）	1572	元亀 3	12月 28日	武田信玄、朝倉義景に、二俣城の普請が終わったこと、遠江国三方ヶ原の合戦における勝利を伝え、あわせて朝倉勢の帰國を責める	戦国	『伊能家文書』
32		『當代記』	1572	元亀 3	10～ 12月	二俣城攻めにおける武田軍の動向	當代	
33		『三河物語』	1572	元亀 3	10月	信玄、二俣城を攻略す	三河	
34	○	穴山信君書状	1573	元亀 4	正月 2日	穴山信君、多胡惣右衛門尉に、武田勢による遠江国平定を伝える（二俣落城）	戦国	元亀4年7月28日改元『武家手鑑』尊經閣文庫所蔵
35		『三河物語』	1573	元亀 4	4月	信玄死す 二俣城を攻めるため、社山・合代嶋・道々に砦を造る	三河	
36	○	武田信玄書状	1573	元亀 4	6月 21日	武田家、遠江国における大藤式部丞（政信）の軍功を賞し、子息与七にその旨を伝える（大藤式部丞（政信）は北条氏の家臣で武田氏応援のため二俣攻めに参加）	戦国	『諸州古文書』
37		『甲陽軍艦』卷12 品第39				二俣城攻付味方ヶ原合戦之事	甲中	
38		諸旗本之二				二俣城代中根正照について	譜牒	
39		『新訂寛政重修諸家譜』 第9				同上	寛政 9	
40		『寛永諸家系図伝』第1				松平康安について	寛永 1	
41	○	武田勝頼書状	1573	天正元	(7/28 改元) 8月 25日	武田勝頼、山県昌景に、遠江国二俣へ飛脚を派遣し、徳川家康の動静を確認するよう指示する	戦国	尊經閣文庫所蔵
42	○	武田勝頼書状	1573	天正元	9月 8日	武田勝頼、真田信綱に、遠江国の武田勢に、同国二俣より三河国長篠への出陣を命じた旨を伝える	戦国	『真田家文書』
43	○	上杉輝虎書状（切紙）	1574	天正 2	2月 7日	上杉輝虎（謙信）、酒井忠次に、遠江国二俣に侵攻した徳川家康に呼応して、上野国に出陣したことを伝える	静 8	徳川黎明会所蔵
44	○	武田家朱印状	1574	天正 2	閏 11月 11日	武田家、深山宗三に、堪忍分として駿河国良知郷の内を与える	戦国	『竹重家文書』
45		田代助之丞等覚書	1575	天正 3	5月 吉日	遠江国椎ヶ脇社神主家の先祖代々覚を記す（松井宗信城主 1559 永禄2頃）	静 8	『田代文書』
46		『依田記』				依田信守・信蕃父子の動向 城明け渡しの詳細を記載 家康が二俣攻めの砦を造る	依田	二俣攻めの際の徳川方の砦について記載あり 南 / 錄方山 辰巳 / 鳥羽山 東 / かくら口山 北 / みなはら口山 西 / とうたうの取手（和田ヶ島共申候）
47		『三河物語』	1575	天正 3		毘沙門堂・鳥羽山・鎧原・和田が嶋に砦を造る	三河	二俣攻めの際の徳川方の砦について記載あり
48		『三河物語』	1575	天正 3	12月	長篠の戦の後、二俣・光明攻め 二俣城落城	三河	
49		『三河物語』	1575	天正 3		小谷甚左衛門は天竜川を泳いで二俣城まで行き、その後甲斐の国に逃げた	三河	
50		『三河物語』	1575	天正 3		依田右衛門尉（信蕃）は二俣城を大久保七郎右衛門尉（忠世）に明け渡した	三河	
51		『三河物語』	1575	天正 3		大久七郎右衛門尉（忠世）は天正3年より天正9年まで、二俣・光明の在番	三河	
52		『寛永諸家系図伝』第9	1575	天正 3		二俣を忠世に賜り、その城を守る 忠為（忠世の弟）、忠世に属し共に二俣城を守る	寛永 9	
53		『三河物語』	1579	天正 7	9月 15日	家康、信康をして切腹せしむ	三河	
54		『當代記』	1579	天正 7	8～9月	信康切腹のこと	當代	
55		『寛永諸家系図伝』第9	1579	天正 7		忠吉（忠世の従兄弟）天正3年から忠世の配下 忠長（忠世の弟）は天正7年、徳川信康没後、忠世の配下とともに二俣に居す	寛永 9	

Tab.6 二俣城・鳥羽山城関連文献史料一覧（3）

No.	一次史料	史料名	西暦	和暦	月日	摘要	掲載史料	備考
56	『家忠日記』		1585	天正 13	10月 29日	人質ニむすめいたし浜松へこし参候	家忠	
			1585	天正 13	12月 16日	女共ニまたへ引こし候		
			1586	天正 14	4月 7日	北殿二俣より返ニこされ候 ふかうすへ越候		
			1586	天正 14	5月 18日	ニまたにをき候小娘煩候て、きゝつき之人をこし候		
			1586	天正 14	5月 20日	二俣よりむすめ少能候由申来候 初茄 初楊梅 しろかね 長花 もたせて越候		
			1586	天正 14	5月 24日	晩雨降 酒左（酒井左衛門尉忠次）御申にて 浜松より亥刻ニ質物御返候間むかいこし候へ之由申来候		
			1586	天正 14	5月 27日	二俣へ女共むかいいに人を出し候（人質解放）		
			1586	天正 14	6月 1日	二俣より女共こし候		
			1586	天正 14	6月 2日	今度女共しち物御返し禮ニ吉田へ使をつかはし候		
			1586	天正 14	11月 23日	二俣へ飛脚こし候		
57	『家忠日記』		1587	天正 15	5月 20日	自二俣小笠原越中被越候	家忠	
			1587	天正 15	6月 2日	二俣七郎右衛門尉（大久保忠世）所ニ音信二人をつかはし候		
			1587	天正 15	6月 12日	小笠原越中殿ニまたへ被帰候		
			1588	天正 16	3月 14日	二俣小笠原越中被越候（小笠原正吉）		
			1589	天正 17	7月 14日	二又十郎左衛門尉こし候（松平忠勝（家忠弟））		
58	棟札銘	1587	天正 15	12月	遠江国小川二所権現の社殿が造立される	静 8	二所宮神社 天竜市小川	
59	○ 領家六所神社棟札銘	1589	天正 17	11月 吉日	(種子) 本地不空観音春日大明神 地頭二俣大久保七郎右衛門殿并云々	春野	領家六書神社所蔵	
60	○ 遠江國之内知行方所・目録之事	1590	天正 18	9月 20日	豊臣秀吉が堀尾吉晴に与えた遠江國の知行目録に「二俣」が見える	三重	鈴木家文書	
61	○ 堀尾宗光書状写	1592	天正 20	正月 19日	堀尾宗光（氏光）は、二俣城主として北遠を中心支配 秋葉寺の再建にびた錢寄贈		『浜松城主 堀尾吉晴』 浜松市博物館刊 個人所蔵	
62	『創業録引証』				二俣三万石を帶刀弟に与える（三万石云々の記述には問題あり）		東京大学史料編纂所所蔵	
63	○ 松平忠頼領郷村帳	1601 - 1609	慶長 6 -14		二俣・山東等八ヶ村、浜松城主松平忠頼となる二俣村城下とあり（二俣はかつて城下と呼ばれた）		浜松博物館所蔵	
64	堀重俊社領寄進判物	1602	慶長 7	11月 23日	孫尉に瀬（椎）ヶ脇領として「城下」で式反八畝を所務させる 二俣城の存在が地名に反映されている 城下は二俣村のこと	天統 4		
65	田畠屋舗名寄帳	1728	享保 13	10月	田畠屋舗名寄帳 遠州豊田郡二俣村 与七持高 田畠の地名に「城下大手口」	天 3	『大隅家文書』	

関連史料一覧 凡例

掲載順は、原則として文書発給の年月日順とし、二次史料については記載内容が起こった年月日順とした。

年月日が不詳な史料は、関連する史料の前後に配置した。

巻末の附編に釈文を掲載した史料は、No.をゴシック体とした。

掲載史料略称

- 静 6 静岡県 1992『静岡県史』資料編 6 中世編 2
 静 7 静岡県 1994『静岡県史』資料編 7 中世編 3
 静 8 静岡県 1996『静岡県史』資料編 8 中世編 4
 静 8 補 静岡県 1996『静岡県史』資料編 8 中世編 4 付録 1 中世史料編補遺
 愛知 愛知県 2014『愛知県史』資料編 14 中世・織豊
 三重 三重県 2012『三重県史』資料叢書 6 資料編 中世 2 補遺 1
 天 3 天竜市 1976『天竜市史』資料編 3
 天統 4 天竜市 2002『天竜市史』続史料編 4 田代家文書四
 春野 春野町 1994『春野町史』資料編一
 甲中 新人物往来社 1965『改訂 甲陽軍鑑(中)』
 戦国 柴辻俊六・黒田基樹編 2003『戦国遺文』武田氏編 第三巻 東京堂出版
 家忠 竹内理三編 1981『増補 続史料大成』第 19 卷 家忠日記 臨川書店
 依田 信濃史料刊行会 1974『新編信濃史料叢書』第 8 卷
 寛永 1 続群書類従完成会 1986『寛永諸家系譜』第一
 寛永 9 続群書類従完成会 1986『寛永諸家系譜』第九
 寛永 14 続群書類従完成会 1992『寛永諸家系譜』第十四
 寛政 9 続群書類従完成会 1965『新訂寛政重修諸家譜』第九
 寛政 18 続群書類従完成会 1965『新訂寛政重修諸家譜』第十八
 譜牒 国立公文書館 1975 内閣文庫影印叢刊『譜牒余録』下
 三河 岩波書店 1974『日本思想体系』26 三河物語
 當代 続群書類従完成会 1995 史籍雜纂『當代記 駿府記』

Tab.7 二俣城・鳥羽山城関連絵図一覧

No.	図版 No.	史料名	西暦	和暦	出典	備考
1	卷頭 12-1	諸国古城之図・二俣城絵図	17C			広島市立中央図書館浅野文庫蔵 安芸国浅野家所蔵の城絵地図 江戸時代前期に廃城になった全国 177 城を描いたもの
2	-	二俣城見取図	1661	寛文年間	『城塞訳史』	寛文年間（1661-1663）の筆写本 No.1 の写しか
3	-	北鹿島村絵図	1701	元禄 11		田代家文書 鳥羽山の地名が記載される
4	卷頭 15-2	清瀧寺領絵図	1702-12	元禄 13-正徳 2		米山家文書 二俣城に「古御城」と記載があり、所々に石垣が描かれる。
5	卷頭 14-1	二俣・山東村絵図	1753	宝暦 3		宮沢家文書 二俣・山東両村山論に際し制作
6	卷頭 13	二俣城跡自古町望図	1799	寛政 11	『遠江国風土記伝』	郭 鳥羽山にあり各々畠と為る 古城 2 所あり 笹岡・蟻原
7	Fig. 115	二俣古城図	1799	寛政 11	『遠江国風土記伝』	笹岡城の絵図「笹岡古城 築くところの時代は詳ならず、地を穿てば即ち陶器・矢根等出づ」
8	卷頭 16-1	二俣川流域絵図	19C か			二俣川開削後の絵図 城を示す記載無
9	卷頭 16-2	二俣村絵図	19C か			二俣川開削後の絵図 城山、鳥羽山の地名記載有

第4章 測量調査

1 調査の概要

測量図の作成方法 二俣城跡、鳥羽山城跡は広大な面積を有することから、航空レーザ測量システムによって作成した広域の地形図をもとに、本丸を中心とした城跡の中枢部や石垣の遺存範囲などを補足的に実測したデータを合成して城跡全体の測量図を作成する方法を採用した。航空レーザ測量は、回転翼の実機を用いてデータを取得し、計測データを統合解析した後に、樹木・建物等のデータを取り除いた地表面の三次元データを作成した。さらに、地表面の三次元データをもとに、傾斜量図や等高線図を作成し、現地踏査をふまえた遺構平面図を作成した。遺構平面図は、道路、施設等を表示した現況遺構図と、現況施設を取り除き土塁や堀などの推定地形を表示した復元遺構図の2種類を作成した。

航空レーザ測量調査は平成26年度に二俣城跡、平成27年度に鳥羽山城跡を対象に実施した。また、二俣城跡の本丸の地形測量（天守台の三次元計測を含む）は平成24年度に、鳥羽山城の本丸の地形測量と石垣の平面位置の測量調査は、平成25年度に実施した。

遺構の認識 計測した測量図に遺構図を重ねる作業は、現地踏査をふまえて行った。現地踏査は発掘調査の機会を中心にして文化財課職員が実施したが、要所において、千田嘉博氏（奈良大学）および中井均氏（滋賀県立大学）にも遺構等を確認いただき、その評価を行った。曲輪や堀などの認識については、研究者によって異なることがあるが、本書では遺構として確実性が高いものについてのみ取上げている。



Fig.27 二俣城跡・鳥羽山城跡航空写真

2 二俣城の構造

(1) 概 要

二俣城は蟻原の地から南に伸びる自然丘陵の先端を利用して築城されている。現在、南北 300 m、東西 200 m の範囲に主要な城郭遺構が確認できる。最も標高が高い地点は本丸で曲輪の中心の標高 82 m、丘陵の下の平坦面の標高は、城の東側で 43 m、南側で 42 m である。東側裾の標高を基準にすると、山麓と本丸山頂部との比高差は 39 m である。

二俣城には南北に連なる 5 つの曲輪（北の丸、本丸、二の丸、南の丸 I・II）と本丸の西側に続く 3 つの曲輪（西の丸 I～III）があり、その間に堀切や横堀、帯曲輪などが展開している。

(2) 曲輪の名称について

二俣城にかかる絵図については、「遠江二俣」『浅野文庫 諸国古城之図』（巻頭図版 12）と『遠江國風土記伝七』（内山 1799）所収の「二俣城跡自古町望図」（巻頭図版 13、Fig. 28）が知られている。両者ともに曲輪が直線的に描かれているものの、廃城後の二俣城の状態を比較的正確に伝えているものといえる。前者には、曲輪の名称などの記載がないが、後者には「藏屋敷」、「井戸地」などの曲輪名称や施設名が記載されている。

現在、用いられている二俣城の曲輪の名称は、1970 年に刊行された書籍『二俣城』（天竜市郷土誌稿 第三集、大場ほか 1970）をもとにしている。同書には、1200 分の 1 の遺構配置図が掲載され、近世の絵図や地元での慣例的な呼称を参考にして各曲輪の名称が付されている。同書の記載を読み解くと、「本丸」、「二の丸」といった施設名称は 1970 年当時において、比較的多くの人びとによって共有されていたものであることが知られる。一方、「北曲輪」、「南曲輪」、「井戸曲輪」、「西曲輪」といった名称は、同書の編集において名づけられたものである可能性が高いと判断できる。「藏屋敷」という名称についても『遠江國風土記伝』の記載をもとにして、二の丸南側の南の丸 I の名称として用いられた。しかし、同書所収の図を改めて検討すると、「藏屋敷」との注記のある施設は、二の丸よりも西側に偏った位置にあり、三方向に石垣が描かれている。位置関係や石垣の状態から判断すると、南の丸 I よりも、西側にある西の丸 I の名称として用いるほうが妥当であろう。

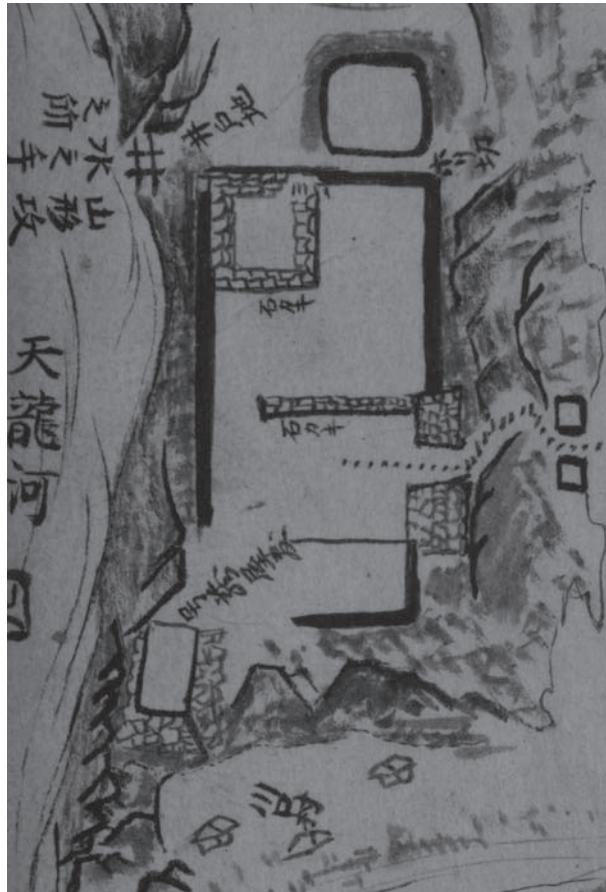


Fig.28 『遠江國風土記伝』所収の二俣城

藏屋敷の名称を含め、『二俣城』（大場ほか 1970）に紹介された曲輪名称はその後に刊行された書籍や論文等にも踏襲され、現在に至る。浜松市教育委員会においても、発掘調査の概要や調査内容を紹介した印刷物にも南の丸 I を

「蔵屋敷」として紹介してきたが、以上の理由から、蔵屋敷という名称は、西の丸Iを指すものであったと理解したい。

以下、本書では、主郭を本丸、本丸の南を二の丸、本丸の北を北の丸、二の丸の南を南の丸I、その南に連なる部分を南の丸II、蔵屋敷を指すとみられる西側の主要部分を西の丸Iと称する。なお、西の丸IIIについては「井戸曲輪」とされることがあるが、同じく根拠が不明確であることから、「井戸曲輪」の名称は本書では用いない。この他の曲輪や堀についても、正確な名称は不明であることから通称的な用語を避け、Fig. 29に示すような番号を振り分けた施設名を用いたい。

(3) 城内通路

東側経路 二俣城の本丸に至る通路は、東側と西側の2方向にある。東側にある城下町から二俣城に登る麓の入口は、城山下の大鳥居のあたりとされる（大場ほか 1970、p7）。かつては九十九折の小道が斜面にあったとされるが、現在は急峻な階段が設けられている。階段は市道で分断され、城内まで直接的に上ることができないが、その延長上には広場を想定しうる緩斜面地が確認できる。『二俣城』には、この部分に石垣があったことが明記され（大場ほか 1970、p8）、大手広場と称されている。現状では石垣は確認できないものの、埋没している可能性が高いとみてよいだろう。この部分は今後の探求課題である。大手広場を通じて、二の丸東側の帯曲輪に至り、二の丸の大手門に至る。この東側経路が城下町側からみた大手筋といえるだろう。

西側経路 二俣城には川口から西の丸Iを経て大手門に至るもう一つの城内通路がある。川口から城内に登り、西の丸Iの南西隅部から西の丸IIの裾を通り、90度方向を変えて一号堅堀を通じて西の丸IIの東隅の虎口に至る経路が復元できる。西の丸IIの東部には土塁が築かれており、この経路が重視されていたことをうかがわせる。西の丸IIからは現在の公園の園路と重なる斜面を南東方向に進み、二の丸と南の丸Iを隔てる三号堀に至る。三号堀からは二の丸の裾を南から東に辿って大手門に至る。

以上、二俣城の本丸に至るには二つの経路があることを指摘した。なお、搦め手の経路であるが、今までの改変が顕著であり、その詳細をうかがうことは難しい。現在、公園の園路とされている北の丸西側にめぐっていたとみると最も合理的である。

(4) 本丸

概要 本丸は二俣城で最も高い位置にあり、南北 55 m、東西 50 m の規模をもつ。北側に北の丸、南側に二の丸と接する。二の丸との通路には中仕切門が、北の丸への通路には搦手門がある。本丸の東側には土塁が遺存しており、西側中央には石垣積みの天守台がみられる。

土塁 中仕切門から搦手門にかけての本丸東側と、搦手門西側にあたる本丸北東側に土塁

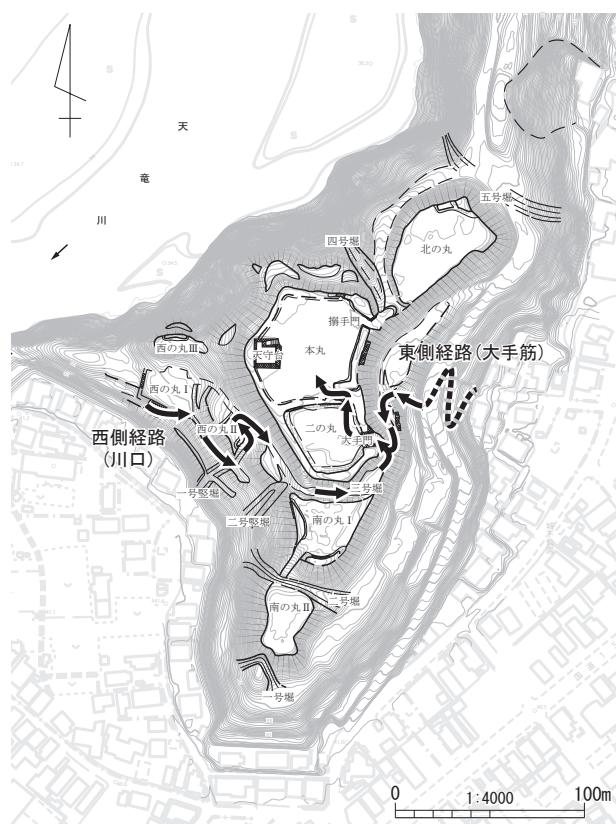


Fig.29 二俣城における城内通路

が残存している。中仕切門の北側の土壘は遺存状態が良好で、その規模は、幅約5m、高さ約2mである。搦手門西側の土壘は、自然地形を掘り残したような形状で、人工的な構造物としての造形はみられない。この部分には東西20mほどにわったって高まりが認められるが、さらに西側には高まりが消失している。また天守台がある本丸西側、さらには二の丸と接する本丸南側には明瞭な土壘はみられない。東側の土壘と南側土壘には石垣がみられる。東側土壘には内側に円礫による石積みが認められるが、中世のものであるのか、現代のものであるか判然としない。また、東側土壘の東斜面には角礫を用いた石垣が認められ、内側に彎曲する「輪取り」が確認できる。

天守台を観察すると、崖面寄りの西側のみ石垣基底面が数段高い。これは天守台構築時にあった土壘を反映したものと捉えられる。石垣基底面の高さの違いは、1mほどであり、天守台西側の裾の平坦面の幅は0.5mほどである。このことから、現状で土壘がみられない本丸北側から西側、さらには南側にかけても、本来は土壘がめぐっていたと捉えられる。ただし、その規模は比較的小規模なものであり、廃城後に削平されたものと考えられよう。

天守台 本丸西側中央部において天守台が構築されている。自然石を用いた野面積みの石垣で、ほぼ東西南北の軸線に合わせた方形を呈する。基底部の規模は南北15.5m、東西14.5mであり、見かけ上の高さは4.2mである。北側には東から西に向かって上がる階段があり、天守台上面よりも1.5mほど低い位置に平坦面をもつ。この平坦面からはほぼ垂直に構築された壁面を通じて天守台上面にあがる。天守台上面は南北9.4m、東西11.5mの中心部分の北側に、南北3.0m、東西4.0mの突出部が連接する。現状では天守台上面に礎石などの構造物は認められない。

中仕切門 中仕切門は二の丸から本丸に至る境界に設けられた施設で、土壘の壁面には石垣がみられる。北側の土壘は比較的遺存状態が良好であり、石垣も1.5mほどの高さが認められる。南側の土壘は、遺存状態が悪く、裏込めが露出している部分もある。現状では、高さ約1m、幅3mほどの土壘が遺存している。中仕切門については発掘調査を実施し、礎石をもつ建物跡を確認した。石垣と一体になった構造であることから、堀尾氏在城期（1590～1600年）の建物と考えられる。比高差がある土壘が両側に迫っていることから判断すると、この中仕切門は櫓門であった可能性が高いとみられよう。

搦手門 本丸北東部には北側に向かって開いた虎口がある。大手門からみると反対側に設定されているので、搦手門とするが、堀尾氏による改修前にはこちら側が大手であった可能性がある。搦手門は喰違虎口にされており、壁面に石垣がみられる。遺存状態は良好とはいえないが、基底部を中心当時の石垣が残存する。



Fig.30 本丸東側土壘

帯曲輪 本丸の北側および西側の斜面には小規模な帯曲輪が数箇所確認できる。長辺15～20m程度のもので、それぞれ標高には差がある。いずれも天竜川に向けての斜面上に位置するものであり、河川側への防御を意識した施設と捉えられる。

(5) 二の丸

概要 二の丸は本丸と一連の地形上に位置し、南北40m、東西30mほどの

規模をもつ。北側には中仕切門を隔てて本丸と接し、東側には大手門が位置する。南側には三号堀を隔てて南の丸Iと接する。大手門の下には南北に伸びる帯曲輪があり、城下町から続く大手筋に至ると共に、三号堀を城内通路として西側の曲輪群にも繋がっている。

土 墓 二の丸の周囲には土壘が確認できる。南側土壘の幅は約5m、二の丸平坦面からの高さは2.5m、三号堀底面からの高さは7.7mである。本丸南側の土壘には石垣がみられるが、西側、南側、東側の土壘には石垣がみられない。土壘の南東隅には、二俣城跡の象徴的樹木であった「物見の松」があった。大手門が渡り櫓だったとすれば、櫓部分がのる位置に相当する。

大手門 二の丸の東側に大手門跡が認められる。南側と北側に石垣がみられるが、北側の石垣は築石の積み方が異なっており、明らかに後世の積み直しと判断できる。一説には嘉永3年(1850)の天竜川氾濫の際に石材を搬出し、その後に石垣を再構築したとされているが、必ずしも明確でない。一方、南側の石垣は構築時のものと判断できる。北東の隅角は鈍角に形成されているもので、初源的な算木積みの技法を用いている。

帯曲輪 大手門の東側には帯曲輪がみられる。大手筋にかかる部分にあたり、東側斜面には部分的に石垣が確認できる(Fig.31)。城下に降る経路には枠形が形成されている可能性があるが、現在のところ詳細は不明である。

(6) 北の丸

概 要 北の丸は本丸の北側に位置し、昭和29年(1954)に遷座した旭ヶ丘神社が鎮座している。長軸60m、短軸35mの規模をもつ。

形 状 北の丸は神社造成に伴う改変が顕著であり、城郭の遺構を見出すことは難しい。北側に一段高い箇所が認められるが、これは土壘ではなく、旭ヶ丘神社の造営の際に土地を削り残したものと伝わる(大場ほか1970)。本丸との連結は、改変が強く不明瞭であるが、土橋もしくは木橋で繋がっていた可能性が考えられる。

四号堀 北の丸と本丸の間には四号堀がみられる。最大幅は約8mである。四号堀は北西斜面に設けられており、反対側にあたる南東斜面に連続している可能性がある。現在、北の丸の南端には神社参道の掘り込みがみられるが、この造作と四号堀が一連のものとみなせる余地が残る。

五号堀 北の丸の北側には五号堀がみられる。二俣城の北端を区画する堀切であるが、道路と公園にかかる造成によって、僅かにその痕跡が認識できる程度である。

(7) 南の丸I

概 要 南の丸Iはかつて、蔵屋敷と呼ばれていた曲輪である。先述の通り、『遠江国風土記伝』が伝える蔵屋敷は西の丸Iのことと考えられるので、本曲輪の名称としては相応しくない。二の丸とは三号堀を隔てており、南北30m、東西30mの規模をもつ。平坦面の標高は79mであり、二の丸の標高(80m)と比べて1mほど低い。なお、曲輪の東側が削られているが、これは近年の造成作業による改変であり、当初の形状を反映したものでない。

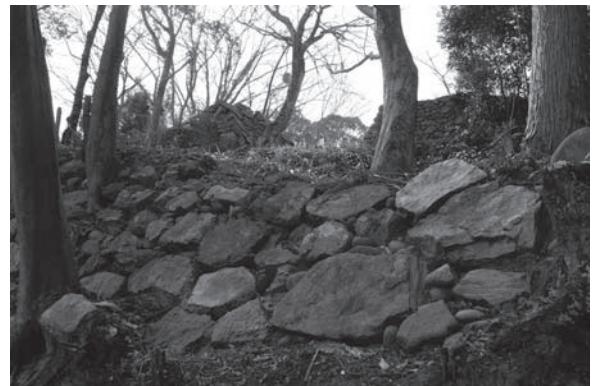


Fig.31 大手門東石垣



Fig.32 南の丸 I の現況



Fig.33 三号堀

土 墓 西側と南側に土墓がみられる。西側の土墓は高さが50cmほどの非常に低いものであるが、西側斜面には石垣がみられる。南側の土墓は、高さ3mほどの比較的大規模なものである。この土墓の大部分は近年、重機によって破壊された。破壊部分については、平成8年(1996)に復旧工事が施され、土墓もかつての高さに復元された。内側にみられる石垣もこの復旧工事に伴うものである。また、曲輪の南西部には斜面をつたって南の丸Iに至ることができるが、この形状も重機による改変を受けたものとみられる。

二号堀 南の丸Iと南の丸IIを隔てる堀切である。両側の斜面から掘削しており、尾根を切断する意図が明確にうかがえる。二号堀の北側には、南の丸Iからつながる城道があるとみられるが、当該部分には重機による改変が及んでおり、詳細な形状については推定の域を出ない。

三号堀 南の丸Iと二の丸を隔てる横堀である。西の丸Iや西の丸IIから二の丸に至る城内通路の役割も担っている。上面における幅は約10m、二の丸北側土墓上から堀の底部までの比高差は7.7mである。南の丸Iの平坦面から堀の底部までの比高差は4.8mである(Fig.33・78)。

(8) 南の丸II

概 要 南の丸IIは、南の丸Iの南に連なる丘陵を切り開いて形作られている。平坦面は、南北35m、東西25mの規模をもつ。平坦面の標高は72mであり、南の丸Iとは7mほど低い。南の丸IIの南側には最南端に掘削された一号堀が、北側には南の丸Iと隔てる二号堀がある。

形 状 南の丸IIには土墓や石垣などが認められない。平坦面の形状は不整形であるが、これは自然地形によるものと考えられる。二号堀と接する北側部分に削平された痕跡がみられるが、この部分以外は、概ね遺存状態は良好である。

一号堀 南の丸IIの南側に設けられた堀切である。曲輪平坦面との比高差が5m以上あり、標高差が顕著である。岩肌が露出していることに起因して、中央付近で90度近く折れ曲がる。

(9) 西の丸I

概 要 西の丸Iは本丸の南西部に位置し、南側と西側には石垣がみられる。公園の園路による改変がみられるが、南北20m、東西25mの規模をもつ。西の丸Iの上手側には園路に従って段々に連なる西の丸IIがある。

特 徴 西の丸Iは、位置関係や石垣の特徴から、『遠江国風土記伝』に伝えられる蔵屋敷に相当すると考えられる。同書では三方向に石垣があるようにも読み取れ、曲輪の北側についても石垣

がある可能性がある。石垣は西側と南側に遺存している。西側の石垣高は推定で3mと通常の高さであるが、南側の石垣は最大で高さ5.6mの石積みが残存している(Fig.86)。この部分の石垣は、二俣城跡で最も高い。南側の石垣は東にむかって基底部の標高が高くなっている、石垣の裾が川口の山裾から西の丸IIに至る城内通路であったとみられる。西の丸Iの先端には堀切などが認められない。南の丸Iや南の丸IIとは構築意図や構築の時期が異なることが想定できる。

(10) 西の丸II

概要 西の丸Iの上手側に位置づけられる曲輪である。現状では平坦部が細かく分離され段々畠のようになっているが、この形状は後世の改変である可能性がある。中心的な平坦面は10m四方の大きさである。

特徴 西の丸IIには裾をめぐる城内通路が想定できる。西の丸Iから西の丸IIの裾には、通路状の細長い平坦面が続いている、一号堅堀の上面を用いて西の丸II内に至るような造作があつたとみられる東側には土壘が設けられており、この通路が重要なものであったことをうかがわせる。西の丸IIからは現在の公園の園路とほぼ同じ箇所を伝って、城内通路が三号掘に連続する。

一号堅堀 西の丸IIの南東側に設けられた堅堀である。山裾に近い部分まで堀の壅みが観察できる。一号堅堀の上部は城内通路として用いることができるよう、平坦面が作り出され、西の丸IIの裾をめぐるように設定されている。これは古い段階の堅堀を城内通路として活用したことによる可能性が考えられるだろう。

二号堅堀 西の丸IIの周辺部と南の丸Iを隔てる堅堀である。南の丸Iに向かって岩盤が露出しており、急峻な形状が看取できる。

(11) 西の丸III

西の丸IIIは本丸天守台の西側に位置し、南北5m、東西30mほどの規模をもつ。井戸曲輪と呼称されることがあるが、同時代の名称とはいがたい。

北側には僅かに土壘が認められ、その北側には小規模な帯曲輪がみられる。西の丸IIIの標高は67mであり、本丸平坦面との比高差は14mである。西の丸IIIと本丸は直接的な行き来は困難であり、南東側の斜面を伝って西の丸IIの近辺を通り、三号堀を経て二の丸、本丸に至る経路を用いていたと考えられる。



Fig.34 西の丸II土壘



Fig.35 二号堅堀と岩盤



Fig.36 二俣城跡傾斜量図

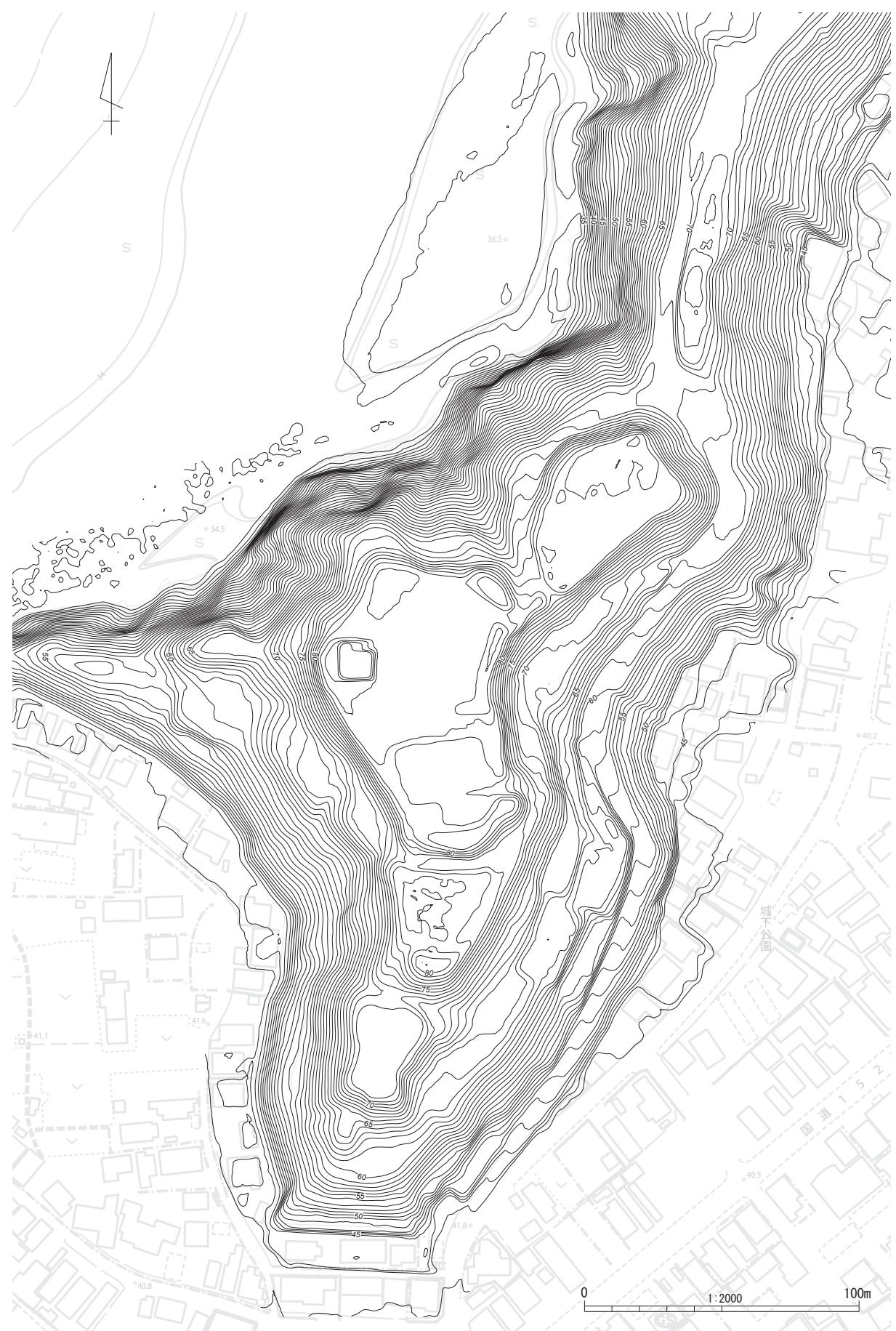


Fig.37 二俣城跡等高線図

2 二俣城の構造



Fig.38 二俣城跡現況図



Fig.39 二俣城跡復元遺構図

3 鳥羽山城の構造

(1) 概 要

鳥羽山城は、二俣城の南に広がる東西 1000 m、南北 350 m ほどの独立丘陵上に立地する。天竜川が西から南に流れを変える位置にあり、北側には流路が付け替えられるまで二俣川が流れていた。二俣城とは二俣川を隔てる位置関係にあった。二俣城と鳥羽山城は 500 m ほどの至近距離にあり、別城一郭と呼ばれるように密接な関係がある。とくに堀尾氏在城期に石垣が構築される時期には、居館的な性格を強めており、戦略拠点的な性格が強い二俣城とは相互補完的な様相が見いだせる。

南山と呼ばれる最も高い西側の山頂（標高 108 m）の周囲に石垣を用いた城郭の中心が展開している。内山真龍『遠江国風土記伝』においても単郭式の土塁を巡らした遺構が紹介されている。しかし、この中心部分の東方に連なる丘陵上にも石垣こそみられないものの、数多くの曲輪が設けられ、要所には深い堀切がみられることは注意すべきである。これらの遺構の築造時期は必ずしも明確でないが、二俣城で遺構形成が明確化する永禄 3 年（1560）以降のものと捉えられる。

(2) 遺構群の大別と曲輪の名称について

鳥羽山城が構築されている丘陵には三箇所の山頂部分があり、それぞれの山頂部分を中心とした城郭遺構がみられる。それぞれの遺構について、東群、中央群、西群と呼んでおきたい。東群と中央群については、土づくりの遺構に限定されるが、西群については広い範囲で石垣が確認できる。

鳥羽山城は天正 3 年（1575）、徳川家康が武田氏から二俣城を奪還するために本陣を置いた地として知られている。現在「鳥羽山」と呼称される範囲は、城郭遺構が展開する独立丘陵全体であるが、字名を確認すると、石垣が築かれる西群はかつて「南山」と呼ばれていたことが分かる。字名で「鳥羽山」と呼ばれているのは東群の区域であることから、狭義の鳥羽山は、西群の遺構ではなく東群や隣接する中央群のことを指すとみてよい。この視点で東群や中央群の遺構をみると、中央群の北側に大規模な横堀があることに注目できる。この横堀は山の北側を防備する遺構であり、攻防の矛先は川を挟んで北側に位置する二俣城であることは明らかである。横堀は、幅が 5 m を超え、総延長も 50 m 以上ある。鳥羽山の独立丘陵の中でも群を抜いて大規模な遺構であること、鳥羽山城に石垣が構築される以前の遺構とみられること、二俣城との対峙する位置関係が見いだせること、などから総合的に判断すると、中央群の遺構こそが、天正 3 年に徳川方が本陣をおいた地であったと推定できる。

一方、「南山」に築かれた西群には、土塁を備えた本丸と数多くの帶曲輪が残る。これらの中心部分には緩やかな勾配をもつ野面積みの石垣が構築されているが、二俣城と同じく天正 18 年（1590）～慶長 5 年（1600）の間に当地域を領有してい

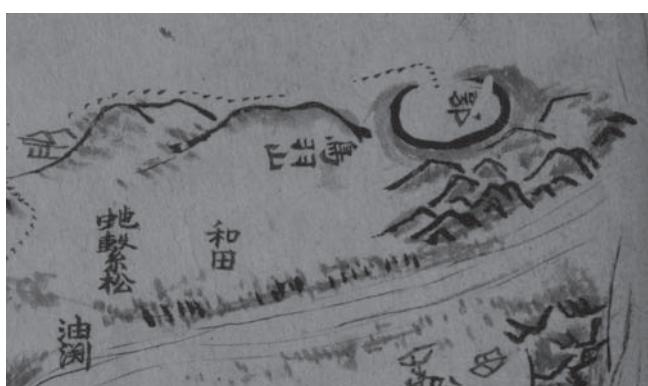


Fig.40 『遠江風土記伝』所収の鳥羽山城

た堀尾氏が整備したものと捉えられる。鳥羽山城（西群）には大規模な大手道が整備され、本丸には庭園が設けられるなど、御殿的な要素が強く、戦略拠点的様相が濃厚な二俣城とは好対照をなしている。二俣城が戦時用の施設として機能を高めていくに従い、鳥羽山城は居住・政治空間としての機能をもたせたものとみられる。鳥羽山城の機能停止の時期は、二俣城と同じく慶長5年（1600）の堀尾氏転封後のことであったとみられる。

（3）東群・中央群の遺構

東群 鳥羽山城の東群の遺構は鳥羽山丘陵の東端、標高104mの山頂を中心に展開している。東群には規模は小さいながらも、切岸や堀切が認められ、南側から丘陵の周りを取り囲むように城内通路が設定されている。城内通路は南側から施設内に至るように北進し、180度方向を変えて北側の虎口を経て曲輪内部に至るものと捉えられる。また、丘陵が連続する南東部にも帶曲輪が数段認められる。

山頂部の遺構から、中央群にかけては馬の背状の瘠せた尾根が続いている。縦走するには十分な大きさであるが、曲輪などを形成するために人為的に切り開いた痕跡は認められない。現状は自然地形か、大きな改変がなされたとみてよいだろう。平成24年（2012）、この尾根上において遺構残状況を確認するための部分的な発掘調査を実施したが（5次調査）、城郭にかかる遺構や遺物は確認できていない。

中央群 鳥羽山城の中央群は標高109mの山頂部を中心とした遺構群である。曲輪があったと考えられる山頂部分については、建物や送電線の鉄塔が建てられており、城郭にかかる明確な遺構は確認できない。ただし、中央山頂の西側尾根には帶曲輪と認識しうる地形があり、破壊を免れた部分もある。中央群の南側にも曲輪や堅堀が想定されることがあるが、自然の谷や現代の造成にかかる遺作と捉えられる。

中央群の北側斜面には、大規模な横堀が遺存している。横堀は等高線に沿うように設定されており、分断された小尾根が2箇所、独立した小丘として横堀の下手に残っている。横堀は幅8mをこ

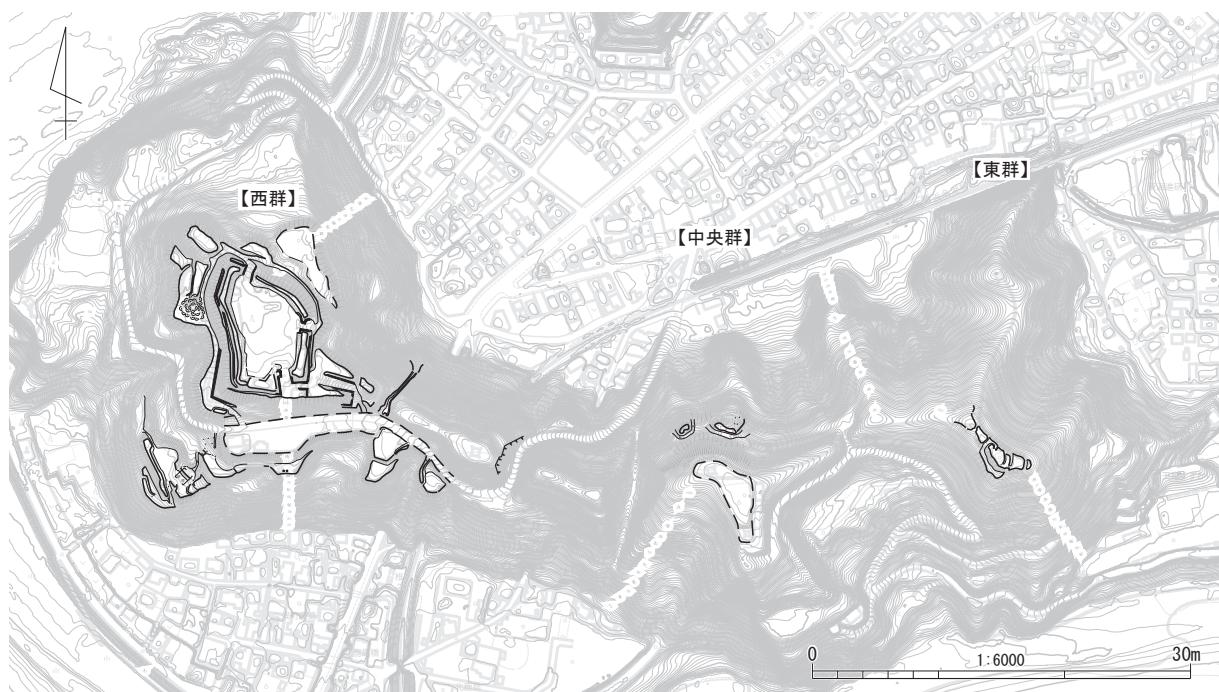


Fig.41 鳥羽山城跡遺構群の大別

える大規模なもので、北側に対峙する二俣城との関連で構築されたものと捉えられる。先述のとおり、この横堀は、規模の大きさ、石垣を用いない構造、二俣城との位置関係から、天正3年（1575）に徳川家康が武田方にあった二俣城を攻めるために構築したものである可能性が高く、中央群の曲輪がその際に徳川方の本陣が置かれた場所にあたると考えられる。

中央群の尾根は西側に連続しているが、現在、中央群山頂の西側には大規模な土取によって自然地形が大きく失われている。この部分に堀切があった可能性があるが、現状からはその存在は不明といわざるをえない。

（4）大手道と城内通路

場内通路 山城の中心的な遺構は、西群と呼ぶ丘陵の西側に集中している。鳥羽山城西群の大手筋がどこから始まっていたかは不明瞭であるものの想定する手がかりがある。丘陵の南側は二俣町鹿島にあたり、近世の材木問屋であった田代家が所在する。鹿島と二俣の地の交通については、鳥羽山の山塊を越える必要があるが、大正2年（1913）に作成された地籍図からは鹿島の田代家から北側に進み、峠を越えて二俣に至る道が確認できる。この峠道は現在も鳥羽山城に至る市道に踏襲されており、近世を通じての鳥羽山を越える主要経路であったとみられる。田代家から上がる山道は、鳥羽山城の大手筋の有力候補として捉えてよいだろう。

山麓から中腹まで進んできた後は経路を西向きに変えて現在の大手道東側の平坦面に至るものと考えられる。現状では道路と駐車場で切り開かれているが、造成前には、帯曲輪が連なる形状であったとみられる。

大手道 大手道は、南東隅の腰巻石垣から北進したのち、西に90度折れて本丸の土壘に至るようく設定されている。腰巻石垣は基底部の高さを変えつつ、大手道の南側の石垣に連続する。大手道は手前にあたる東側が6mと狭く、西に向かうに従って幅を増している。大手道の両側には石垣が築かれている。発掘調査の結果、埋没している石垣は1m近いとみられる。

大手道を直進すると本丸の土壘にあたる。ここから、南側の大手門に至るには、東の丸Iを通過

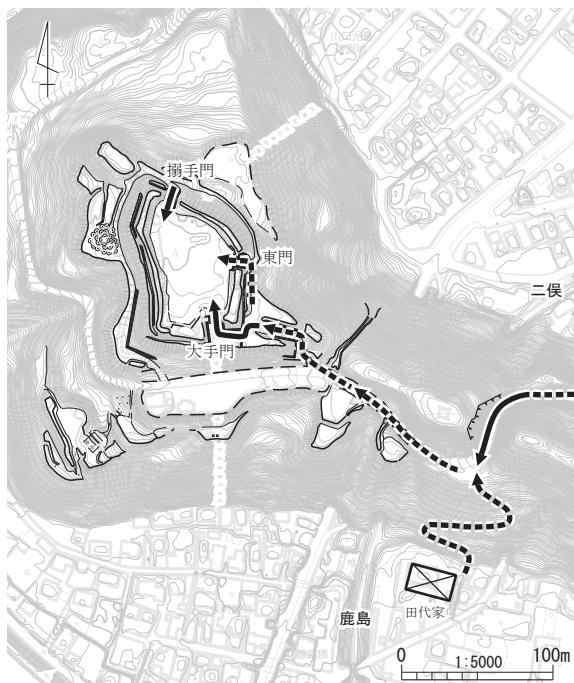


Fig.42 鳥羽山城における城内通路



Fig.43 田代家通路

し、大手門前の柵形に至る。また、本丸南東隅から犬走り状の平坦面を通じて東門に至ることもできる。

搦手筋 本丸の北側には搦手門がある。搦手門からは北側の斜面に抜けができるが、麓に至ることができるような通路を認めることができない。搦手門から北に抜け、進路を西にとると、西の丸Ⅰ、西の丸Ⅱに至ることができる。

一号堀 鳥羽山城西群の東寄りに設定されている大規模な堀切である。幅 10 m 以上の規模があり、尾根を明確に遮断している。一号堀の南側は道路の造成によって土地形状が改変されており、堀が連続しているかは不明瞭である。北側については、丘陵中腹付近まで堀が残っていることが分かる。

なお、一号堀の西側 30 m、東の丸Ⅰの東側に小規模な堀切状の地形がみられるが、この部分は尾根を切断するものではないことから、堀切とは判断しない。

(5) 本丸

概要 本丸は鳥羽山城で最も高い位置にあり、南北 80 m、東西 45 m の規模をもつ。いわゆる単郭式の構造であるので、周囲の曲輪は本丸と比べて従属的な関係にある。本丸には土塁が良好に残存しており、南側に大手門、北側に搦手門、東側に東門がある。本丸内の施設としては、東側に庭園遺構と礎石建物が確認されている。西側の土塁には鉢巻石垣と腰巻石垣が上下二段にわたり、構築されている。大手門と東門には外側に柵形が形成されている。

土塁 本丸を取り囲む土塁はほぼ完全に遺存している。土塁の形状は一定しないが、東側で高さ 3 m、北東部で高さ 4 m ほどである。土塁の幅は一定せず、標高も異なる。北西隅の土塁が最も標高が高く、南側、大手門の西側が最も標高が低い。

大手門 本丸の南側には大手門が設定されている。開口部の幅は 6 m、南北は 6 m である。この部分には控え柱の礎石の可能性がある石材が 2 個分、遺存している。大手門の南側は柵形に造形され、南面する石垣には暗渠がみられる。大手門の南側には排水路が設けられており、石材を用いた造作が複雑に入り組んでいる。柵形の西側の石垣には比較的大形の石材があり、景観を重視していた箇所であることが判明する。

東門 土塁東側に開口する東門は、幅 2 m、長さ 4 m の小規模な門である。開口部の石垣は積み直しが顕著であるが、礎石として用いられた可能性がある石材が 6 箇所にみられる。石材の間隔は中心間で約 1.8 m と極めて狭く、通有の扉をもつ門を想定することが難しい。この礎石は土塁小口面を護岸する壁面を支えるために用いられた可能性があり、東門は、門の上部にも土塁や塀が巡る埋門であったとみることも許されよう。近似した形状をもつ遺構として、長野県長野市松代城の埋門があげられる。

搦手門 土塁北側に開口する搦手門は、幅 6.5 m の規模をもつ。開口部の小口面には石垣がみられるが、基底部は斜面であり、櫓門など大規

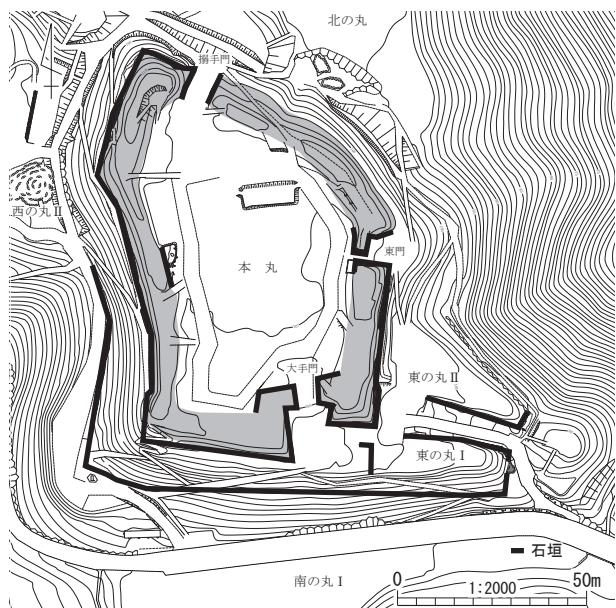


Fig.44 鳥羽山城石垣想定復元図

模な扉をもつ門を想定することは難しい。礎石などの構造物は認められない。

鉢巻石垣 西側の土壘には鉢巻石垣がみられる。総延長 90 m ほどが遺存している。南面の石垣は確認できないが、本来は大手門から搦手門まで全周していたと捉えてよいだろう。土壘南西の角が出隅になっていたことが残存する石垣の状況から確認できる。南西角の上部には櫓が築かれていた可能性があるだろう。西側の鉢巻石垣は基底部の標高を変えながら、自然地形に合わせて構築されている。屈曲部には鎬が意識されている箇所も認められる。

北西部の鉢巻土壘は矩形を意識した平面形状をしている。鉢巻石垣の北西隅はほぼ直角に折れ曲がると想定でき、搦手門に接続する。搦手門西側の石垣は、基底部が自然地形に合わせて下がっており、隅角部の石積みが大きく失われている。破城の痕跡を示すものの可能性があるだろう。北東側の土壘にかかるわる石垣は現状では確認できないが、東門から大手門にかけては鉢巻石垣が良好に遺存している。東の丸 I にかかる部分は鳥羽山城の石垣の中でも最も高く残存している。北西部の隅角には基底石が外側に設定されている状況が確認できる。

腰巻石垣 腰巻石垣は本丸の南西隅を中心に遺存している。腰巻石垣は鉢巻石垣に比べて石材の崩落が顕著であり、一部、積み直しがなされている可能性がある。遺存部分も数段程度であり、その高さは最大部分で約 1 m である。腰巻石垣の南西隅は基底部分が遺存しているが、上部は大きく失われている。また、腰巻石垣の南面部分は、大部分が確認できない。ただし、その東の延長上には東の丸 I 南東隅の石垣があり、本来、両者は一連の石垣であった可能性が高い。

(6) 東の丸 I 、東の丸 II

東の丸 I 東の丸 I は大手門の南東部にあたり、北側には大手道がある。南北 10 m 、東西 30 m ほどの細長い形状である。北側は大手道の石垣があり、東側の基底部には腰巻石状の石垣がみられる。平坦面は東側に向かって下がっているため、本来は一連の曲輪であったかは検討を要す。東の丸 I の西端は、大手門前の平坦面と区画する石垣が残存している。この石垣の上面は明らかに後世の積み直しであるが、下部は石垣構築時の石積みが残存しているとみられる。この石垣は斜面をなさずに直立していることから、建物の内部に取り込まれていた可能性が考えられる。

東の丸 II 東の丸 II は大手道の北側に位置する三角形を呈する曲輪で、南北 15 m 、東西 35 m ほどの規模をもつ。南側斜面は大手道の石垣があり、西側には本丸の鉢巻石垣がある。本丸土壘の南東隅角付近には、数点の大形の石材がやや無造作に置かれている。この石の用途は不明確であるが、何らかの遺構を構成していた石材の可能性がある。



Fig.45 西の丸 I 現況

(7) 西の丸 I 、西の丸 II

西の丸 I 西の丸 I は本丸の北西隅に設けられた独立丘上に設けられた曲輪で、笹曲輪とも称される。長軸 25 m 、短軸 10 m ほどの比較的小規模な平坦面をもつ。現在は公園の東屋があり、遺構の詳細をうかがうことが難しい。曲輪からの眺望は良好で、天竜川を見下ろすには絶好の位置である。

西の丸 II 西の丸 II は本丸の北寄り西側に設けられた曲輪である。二段にわたる平坦面があ

り、その南側には岩盤の露頭がみられる。上下二段をあわせた平坦面の規模は、南北 25 m、東西 15 m ほどの規模である。上下の平坦面を繋ぐ段差には、石垣状の積み石がみられる。この積み石は石垣と同一の石材を用いるものであるが、積み方に乱れがあり、城郭に直接伴うものであるのか詳細な検討が必要である。岩盤の露頭についても、庭園などにかかる遺構として認識するような意見もあるが（森 1974）、積極的な評価は難しい。

北の丸 本丸の北側には南北 30 m、東西 35 m の広大な平坦地がある。付属的な帶曲輪としては不自然な大きさであり、後世の改変が加わっているとみてよいだろう。工事に関わる記録は探索できなかったが、鳥羽山公園の整備に伴い大規模に造成されている可能性がある。元々、この地にあった曲輪を拡張するようにして平坦面が形成されたとみることも許されよう。

(8) 南の丸 I ・ 南の丸 II ・ 南の丸 III

南の丸 I 南の丸 I は本丸の南側に設けられた比較的規模が大きい施設で、現在は公園の駐車場として整備されている。現状で南北 25 m、東西 60 m ほどの規模をもち南側にはさらに小規模な帶曲輪が連なる。

南の丸 II 南の丸 II は南の丸 I の東側の小規模な尾根上に築かれた帶曲輪である。現在は公園の駐車場として整備されている。曲輪の規模は南北 30 m、東西 20 m であり、南側の尾根伝いに小規模な帶曲輪が連なる。

南の丸 III 南の丸 III は南の丸 II の東側に連なる帶曲輪で、南北 15 m、東西 15 m ほどの規模である。西側には土壘が確認できる。

(9) 南の丸 IV

南の丸 IV は、南の丸 I の南西側にある曲輪で、標高 70 m 付近の中腹部分にある。南北 30 m、東西 10 m の規模があり、西側には幅 3 m、高さ 1.5 m ほどの土壘が認められる。土壘は南東隅で途切れ、虎口としている。土壘の内部は平坦であり、何らかの施設があったとみられる。本丸を中心とする曲輪群との関係は不明確であり、その性格解明についてはさらなる探求が必要であろう。

(10) 北側および北西側の曲輪群

本丸の北西側から北側、標高 70 m から 80 m の高さにおいて、平坦面があり、曲輪として認識しうる形状が確認できる。北西側の平坦面については駐車場建設によって造成されている部分があり、本来、どの程度の規模の平坦面が巡っているのか、明確でない。遺構として認識しうるか、今後の調査が必要である。



Fig.46 南の丸 II 現況



Fig.47 南の丸 IV 土壘

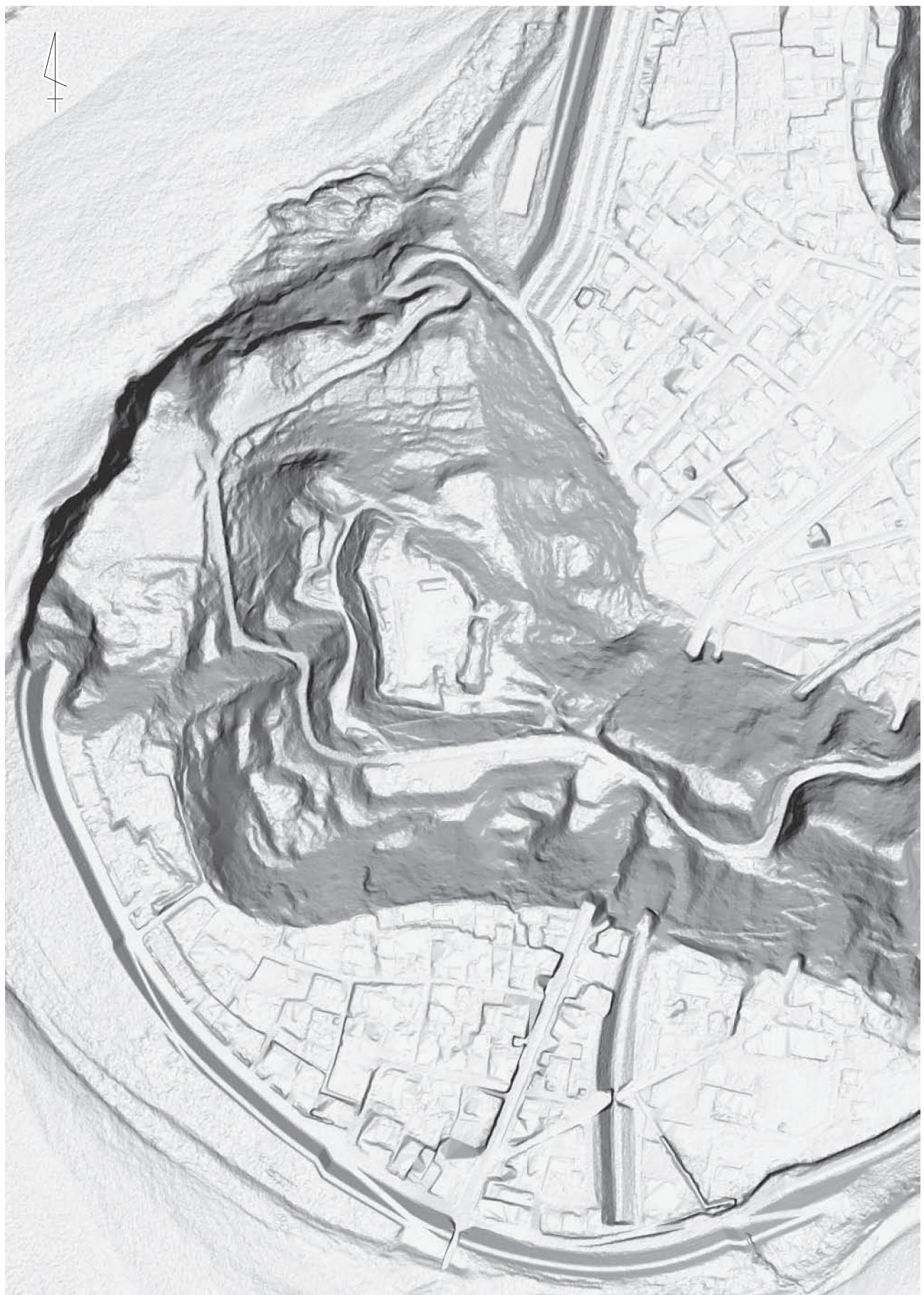


Fig.48 烏羽山城跡傾斜量図（1）

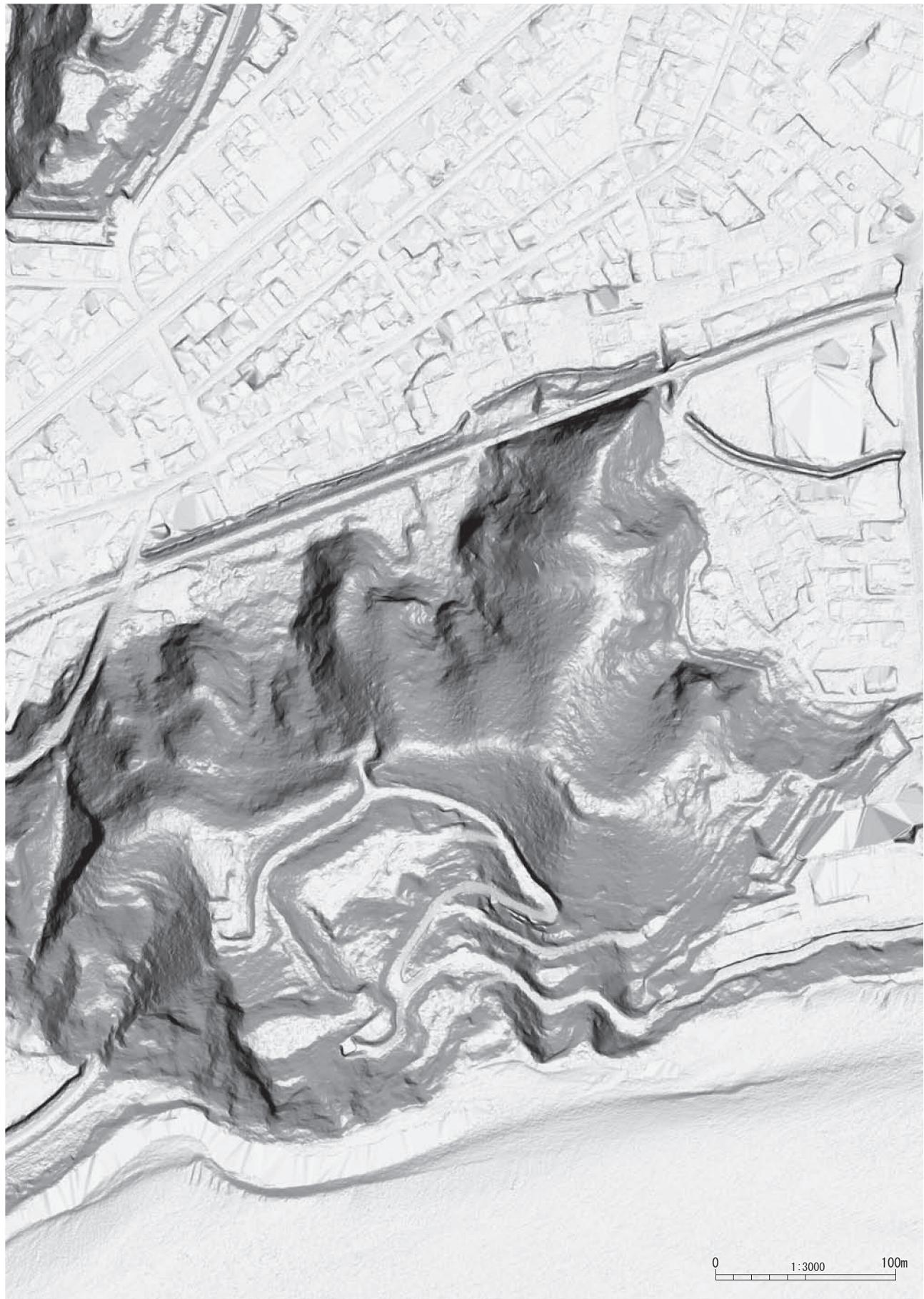


Fig.49 烏羽山城跡傾斜量図（2）

3 烏羽山城の構造

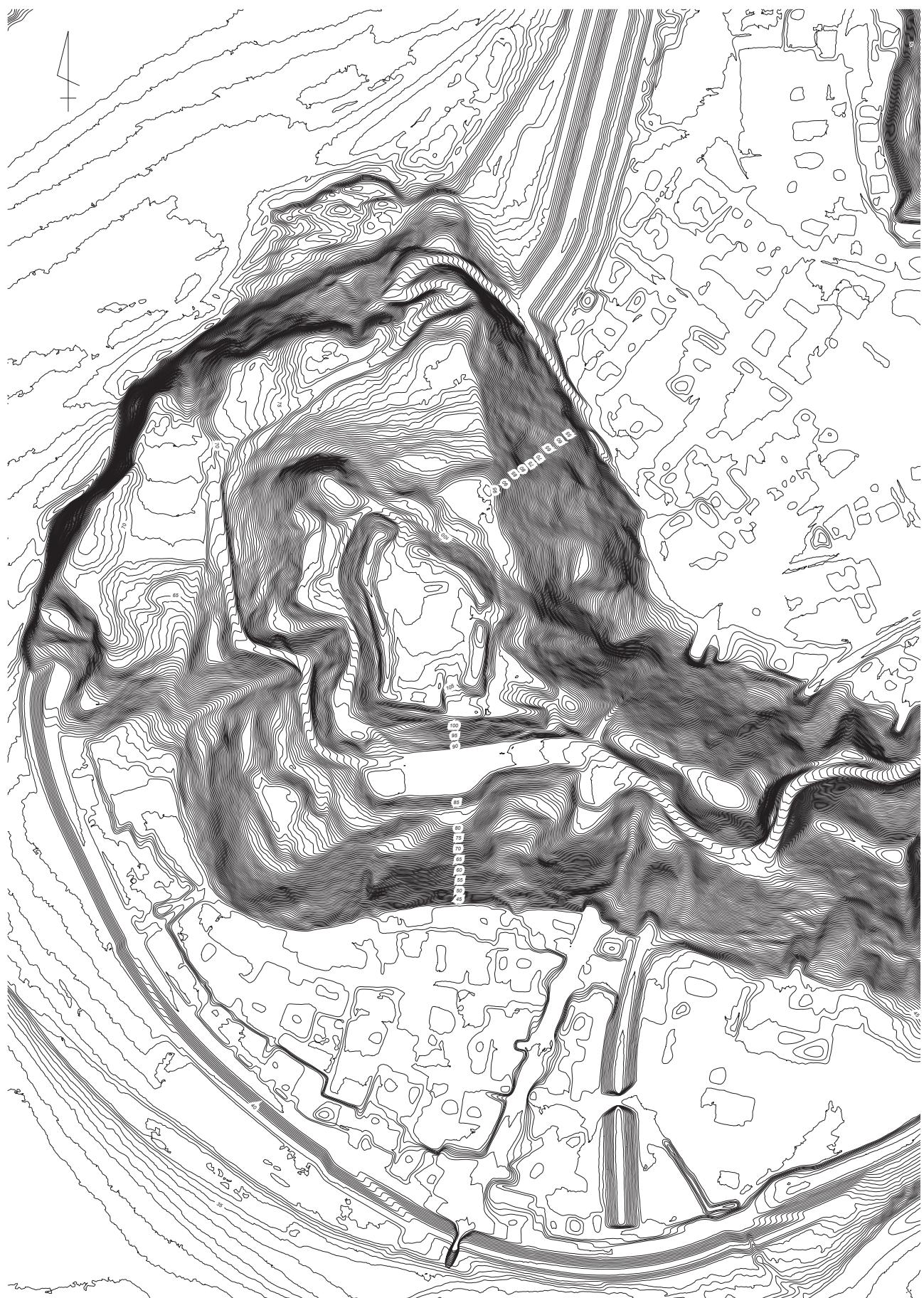


Fig.50 烏羽山城跡等高線図（1）

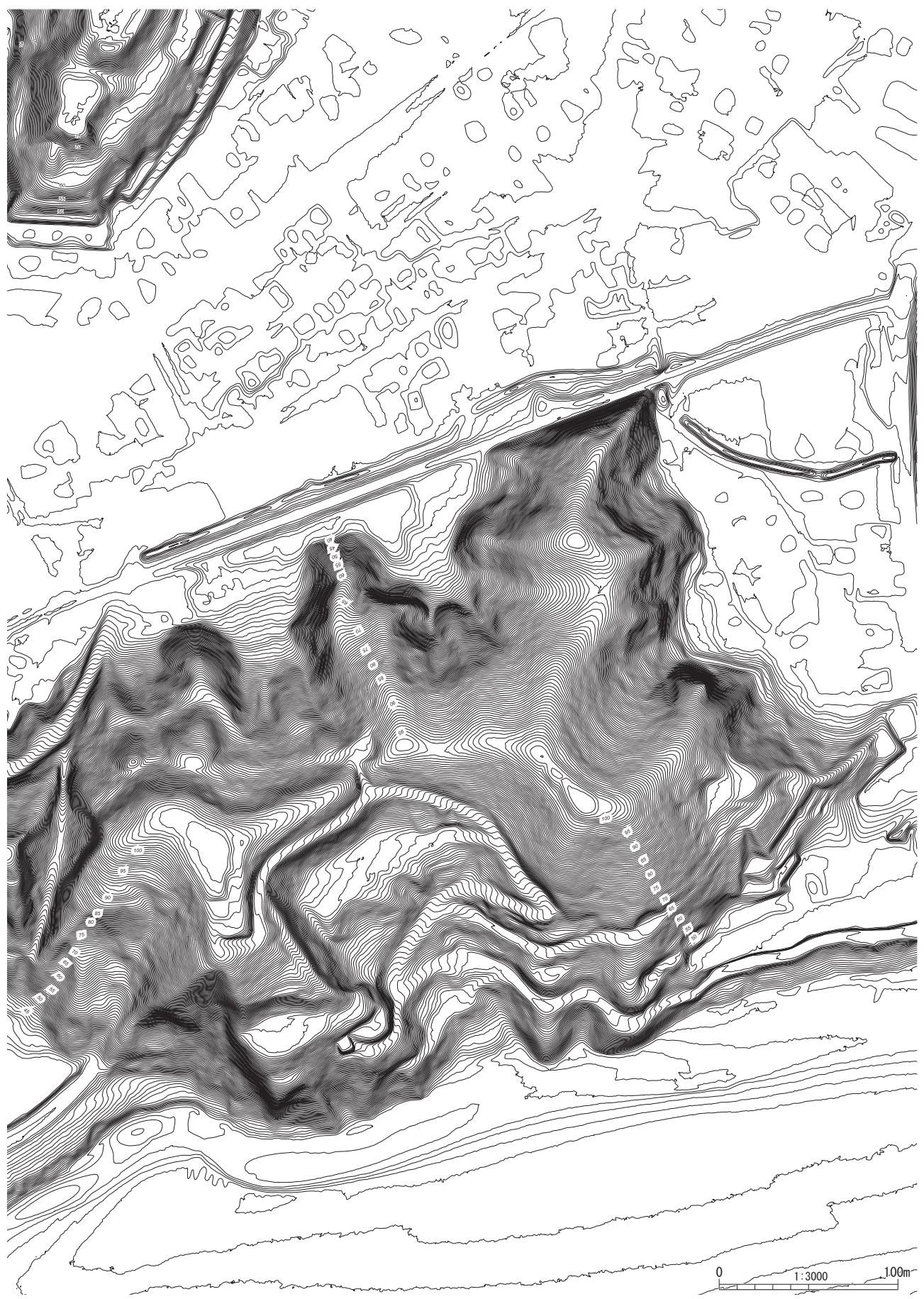


Fig.51 烏羽山城跡等高線図（2）

3 烏羽山城の構造



Fig.52 烏羽山城跡現況図（1）



Fig.53 烏羽山城跡現況図（2）

3 烏羽山城の構造



Fig.54 烏羽山城跡復元遺構図（1）



Fig.55 鳥羽山城跡復元遺構図（2）



Fig.56 烏羽山城跡現況遺構図（西群）